

# 京都大学構内遺跡調査研究年報

昭和56年度

京都大学埋蔵文化財研究センター

## 序

研究成果というものは、一篇の論文によっても発表できるが、その成果が一般に認識され、活用されるためには、それにつづく多くの論文の積み重ねが必要である。まして、研究機関の業績にいたっては、成果の積み重ねこそが大事である。当研究センターも、研究年報の数が増えるごとに、その存在価値が広く認められるようになってきた。本年報も、その長き将来への道の一里塚としての意味をもつものである。

京都大学吉田キャンパスの敷地は、京都市の東北隅の一角をしめるにすぎないが、縄文時代から近世にいたる各時代の遺構が累積しており、調査が精密でさえあれば、その成果は、日本の考古学研究に極めて有効な資料を提供しうるのである。しかも、当大学の敷地は、全国各地に分散しており、今回報告する京都府丹波町美月遺跡は、由良川水系上流の新発見の遺跡である。

今回もまた、多くの人々の御援助をいただいた。とくに、美月遺跡の調査にあたっては、京都府教育委員会をはじめ、丹波町、園部町、綾部市、福知山市の各教育委員会や、東急建設株式会社などの御世話になった。とくに、農学部附属牧場の善林明治助教授には公私にわたる御協力をいただき、感謝にたえない。

最後に、初代のセンター長をつとめさせていただいた小生も、本年4月1日退官することになったが、当センターの運営に関して、全面的に御援助いただいた本学関係当局、とくに施設部、経理部に対して、あつく御礼を申し上げるとともに、不十分な条件下によく頑張ってくれたセンター職員の諸兄姉に対しても、感謝の念を禁じえない。

昭和58年2月

京都大学埋蔵文化財研究センター長

樋口隆康

## 例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で昭和56年4月から同57年3月末日までに発掘、整理作業を終了した埋蔵文化財調査と保存の報告および京都大学構内遺跡に関する研究をまとめたものである。
- 2 国土座標に従って一辺50mの方形の地区割をして、遺跡の位置を表示した。
- 3 層位と遺構の位置については、国土座標第6座標系( $x = -108,000$   $y = -20,000$ )が( $X = 2,000$   $Y = 2,000$ )となる京都大学構内座標によって表示した。
- 4 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方式に従って、井戸：SE、道路：SFのように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物のうち、土師器の分類は、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ——白河北殿北辺の調査——』で示したものに従った。
- 6 遺物には、遺跡の調査名を示すローマ数字と調査ごとの通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通して表示を統一した。  
Ⅰ：京都大学本部構内AX28区の発掘調査  
Ⅱ：京都大学教養部構内AO21区の発掘調査  
Ⅲ：京都大学北部構内BD30区の発掘調査  
Ⅳ：京都府美月遺跡の発掘調査  
Ⅴ：昭和56年度京都大学構内の試掘・立合調査  
(例 Ⅰ1：京都大学本部構内AX28区出土遺物1番)
- 7 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4、遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のものは、それぞれに縮尺を明示した。
- 8 注は、各章ごとにまとめて章末に記載した。また、第Ⅰ部の参考文献は、本文中に、[著者名 発表年]の形式で表わし、第Ⅰ部の末に一括した。第Ⅱ部については、各章末の注に一括して記載した。
- 9 遺構・遺物の実測と製図は、泉拓良、清水芳裕、五十川伸矢、浜崎一志、吉野治雄、飛野博文、津隈久美子、川島はる代がおこなった。遺物の撮影は、清水が担当した。
- 10 本文は、樋口隆康、川上貢、泉拓良、清水芳裕、五十川伸矢、浜崎一志、飛野博文が各章を分担執筆した。執筆者名は、各章の初めに記した。
- 11 編集は、樋口の指導のもとに泉、五十川がおこない、清水、浜崎、飛野が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度

目 次

第1部 京都大学構内遺跡発掘調査報告

第1章 昭和56年度京都大学構内遺跡調査の概要	1
1 調査の大要	1
2 調査の成果	2
第2章 京都大学本部構内AX28区の発掘調査	5
1 調査の経過	5
2 層 位	5
3 遺構と遺物	7
4 小 結	14
第3章 京都大学教養部構内AO21区の発掘調査	17
1 調査の経過	17
2 層 位	17
3 遺 構	18
4 遺 物	19
5 小 結	24
第4章 京都大学北部構内BD30区の発掘調査	25
1 調査の経過	25
2 層 位	25
3 近世の遺構	26
4 古代の遺構	27
5 遺 物	27
6 小 結	30

第5章 京都府美月遺跡の発掘調査	31
1 層位	32
2 遺構	33
3 遺物	36
4 小結	38
第6章 昭和56年度京都大学構内の試掘・立合調査	39
1 北部構内	39
2 本部構内	41
3 教養部・医学部・病院構内	43
参 考 文 献	46
京都大学構内遺跡調査要項	48

## 第Ⅱ部 京都大学埋蔵文化財研究センター紀要

第1章 浄蓮華院と吉田構	57
——応仁の乱後の吉田の復原的考察——	
1 はじめに	57
2 浄蓮華院と吉田社領	57
3 吉田構	58
4 近世の吉田村	62
5 小結	64
第2章 山城の弥生後期の土器	67
——京都市左京区岡崎南御所町採集の土器について——	
1 はじめに	67
2 遺跡の概要	68
3 遺物	68
4 おわりに	74

## 図 版 目 次

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 2 京都大学本部構内 A X 28 区
  - 1 近世遺構全景(南から)
  - 2 中世遺構全景(南から)
- 3 京都大学本部構内 A X 28 区
  - 1 道路 S F 1, 杭列 S A 1, 溝 S D 18(東から)
  - 2 道路 S F 1, 野壺 S E 2 ~ S E 9, 溝 S D 20(東から)
- 4 京都大学本部構内 A X 28 区
  - 1 建物 S B 1(北から)
  - 2 井戸 S E 62(北から)
  - 3 土器溜 S K 51(東から)
- 5 京都大学本部構内 A X 28 区  
S D 20・S D 18出土遺物, 銅鏃, 磨製石鏃
- 6 京都大学本部構内 A X 28 区  
S K 51出土遺物
- 7 京都大学教養部構内 A O 21 区
  - 1 遺跡発掘後全景(北から)
  - 2 土器溜 S K 1(東から)
  - 3 土壙墓 S K 4(南から)
- 8 京都大学教養部構内 A O 21 区  
S E 6 出土遺物
- 9 京都大学教養部構内 A O 21 区  
S E 6・S E 3 出土遺物
- 10 京都大学北部構内 B D 30 区
  - 1 近世遺構全景(北から)
  - 2 古代遺構全景(北から)
- 11 京都大学北部構内 B D 30 区
  - 1 調査区東壁の層位
  - 2 土石流(南から)

- 12 京都府美月遺跡  
 1 調査区と周辺の地形(北西から)      2 土坑S K 1 検出(南東から)  
 3 土坑S K 3 (西から)
- 13 京都府美月遺跡  
 1 溝S D16の検出とS D15(北から)      2 土坑S K 4 (西から)  
 3 溝S D17(西から)
- 14 京都府美月遺跡  
 S K 4・S D17・淡茶褐色土層・黒褐色土層出土遺物
- 15 京都府美月遺跡  
 S D17・淡茶褐色土層・S R1上層・S D15・S B4・黒褐色土層・S K 2 出土遺物
- 16 岡崎南御所町採集の土器(1)
- 17 岡崎南御所町採集の土器(2)

## 挿 図 目 次

図1	本山窯採集の緑釉陶器, 灰釉陶器, 須恵器	4
図2	調査区中央南北畔西壁の層位〔京都大学本部構内A X28区の発掘調査〕	6
図3	近世の遺構	7
図4	道路S F 1 周辺の層位	8
図5	S D20出土遺物, S D18出土遺物	9
図6	中世の遺構	11
図7	S K51出土遺物	12
図8	S K51出土軒瓦, S E62出土軒瓦	13
図9	銅鏃, 磨製石鏃	14
図10	近世絵図にあらわれた白川道	15
図11	調査区東壁と西壁の層位〔京都大学教養部構内A O21区の発掘調査〕	17
図12	検出遺構	18
図13	土壇墓S K 4	19
図14	S E 6 出土遺物	20



## 表 目 次

表1	SE 6 出土遺物 .....	23
表2	SE 3 出土遺物 .....	23
表3	SK 1 出土遺物 .....	23
表4	京都大学構内遺跡のおもな調査 .....	53
表5	『兼見卿記』にみる吉田構の主要関連記事 .....	61

# 第 I 部 京都大学構内遺跡発掘調査報告

## 第 1 章 昭和56年度京都大学構内遺跡調査の概要

樋口 隆康 川上 貢 五十川 伸矢

### 1 調査の概要

京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営その他掘削工事にあたって、既知の遺跡との関係や過去の調査結果を勘案し、当該地に存在する埋蔵文化財の調査を、試掘、発掘、立合にわけておこなっている。

昭和56年度には、以下の28件の調査を実施した。

試掘調査	農学部附属亜熱帯植物実験所実習宿泊施設新営予定地(和歌山県串本町)	(第 1 章)
	農学部熱帯農学科校舎新営予定地(北部構内 B E 33区)	(第 6 章, 図版 1-103)
	農学部附属農業研究施設増築予定地(北部構内 B G 35区)	(第 6 章, 図版 1-104)
	北部構内実験排水槽設置予定地(北部構内 B D 30区)	(第 4 章, 図版 1-105)
	放射性同位元素総合センター増築予定地(医学部構内 A N 20区)	(第 6 章, 図版 1-106)
	放射線生物研究センター新営予定地(医学部構内 A N 20区)	(第 6 章, 図版 1-107)
	医学部附属病院産科病棟ドライエリア増設予定地(病院構内 A K 17区)	(第 6 章, 図版 1-108)
発掘調査	北部構内実験排水槽設置予定地(北部構内 B D 30区)	(第 4 章, 図版 1-109)
	理学部附属瀬戸臨海実験所研究棟新営予定地(和歌山県白浜町)	(整理中)
	工学部電気系学科校舎附属施設設置予定地(本部構内 A X 28区)	(第 2 章, 図版 1-110)
	教養部構内吉田食堂建設予定地(教養部構内 A P 22区)	(発掘中, 図版 1-111)
立合調査	農学部附属植物生殖質研究施設給排水管理設工事(京都府向日市)	(第 1 章)
	医用高分子研究センター校舎新営予定地(病院西構内 A G 12区)	(表 4, 図版 1-112)
	原子エネルギー研究所施設新営工事(京都府宇治市)	(表 4)
	農学部附属農業研究施設アース設置工事(北部構内 B G 36区)	(表 4, 図版 1-113)
	理学部附属瀬戸臨海実験所実験水槽新営工事(和歌山県白浜町)	(第 1 章)
	京都市舗道拡張工事(本部構内 A T 21区)	(第 6 章, 図版 1-114)
	電気管理設工事(教養部構内)	(表 4, 図版 1-115)
	附属図書館新営工事(本部構内 A U 21区)	(表 4, 図版 1-116)
	農学部附属農業研究施設増築工事(北部構内 B G 35区)	(第 6 章, 図版 1-117)
	文学部身障者学生用エレベーター設置工事(本部構内 A X 26区)	(第 6 章, 図版 1-118)
	構内基幹整備給水管管理設工事(医学部・病院構内)	(表 4, 図版 1-119)
	構内実験排水管理設工事(教養部・医学部構内)	(表 4, 図版 1-120)
	構内ヘリウムガス回収管理設工事(本部構内)	(表 4, 図版 1-121)

分布調査	農学部附属演習林上賀茂試験地(京都市北区上賀茂本山)	(第1章)
資料整理	工学部電気系学科校舎新営予定地(本部構内A X28区)	(第2章, 図版1-90)
	農学部附属牧場施設新営予定地(京都府丹波町)	(第5章)
	教養部構内実験排水槽設置予定地(教養部構内A O21区)	(第3章, 図版1-91)

なお、農学部附属亜熱帯植物実験所実習宿泊施設新営予定地の試掘調査は、周知の遺跡である大森山C地点遺跡〔文化庁文化財保護部編 76 p.44〕に近接するため実施したものであるが、予定地内には遺跡が存在しないことを確認できた。この調査にあたっては、亜熱帯植物実験所の職員の協力を得た。

工学部電気系学科校舎附属施設設置予定地の発掘調査は、昭和55年度調査区の西北にオイルタンク付設のため実施したもので、昭和55年度に検出した土器溜の西半部分を完掘し、大量の一括遺物を得た。この成果については、第2章を参照されたい。

農学部附属演習林上賀茂試験地の分布調査は、当センターの本年度の研究活動の一環として実施したもので、同志社大学講師鈴木重治氏の協力を得た。調査の結果、本山窯の緑釉陶器・須恵器生産の研究のための基礎資料を採集することができた。

## 2 調査の成果

昭和56年度の調査によって、いくつかの新しい知見を得た。その詳細は第2章以下で述べることとし、本節では、それらを整理して本年度の成果の要点を略述する。

**吉田キャンパスの遺跡** これまでの調査によって、鴨東の一角を占める吉田キャンパス内の各時代の遺跡は、その立地や周辺の地形あるいは文献などから、いくつかのまとまりを想定することができる〔京大埋文研81 b pp. 5-12〕。このうち、縄文・弥生時代の遺跡は、旧白川の形成した扇状地上の微高地と、その南または西の下底部に位置している。扇中央部にあたる北部構内B E33区の試掘調査では、縄文晩期の土器が出土し、この周辺に遺跡群の中心があったことを確認した(第6章)。また、北部構内B D30区では、弥生前期末から中期初頭の短期間に厚く堆積し、それ以降の遺跡形成に大きな影響を与えた黄砂層の下に、土石流の痕跡を検出したことも重要である(第4章)。B D30区周辺は、黄砂層が特に厚く、弥生前期以前の河川が存在が推定されており〔泉78 pp.43-48〕、北部構内一帯の地形復原のための好資料を提示したといえよう。

本年度の調査では、弥生土器はB D30区で出土し(第4章)、本部構内A X28区では、弥生中期とみられる銅鏃、磨製石鏃を発見した(第2章)。しかし、良好な遺構や包含層を確認することはできなかった。中期以降の弥生時代の遺跡は、吉田キャンパス南方の左京区岡崎周辺で、かなり確認されており、本年報では、そのひとつである岡崎南御所町採集の

土器について研究をおこなった(第Ⅱ部第2章)。

前述の北部構内BD30区の調査では、10～11世紀の土師器・黒色土器・緑釉陶器を含む比較的良好な遺構や包含層を検出し、平安前・中期の軒瓦も出土した(第4章)。BD30区の位置する北部構内南半域は、平安前・中期の遺物の出土量のめだつ地域であり、天台座主良源が舎利会を催した吉田寺の寺域とする推定〔岡田80 pp. 61-67〕が、より確実になったといえよう。

次に、教養部構内AO21区の発掘調査は、教養部西半域では、はじめてのものであり、13～14世紀の井戸、土墳墓、土器溜などを検出し、多くの一括遺物を得た(第3章)。京都大学吉田キャンパス出土資料を中心とした、古代・中世の土器編年の大綱は『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』に示したが、AO21区の調査で得たSE6・SE3出土遺物は、本部構内AX28区のSK51出土遺物(第2章)などとともに、これを補完充実させる良好な資料といえよう。なお、現在AO21区の東に隣接するAP22区で発掘調査をすすめており、大量の古代・中世の遺構、遺物を発見している。これらを総合し、吉田山西南麓一帯の遺跡の実態が明らかにしうると考える。

本部構内AX28区では、西に隣接するAW28区の調査と同様に、近世白川道、溝、柵、野壺などを検出し、18世紀から19世紀にいたる白川道沿道の景観変遷をあとづける資料を得た(第2章)。近世の道路遺構は、昭和55年度に本部構内AT27区で調査しており〔五十川81 pp. 21-34〕、本年度も立合調査によって、それらの延長部分を確認している(第6章)。第Ⅱ部第1章では、これらの成果をもとに、文献や近世絵図を参考にしつつ、吉田社周辺の近世の景観復原をおこなっている。この近世の道路は、それ以前の吉田周辺を知るうえでも重要であり、中世後半の勅修寺家の菩提寺浄蓮華院の動向や吉田構成立の過程解明のための資料と考えられる。

**吉田キャンパス外の附属施設の遺跡** 京都府船井郡丹波町蒲生野所在の美月遺跡の発掘調査では、弥生中期の溝のほか12世紀ごろの掘立柱建物、土坑などを検出し、弥生土器・石器、中世の土師器・瓦器が出土した(第5章)。由良川水系上流に位置する弥生時代の遺跡としては、はじめての調査例であり、丹波地方の弥生土器あるいは瓦器の地域性を考察するための資料を得たことは特筆にあたいする。

また、和歌山県西牟婁郡白浜町瀬戸臨海所在の瀬戸遺跡の発掘調査では、縄文晩期の甕と弥生前期の壺が共伴する土坑を検出し、古墳時代・古代の製塩土器が大量に出土した。これらは、現在整理中であり、その詳細については報告書で明らかにする予定である。そ

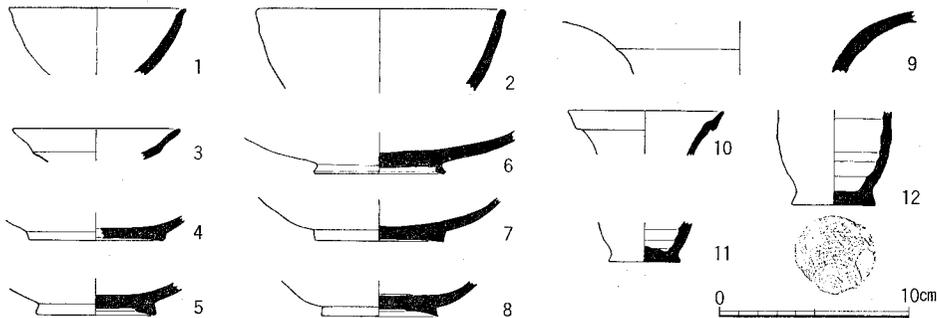


図1 本山窯採集の緑釉陶器(1~5・9), 灰釉陶器(6), 須恵器(7・8・10~12)

のほか、実験水槽新営工事の立合調査では、縄文後期の宮滝式土器を採集した。

本山窯跡は、京都市北郊岩倉盆地に所在する、平安前・中期ごろの緑釉陶器を生産した遺跡である〔宇佐56 pp. 30-33〕。今回の分布調査の結果、農学部附属演習林上賀茂試験地東方の畑地に遺物の集中する地点を確認し、多数の緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器を採集した(図1)。採集した緑釉陶器は36片。器種には碗・皿・壺があり、底部には平底・蛇の目高台・削り輪高台のものが各1点ずつある。採集した須恵器は156片で碗・皿・壺がある。碗・皿の89片のうち、平底は10片、蛇の目高台3片、削り輪高台5片、付け高台3片と、平底のものが多く注目される。また、水瓶が28片あり、碗・皿に次いで多い。また、周辺で、縄文土器や中世の遺物なども採集しており、当地に多様な遺跡が存在することも確実となった。

京都府向日市物集女に所在する農学部附属植物生殖質研究施設の立合調査では、打製石器や須恵器のほか、中世後半の遺物を採集した。この一帯は、中海道遺跡として、これまでに、弥生後期から古墳時代の遺構・遺物が発見されている〔高橋ほか79 pp. 51-71〕。また、研究施設の東側の畑地には、土塁と濠が現存し、「御所街道」、「中海道」など垣内を意味する字名が存在するため、中世後半の城館が存在した可能性が高い〔木下71 pp. 179-181〕。

以上のように、吉田キャンパス外の附属施設においても、多くの遺跡を調査し、あるいは新たに遺跡を確認した。今後、これらの遺跡に対しても、その実態解明のための調査研究をおこない、保存の策を講ずる計画である。

## 第2章 京都大学本部構内 AX28 区の発掘調査

五十川 伸矢

### 1 調査の経過

昭和53年、工学部イオン工学実験施設および電気工学研究室等の新営工事が計画されたため、電気系教室の敷地内に4ヶ所の試掘坑を設けて、遺跡確認のための試掘調査をおこなった。この試掘調査の結果、建物新営予定地の発掘調査を2期にかけて実施することになり、昭和53年度にイオン工学実験施設にあたる敷地(AW28区)の調査をおこなった。この調査では厚い表土層の下に埋没していた道路遺構を確認し、それが江戸時代の白川道であることが明らかになった〔岡田・吉野80 pp. 21-30〕。今回の昭和55年度の調査は、これにつづく第2期のもので、第1期の東側に隣接する地域が調査対象となった(図版1-90)。調査面積は1100㎡。発掘調査は、7月に開始し11月に終了した。なお、昭和55年度調査区の西側に隣接する地域にオイルタンクを付設することになったため、昭和56年度に追加調査をおこなった(図版1-110)。これも、あわせて報告する。

### 2 層位

調査区は、吉田山西麓にほど近く、北白川扇状地上に位置する。現地表の標高は、北端で60.4m、南端で59.4mを示し、北から南に緩やかに傾斜する。調査区の層位は、基本的にはAW28区のそれと、ほぼ軌を一にしている。層位の状況は北東から南西にはしる道路SF1(近世白川道)をはさんで、北と南でかなり異なった堆積を示す(図2)。

まず、北半では、上から表土(第1層)、暗灰色土(第3層)、赤褐色土(第10層)、茶褐色土(第12層)、黄砂(第13層)、白砂(第14層)、黄灰色シルト(第15層)の順に堆積がみられる。これは、京都大学本部構内における基本的な堆積序列をなしている。暗灰色土は、近世以降の耕土で遺物は少量である。赤褐色土は、中世京都I期ごろの遺物を含むが、茶褐色土以下は無遺物である。調査区東南域へ広がる黄砂混り黒褐色土(第11層)は、黄灰色シルト上面より上に堆積し、砂取り穴の埋土と考えられる。

次に、南半では、表土(第1層)、黄灰色砂質土(第2層)、暗灰色粘質土(第6層)、黄褐色土(第7層)、灰褐色土(第8層)、灰褐色粘質土(第9層)、黄砂(第13層)、白砂(第14層)、黄灰色シルト(第15層)の順に堆積がみられる。また、溝SD18周辺には、比較的緩やかな流水によって堆積したと考える黄灰色細砂(第4層)、青灰色細砂(第5層)が存在する。これらのうち、黄灰色砂質土は、明治時代の堆積である。暗灰色粘質土上面では、幅0.4m

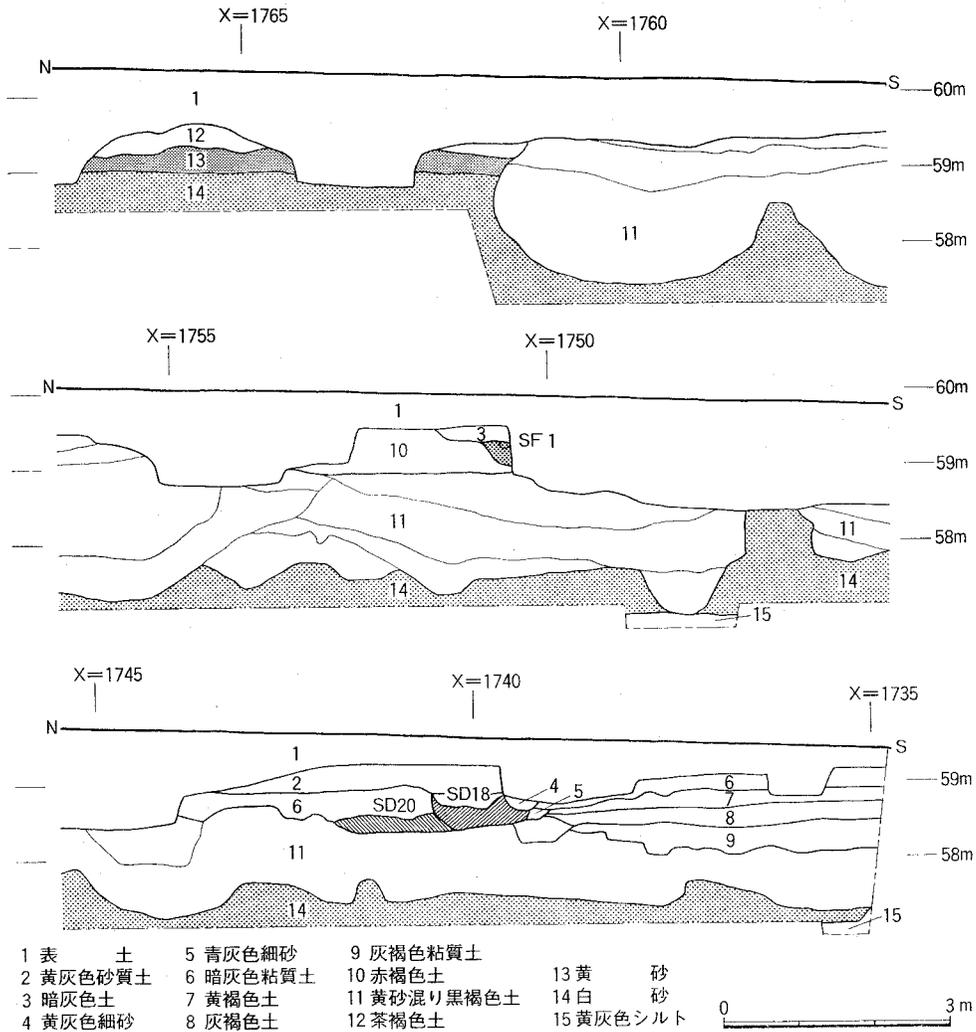


図2 調査区中央南北畔西壁の層位 縮尺 1/100

の畦畔を検出しており、暗灰色粘質土は、近世の水田耕土と推定できる。黄褐色土、灰褐色土は、中世末から近世にかけての畑土で、黄褐色土上面では、溝SD20に平行する柵列を検出した。溝SD20と道路SF1の間では、暗灰色粘質土の下に黄砂が存在し、その上面は、緩やかに北から南へ傾斜している。溝SD20以南の黄砂、黄砂混り黒褐色土の上面は、堅くしまり、赤褐色を呈するところがある。また、この面と灰褐色粘質土の間には、薄い砂礫層が散在し、河川の氾濫にみまわれた状態を示すが、これは、AW28区でも検出している。

### 3 遺構と遺物

本調査区で検出した遺構には、道路、溝、杭列、柵、野壺などからなる近世の遺構群と、掘立柱建物、井戸、土器溜、土坑などからなる中世の遺構群がある。そこで、近世、中世の順に、検出した遺構と出土遺物について述べ、さらに弥生時代の遺物の説明をおこなう。

#### (1) 近世の遺構・遺物

調査区北半には、明確な近世の遺構を確認しておらず、一帯は畑であったと考えられる。南半には、近世白川道と沿道の溝、柵、野壺などの遺構を検出した(図版2-1, 図3)。

道路SF1(図版3, 図3・4) 昭和53年度にAW28区で検出した近世白川道の東への連続部分である。道路SF1は、北に高く、南に低い緩やかな傾斜地を、北側に崖面を造って切通し、路面を造成している。路面は、小礫を混じえた土砂もしくは黒褐色粘質土を堅くたたきしめたような状況を示し、I~Vの5枚を数えることができる。また、路面南端が、SF1-II以降、0.3mほど南へ移動していることが注目される。路面のうち、SF1-I・IIには、幅20cm、深さ

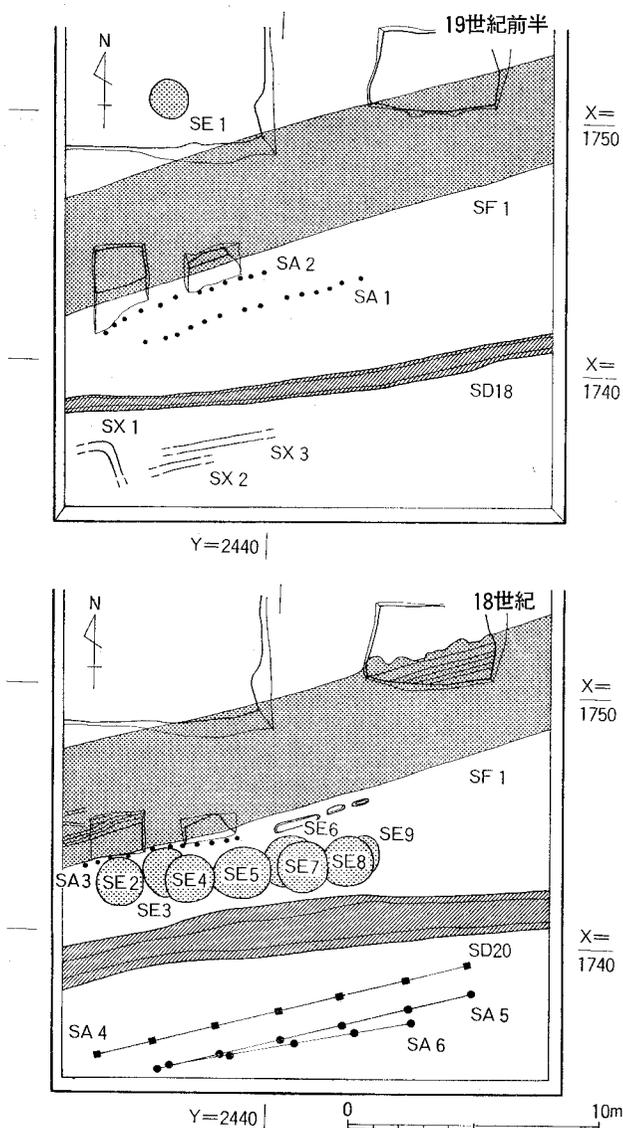


図3 近世の遺構 縮尺1/300

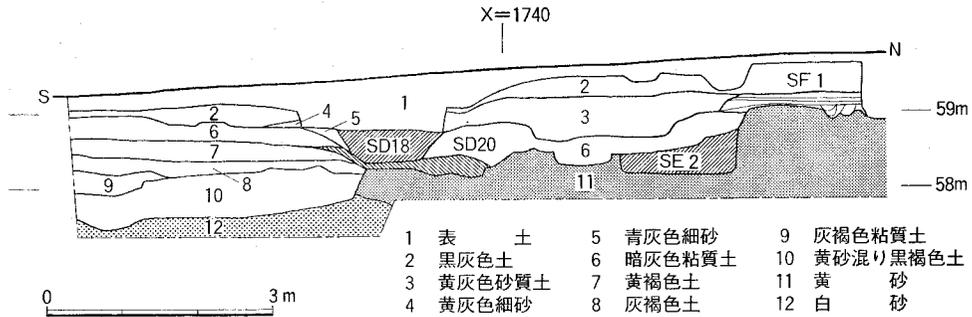


図4 道路SF1周辺の層位 縮尺1/100

20cmの轍がともなり。ちなみに、AW28区検出の道路SF1においては、9対の轍がみられ、両轍の間隔が1.2mであることが判明している。轍は、切合い関係から、北から南へと移動していることがわかり、路面南端の移動と考え合せるならば、道路全体が南遷したといえるだろう。路面北端の崖下には、幅30cm、深さ50cmの側溝を検出したが、これは路面の南遷によって土砂が埋積している。

溝SD18・SD20(図版3, 図3・4) ともに、道路SF1の南を平行してはしる。SD18は、幅1.4m、深さ0.4mで、暗灰色粘質土の上面で検出した。埋土は砂礫からなる。SD20は、幅2.0m、深さ0.3mで、暗灰色粘質土を除去した段階で検出した。南側の溝肩には、花崗岩製の石仏を据えている。SD18と同様、埋土は砂礫である。両溝の埋土から大量の陶磁器などが出土した(図版5, 図5)。

I1は土師器皿。I2は陶器灯明皿。内面に灰黄色の釉がかかる。I3は京焼の皿で、梅花文を描く。I4・I6は、くらわんか手の染付皿・碗。I5は染付半筒型碗。I7はべいとう乗燈。茶褐色の釉がかかる。I8は染付ぶつしょうく仏餉具。I9は陶器燈明皿。I10・I11は染付皿。I11には清水六兵衛の「清」押印がみえる。I12・I13は染付碗。I13は「道八」の銘をもつ。I14は徳利、I15は乗燈。ともに茶褐色の釉がかかる。I16は備前産すり鉢である。

杭列SA1～SA3(図版3-1, 図3) 道路SF1と溝SD18との間で、これらとほぼ平行にならぶ杭列である。柱間寸法は40～50cmである。SA1・SA2は、暗灰色粘質土から掘込んだもので、層的にみてSA1のほうが新しいと判断した。SA3は、黄砂上面で検出した。これらは、傾斜地に造成された道路SF1の路肩を保護し、南側の溝SD18・SD20の流水による侵食を防止するためのものであろう。

柵SA4～SA6(図版2-1, 図3) 溝SD20の南側に、これと平行してならぶ柵である。柱間寸法は約2.5mである。いずれも黄褐色土上面で検出した。SA4の柱掘形

は隅丸方形，SA5・SA6は円形をなす。これらは畑作にともなうものであろう。

野壺SE1～SE9(図版3-2, 図3) 道路SF1の沿道に，9基の野壺を検出した。掘形は1.6～2.0mの円形で，深さは検出面から0.6m程度である。このうちSE1は，SF1の北側に位置し，暗灰色土上面で検出した。漆喰製の枠をもつ唯一のものである。SE2～SE9は，SF1の南側に位置し，暗灰色粘質土を除去した段階で検出した。互いに切合っており，切合い関係を検討すると，同時に3基程度存在した可能性がある。このうちSE2・SE4では，掘形の底部に桶の枠板と棧の痕跡を残しており，木製の桶を据えつけていたと推定できる。SE3・SE5～SE9も同様の構造とみてよいだろう。

畦畔SXI～SXI3(図3) 溝SD18の南側の暗灰色粘質土上面で検出した。その幅は0.4m，残存高は数cmである。SXIはL字状に折曲り，水田の境界を推定できる。

以上の近世の遺構は，検出した層位や出土遺物から，時期を異にする2群にわけることができる(図3)。このうち，古い1群は，道路SF1-I，溝SD20，野壺SE2～SE9，杭列SA3，柵SA4～SA6である。また，新しい1群は，道路SF1-II～V，溝SD18，野壺SE1，杭列SA1・SA2，畦畔SXI～SXI3である。これらは，溝

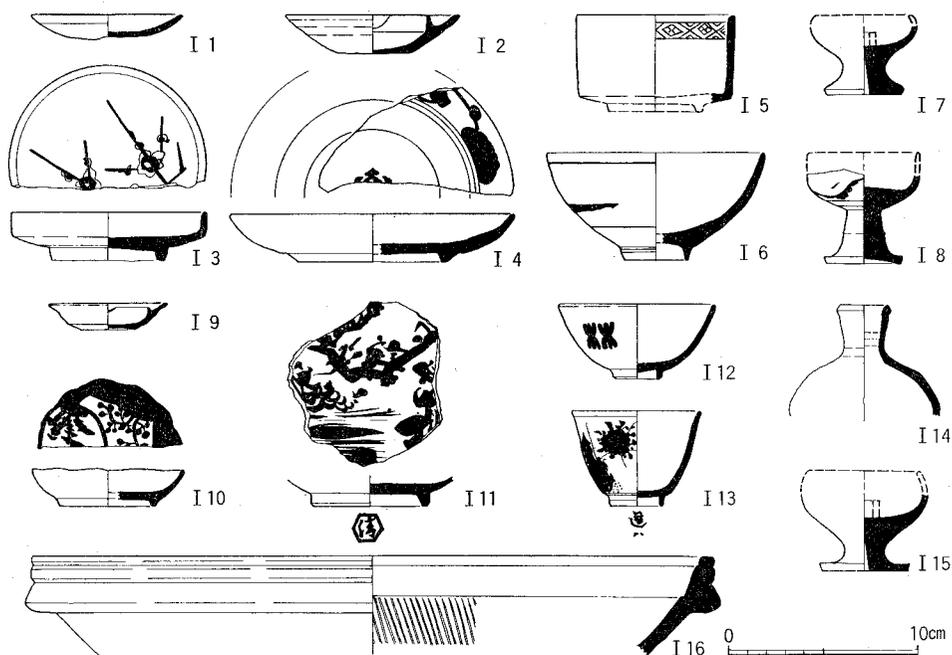


図5 SD20出土遺物(I1土師器, I2・I3・I7陶器, I4～I6・I8染付), SD18出土遺物(I9・I14～I16陶器, I10～I13染付)

S D20・S D18の出土遺物から、前者が18世紀ごろ、後者が19世紀前半ごろと考える。

(3) 中世の遺構・遺物(図版2-2)

建物S B I(図版4-1, 図6) 調査区の北東の壁ぎわに、柱穴を3個検出した。柱あたりは確認していないが、柱間は2.0m, 東側へ掘りなおした形跡がある。方位は、ほぼ真北方位を示す。南または北に続く柱穴がなく調査区の東にのびる掘立柱建物であろう。

道路S F 2(図6) 近世の溝S D20以南の黄砂上面もしくは黄砂混り黒褐色土上面は、やや赤褐色を帯びた堅い面をなしている。明確な側溝、轍などを検出していないが、あるいは中世にさかのぼる道路遺構の可能性はある。

井戸S E62(図版4-2, 図6) 調査区北端の壁ぎわで、一辺1.7mの隅丸方形の掘形をもつ井戸S E62を検出した。側壁崩落の危険が高いため、現地表下6mまでで掘削を中止し、底には至っていない。このため、井戸側の保護方法、水溜めの構造は不明である。埋土から、中世京都I期ごろの土師器とともに軒瓦が出土した(図8)。I40は珠文を配する巴文軒丸瓦。I41は剣頭文軒平瓦。I42は扁行唐草文軒平瓦。I41・I42ともに折り曲げ造りで、瓦当面と凹面との境を斜めに篋で削る。I44は波文軒平瓦で、瓦当面に布目痕が残り、折り曲げ造りであることが明瞭である。12世紀末から13世紀にわたるものと考えてよいだろう。

土器溜S K51(図版4-3, 図6) 調査区西辺で検出したS K51は、大規模な土器溜で、東西7m, 南北5mの不整形の掘形を示し、深さは1.5mである。一部を不定形土坑に切られている。これから、整理箱40箱分の遺物が出土した。出土遺物は土師器皿・碗が圧倒的に多く、東高西低の傾きをとる状態で検出したものが多い。そのほかに、瓦器、須恵器、陶磁器などが出土した。これらは、中世京都I期中段階の良好な一括資料と考えられる(図版6, 図7・8)。

I17~I20・I25・I26は赤褐色を呈する土師器皿。すべてI段撫で面取り手法D<sub>5</sub>類口径は大型皿は13cm, 小型皿は9cmのものが多数を占める。I21~I24・I28・I29は灰白色を呈する土師器碗。大型碗はD<sub>4</sub>類, 小型碗はD<sub>5</sub>類である。口径は大型, 小型それぞれ13cm, 9cmを示すものが多い。I27・I30は土師器受皿。I27は赤褐色, I30は灰白色を呈する。I31は灰白色の土師器高杯。杯部と軸部の境は肥厚して、あまい稜をもつ。軸下半部に縦方向の篋削りを施し、13面の面取りをなす。I32・I33は瓦器碗。I32は口径が14cmで内面に連結輪状、螺旋状の暗文を施す。口縁端内面には沈線をもつ。橋本久和のいうⅢ-2にあたるものである[橋本80p.90]。I33は口径9cmの小型碗で、篋によって5弁

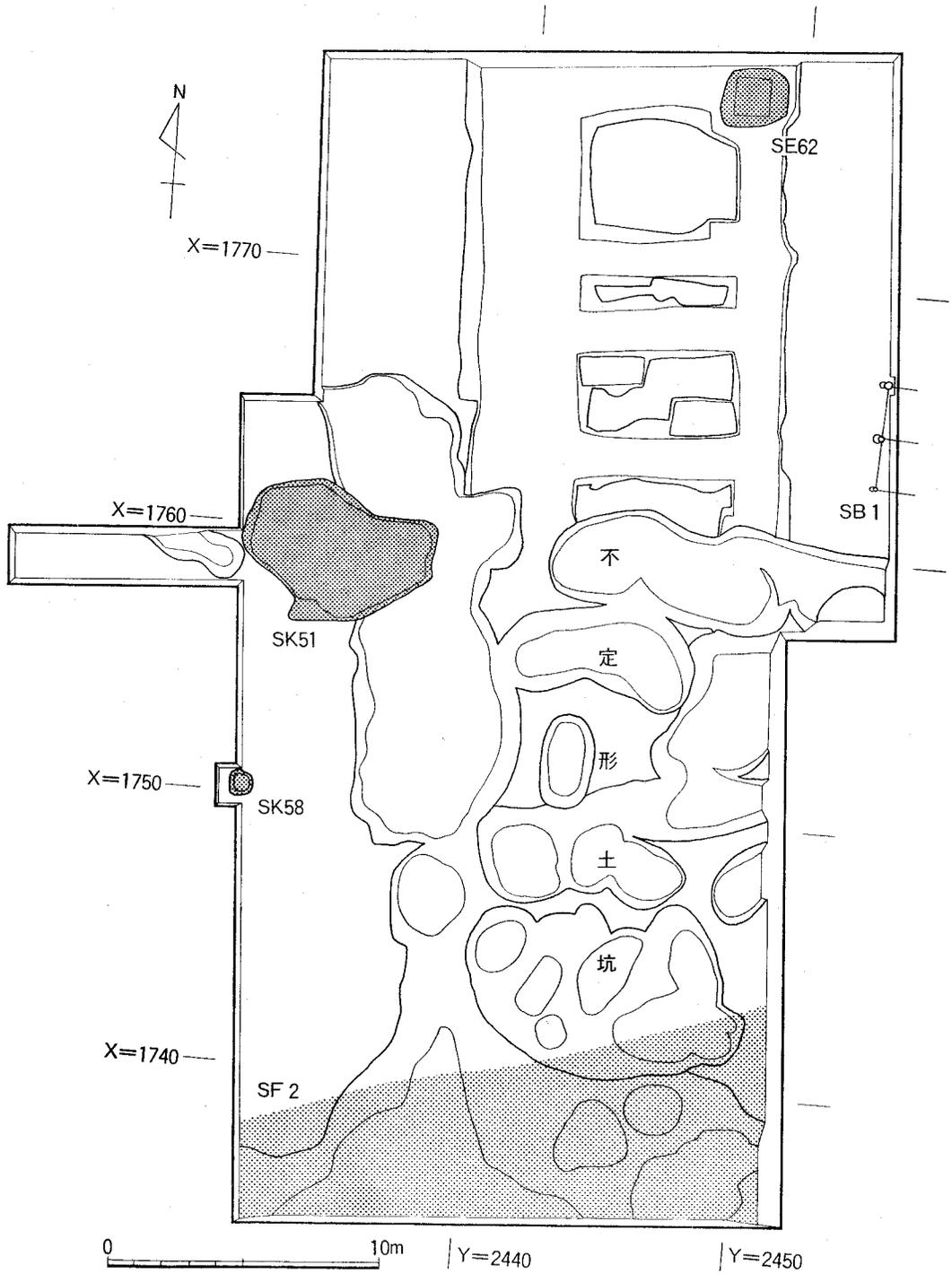


図6 中世の遺構 縮尺1/250

の輪花状に形成している。見込みに菊花状の暗文を施す。I 34は龍泉窯系劃花鎊蓮弁文碗。口径14cmで釉調は灰青色を呈する。横田賢次郎・森田勉のいう龍泉窯系青磁碗 I-5 にあたる〔横田・森田78p.13〕。I 35は青磁合子蓋。印刻の草花文をもち、釉調は緑青色を呈する。I 36は土師器鉢。口縁は大きく外方に開き、内外面に粘土紐の継ぎ目を残す。一般に塩壺といわれているものである。I 37は須恵器すり鉢。宇野隆夫のいう、すり鉢4類にあたる〔宇野81 p.78〕。I 38は瓦器盤で、口縁端部が丸味をもち、端部が内側に肥厚す

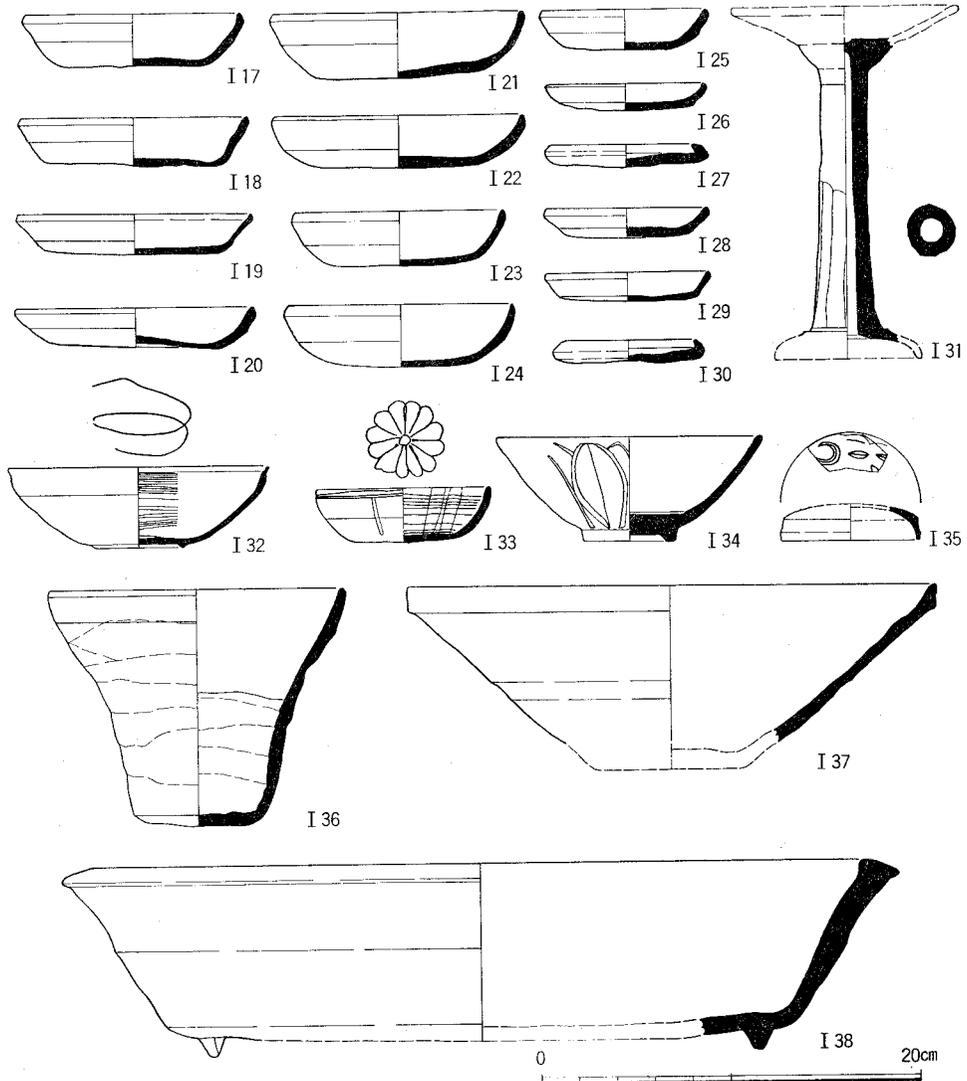


図7 S K 51出土遺物(I 17～I 31・I 35土師器, I 32・I 33・I 38瓦器, I 34・I 35青磁, I 37須恵器)

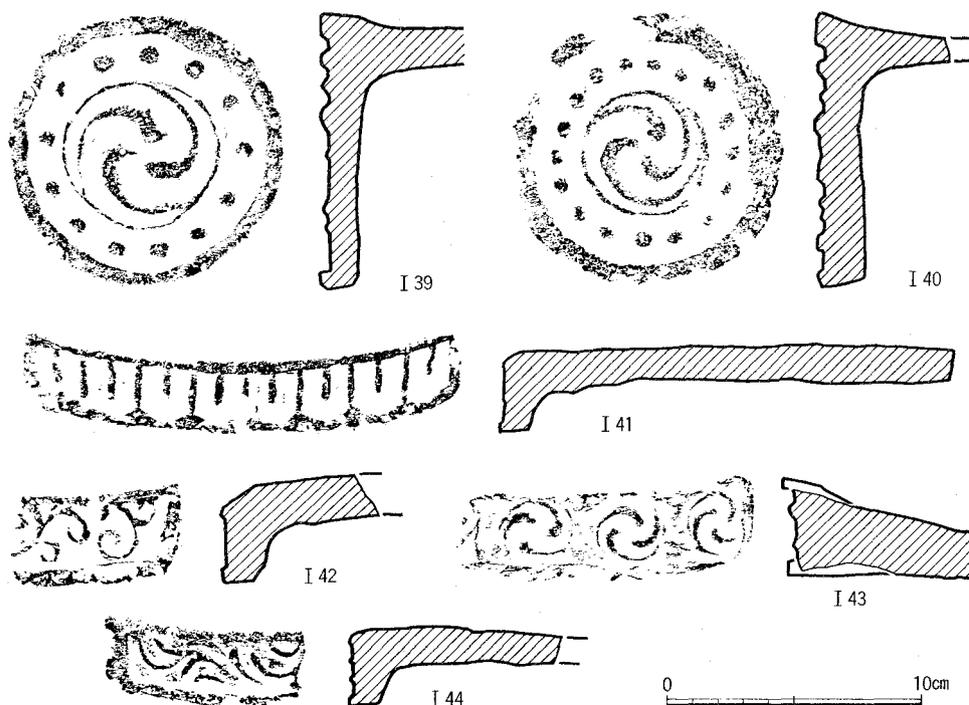


図8 SK51出土軒瓦(I 39・I 43), SE62出土軒瓦(I 40~I 42・I 44) 縮尺1/3

る。このほか、巴文軒丸瓦(I 39)、連巴文軒平瓦(I 43)、フイゴの羽口や元祐通寶、淳化元寶、崇重寧寶などの北宋銭が出土した。

土坑SK58(図6) 東西1m、南北0.5mの土坑で、調査区西辺で検出した。こぶし大の礫と須恵器甕・すり鉢が出土した。すり鉢はSK51出土I 37に類似する。

不定形土坑(図版2-2, 図6) 調査区中央部から南東にかけて、不定形に深く掘った多数の土坑を検出した。これらの土坑は、黄灰色シルト層の上面が浅い部分には分布せず、シルト層を掘込むものはない。また、土坑どうして掘形を深く切合うものがないため、砂取り穴と考えてよいだろう。埋土中から、中世京都I期ごろの土師器、陶磁器が少量出土した。

### (3) 弥生時代の遺物

本調査区で弥生時代の遺構は検出していないが、弥生時代の銅鏃、磨製石鏃を各1点発見した(図版5, 図9)。銅鏃(I 45)は調査区南辺の黄褐色土上面で出土した。全長3.8cm、厚さ4mm。柳葉腸扶式で中央がやや厚いが扁平で鋸はない。中央部に径5mmの小孔がある。

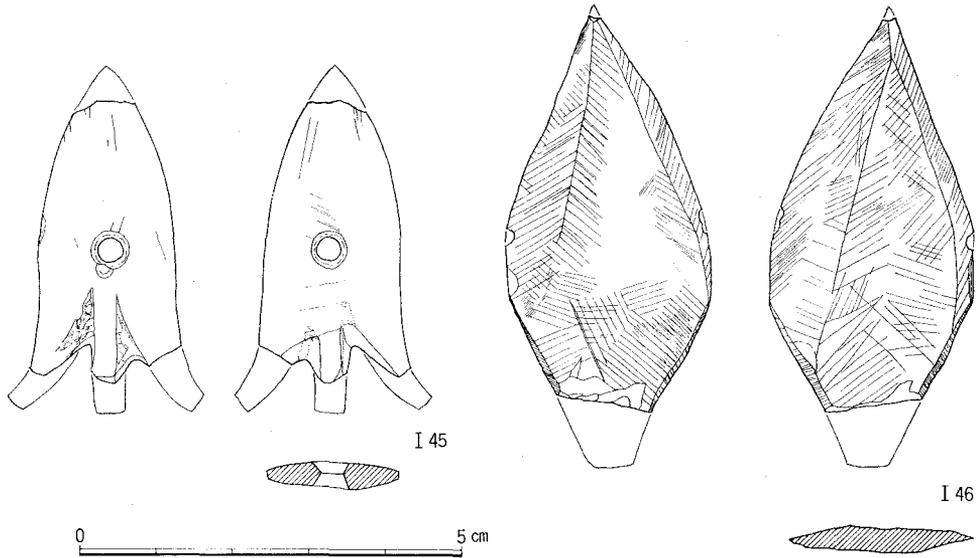


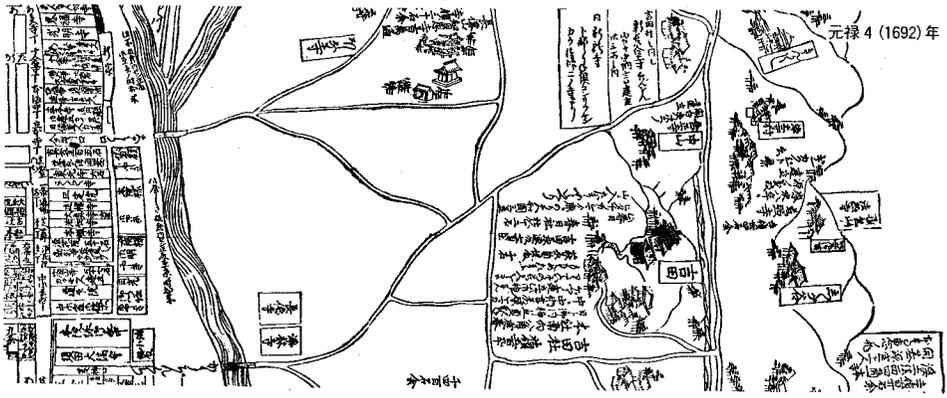
図9 銅鏃, 磨製石鏃 縮尺1/1

鎔范がずれたため断面が対称形をなさず、茎のつけ根の部分に、甲張りを残している。愛知県渥美町中山貝塚出土品に類似するものがある〔紅村59 p.117〕。磨製石鏃(I 46)は調査区西南辺の不定形土坑埋土から出土した。石材は粘板岩で全長5.0cm, 最大幅3.8cm, 厚さ4mm。凸基有茎式で、茎部の下半を欠失している。大阪府枚方市田口山遺跡出土品〔瀬川76 p.18〕, 京都府八幡市金衛門垣内遺跡出土品に、酷似するものがあり、弥生中期の遺物と考えられる。

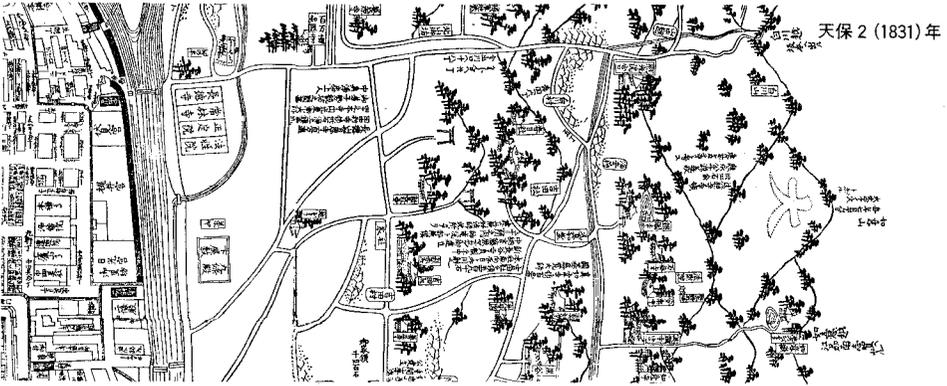
#### 4 小 結

18世紀の白川道の路面には、側溝と轍が存在し、南側に隣接して野壺がならび溝が流れる。溝の南には畑土と考えられる黄褐色土が分布し柵が存在する。19世紀前半の白川道には、次第に轍がみられなくなる。北側に漆喰製の野壺があり、南側の溝との間には、なだらかな傾斜地で土留めの杭が道に平行して並ぶ。溝の南には水田耕土と考えられる暗灰色粘質土がひろがり、畦畔が存在する。以下、こうした景観変遷について、近世の絵図などを参考にしつつ考察をおこなう。

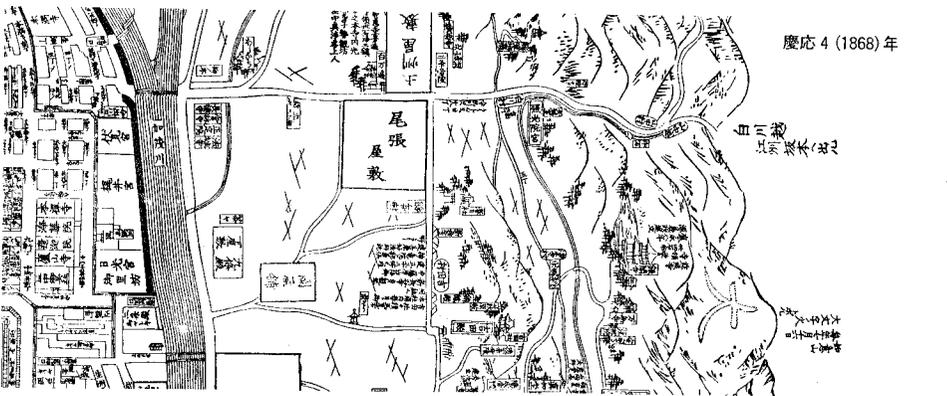
白川道の路面上の轍は、19世紀には次第にみられなくなり、このころに車輛の通行する頻度が低下したことが推定できる。近世絵図で「新撰増補京大絵図」元禄4(1691)年刊と「改正京町絵図細見大成」天保2(1831)年刊を比較すると、後者には今出川口から北白川村に至る道が新たに敷設されていたことがわかる(図10-1・2)。これから、19世紀に至



1 新撰増補京大絵図



2 改正京町絵図細見大成



3 改正京町御絵図細見大成

図10 近世絵図にあらわれた白川道

ると本部構内の白川道が主要な輸送路としての性格を失いつつあったのであり、新道がこれに替っていくという変遷過程を想定できる。また、調査区一帯の白川道沿道の土地利用については、中井家旧蔵「洛中洛外絵図」天明6(1786)年改(京都大学附属図書館蔵)では、南北両面とも畑地となっており、前述の推定と矛盾しない。この畑地には、多数の野壺の存在から瓜、棉のような多肥性の商品作物栽培を想定できる。そして、19世紀には、南面の一帯が水田化したため、野壺は廃棄され、路面が南遷するという変化をたどることができよう。その後、京都大学本部構内西半の地域には、幕末に尾張藩京屋敷が設けられ白川道は寸断されてしまった(図10-3)。そして、明治20(1887)年には、第三高等中学校の敷地となって、のどかな農村の景観は一変したのである。

中世の白川道については、SF2をあげることができるが、この遺構は調査区の南へ続いており、SF1のような明確な路面、轍、側溝を検出しておらず検討を要する。白川道は、京都荒神口から北白川、山中を経て東坂本に至る重要な街道の一部であるが、この街道は、文献によれば、古代以降、山中越、志賀ノ山越、今道越、白川馳道などと呼ばれてきた。とくに、鎌倉幕府成立以降、鎌倉と京都の往還に美濃路が採用され、北陸路の物資を琵琶湖の湖上運搬により坂本に陸揚げし、山中越を経て京都に搬入することが頻繁となっている。こうした山越えの陸運にたずさわったのが、馬借・車借と呼ばれる人々であり、とりわけ「天津坂本の馬借、鳥羽白河の車借」と『庭訓往来』に記されている。また、室町後半の動乱期には、山中越は東海道のバイパス的短捷路として、上洛のための要路とみなされ、安土に居城した信長が、しばしば改修を吉田・白川の郷民たちに命じたことは、『兼見卿記』にみえる。<sup>(1)</sup>このように、中世において白川道は、きわめて重要な役割を果たしていたわけであり、今後の周辺の調査に期すところ大である。

さて、調査区北半では、井戸や掘立柱建物を検出し、瓦も出土しているため、一帯に13世紀の屋敷地があった可能性が高い。調査区北側の71地点(図版1)では、13世紀中葉・後葉の土坑・溝を検出しており[泉・浜崎81 pp.40-41]、これらとの関連が指摘できる。また、調査区南東域にひろがる不定形土坑は、砂取りによるものであるが、こうして採取された白砂(白川砂)は、水無瀬殿上山の新御所造営に際して用いられたことが『明月記』にもみえ、<sup>(2)</sup>庭園の白洲<sup>しろす</sup>などを作る材料として需要の高かったことが推定できる。

〔注〕

- 1 『兼見卿記』天正3(1575)年2月・天正6(1578)年9月の条
- 2 『明月記』建保5(1217)年2月8日の条

### 第3章 京都大学教養部構内 AO21 区の発掘調査

泉 拓良

#### 1 調査の経過

本調査区は、京都大学教養部構内のほぼ中央、東大路通りに面した位置にある(図版1-91)。ここに実験排水槽を設置することになったため、昭和55年度に試掘調査を実施し、遺跡の確認と土層の観察をおこなった〔泉・浜崎81 pp.35-38〕。その結果、鎌倉時代の井戸を検出したので、設置予定地全域を発掘調査することにした。発掘調査は昭和56年2月20日に開始し、3月14日に現地説明会をおこなって、3月31日に現地作業を終了した。なお、現地作業は吉野治雄が担当し、整理は泉がおこなった。

#### 2 層位

調査区は白川の形成した扇状地の西端に位置し、西に隣接する東大路通りの路面とのあいだに比高1mの段があるが、調査区の地表は平坦で、標高53.6mをはかる。層序は調査区全域で大きな変化はなく、地表から約1m下の黄砂(第5層)までのあいだに、4枚の堆積層が認められる(図11)。上から順に、表土(第1層)、黒褐色土(第2層)、赤褐色土(第3層)、黄茶褐色土(第4層)である。近世の遺構は黒褐色土を除去した段階で検出され、赤褐色土は中世の遺物を包含している。主要な遺構は、この赤褐色土下の黄茶褐色土上面で検出した。黄茶褐色土と黄砂が無遺物であることを確認して、発掘調査を終了した。なお、黄砂は周辺の発掘調査からみて、弥生前期末～中期初頭の堆積である。

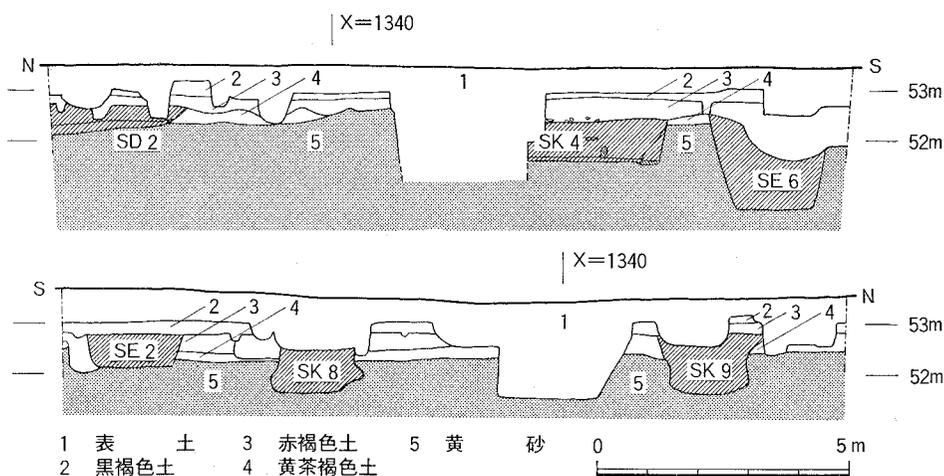


図11 調査区東壁(上)と西壁(下)の層位 縮尺1/150

### 3 遺 構

さきに述べたように、遺構は検出面の違いによって、近世と中世以前との2時期に分けることができる。近世の遺構は黒褐色土を埋土とし、野壺状の土坑 SE 1・SE 2 と柱穴とがある(図12)。柱穴は並びを確認できなかったので図示していない。中世以前の遺構には、溝、井戸、土器溜、土墳墓などがあり、以下で個々の遺構を説明する(図版7, 図12)。

**溝 SD 2** 幅3.4m, 深さ0.7mと幅広の溝で、調査区北東端から弧を描いて南西にめぐる。後述する SE 3 や SK 1 との切合い関係から13世紀を遡り、黒色の埋土からみて本調査区では最古の遺構と思われるが、出土遺物がなく、年代はさだかではない。

**井戸 SE 6** 調査区の東南部壁ぎわで検出したため、東の部分は不明であるが、一辺約2.5mの方形掘形の井戸になると思われる。深さは約2m, 井戸側や水溜めなどの施設は検出できなかった。埋土からは13世紀前葉の遺物が大量に出土している(図14)。

**井戸 SE 3** 調査区北端にある一辺3mの方形掘形をもつ井戸。深さ約2mで井戸底に達する。井戸底にはさらに、1m四方で深さ1.5mの掘込みがあり、方形の木製井戸側が設置されている。この部分は水溜めにしては深く、井戸本体の可能性もある。埋土からは14世紀前葉の遺物がまとまって出土した(図15)。

**土器溜 SK 1** SD 2 の上面で検出した。深さ0.3mで1.3m×1.1mの楕円形土坑に、土師器皿・椀がまとまって完形のまま埋っていた(図版7-2)。遺物のほとんどが土師器の皿・椀という典型的な中世土器溜である。14世紀前葉の資料である(図15)。

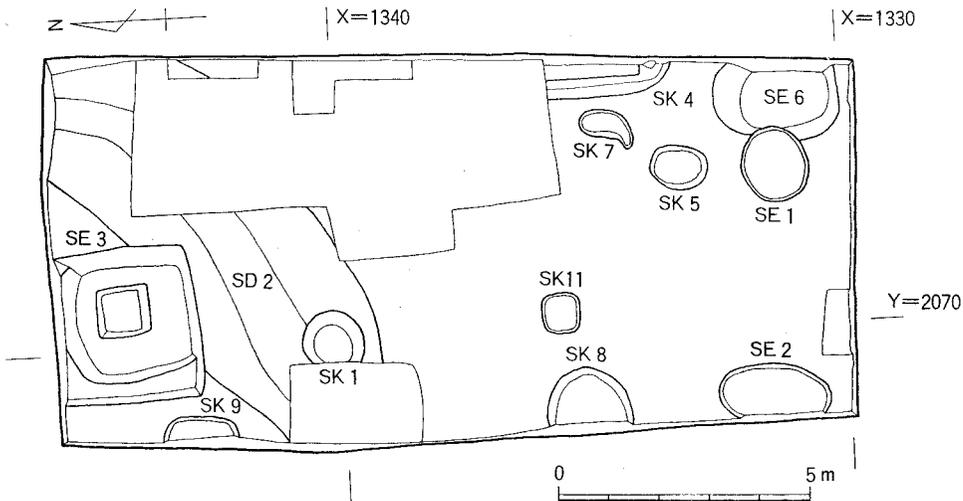


図12 検出遺構 縮尺1/150

土壙墓SK4 調査区東端で検出したため、遺構の西半を明らかにしただけである。長径が2.2mの楕円形掘形に、深さ0.6mで長辺が1.9mの長方形掘込みがある(図版7-3, 図13)。掘込み部からは、掘形とは異なり、22本以上の鉄釘や木炭がまとまって出土した。検出面下0.4~0.5mには礫があり、それ以下からは鉄釘の出土をみない。鉄釘は原位置を保ってはいないが、構造や規模は本部構内AT27区出土の土壙墓SK3と類似し〔五十川81 pp. 26-28〕、土壙墓と考えた。灰白色を呈する土師器凹み底小型碗の完形品をはじめ、少量の遺物が出土し、本遺構の年代を14世紀中・後葉と決める。

土坑SK8・SK9 調査区西端で検出した一辺が約1.6mの袋状の土坑。西の部分は不明ではあるが、深さはSK8が0.8m、SK9が1.0mと深い。出土遺物は少ないが、14世紀中・後葉のものであり、SK4と同時期であることから、墓の可能性が強いと思われる。

SK5, SK7, SK11はごく浅い土坑であり、遺物もほとんど出土していないことからみて、自然の落込みであった可能性が強い。

#### 4 遺 物

出土した遺物は整理箱に20箱分で、大部分が中世の遺物である。ここでは、良好な資料といえるSE6, SE3, SK1出土の遺物を、各遺構別に説明する。なお、14世紀中葉以降は若干の土師器が出土しているものの、その時期の中国製陶磁器はまったくみられず、本調査区の遺跡の推移を知る上で重要である。また、ほかの調査地点と異なって、軒瓦が1点も出土していないことも、注意すべき点であろう〔京大埋文研81b p. 11〕。

SE6(図版8・9, 図14) 出土遺物は残存率1/12以上の破片が約1,000点あり、口縁部計測法〔宇野81 pp. 61-62〕で完形品に換算すると163.7個体分になる。

土師器 大型の皿AⅠの口径分布は、14cmにピークがあり、13cmも少なくない(表1)。口縁部形態は1段撫で面取り手法D<sub>5</sub>類(Ⅱ1~Ⅱ3)が主で、D<sub>3</sub>類がそれに次ぐ。小型の皿AⅡは口径9cmのものが主で、口縁部形態はD<sub>3</sub>類(Ⅱ5~Ⅱ7)と、D<sub>5</sub>類(Ⅱ8~Ⅱ10)

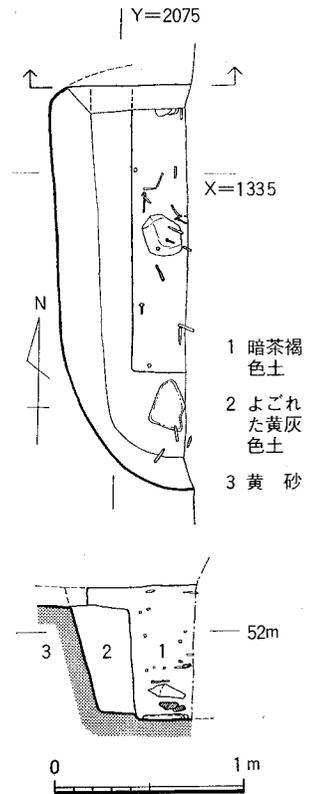


図13 土壙墓SK4  
縮尺 1/40

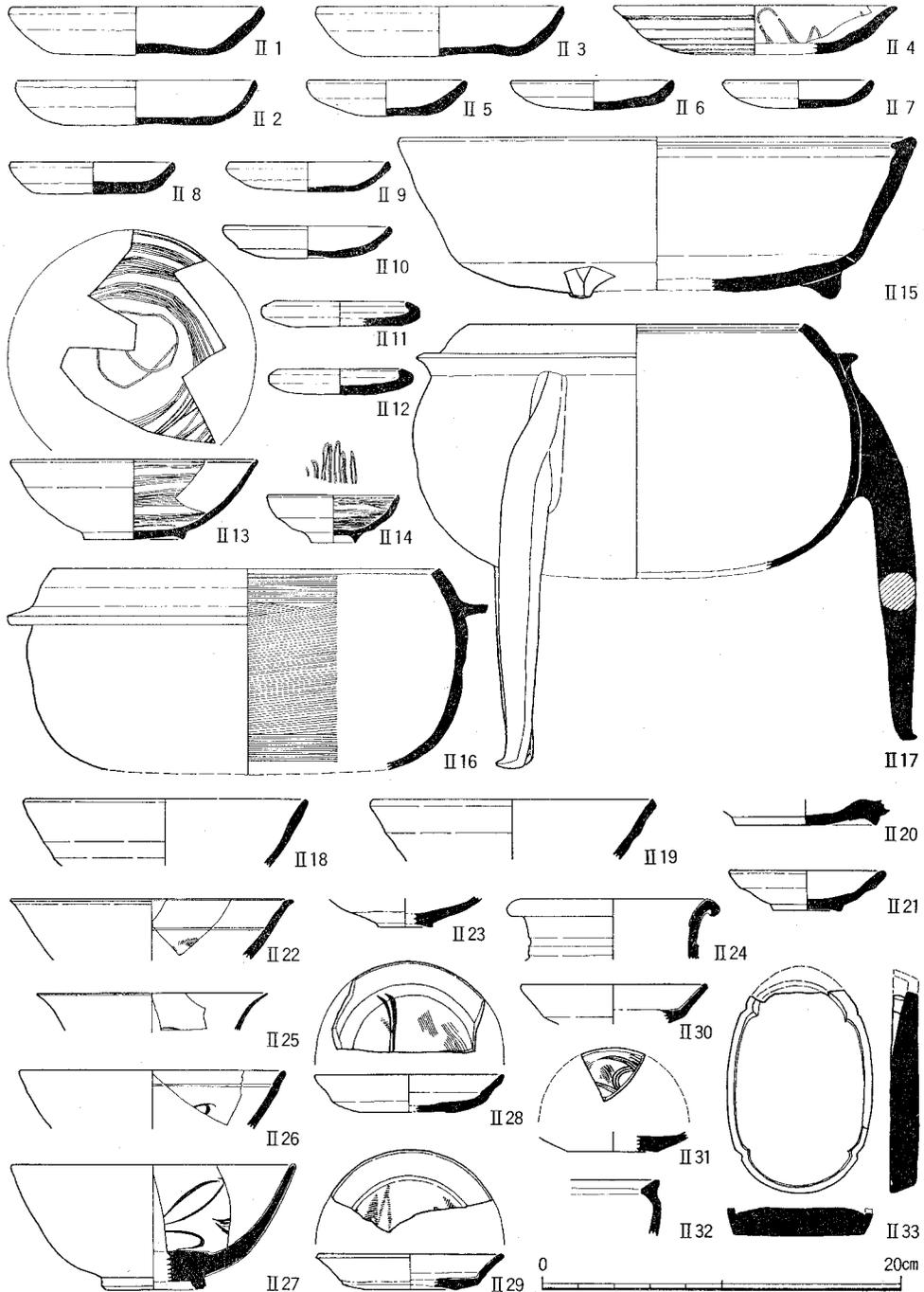


図14 SE 6 出土遺物(II 1 ~ II 12土師器, II 13 ~ II 17瓦器, II 18 ~ II 21灰釉系陶器, II 22 ~ II 24白磁, II 25青白磁, II 26 ~ II 31青磁, II 32褐釉陶器, II 33石製硯)

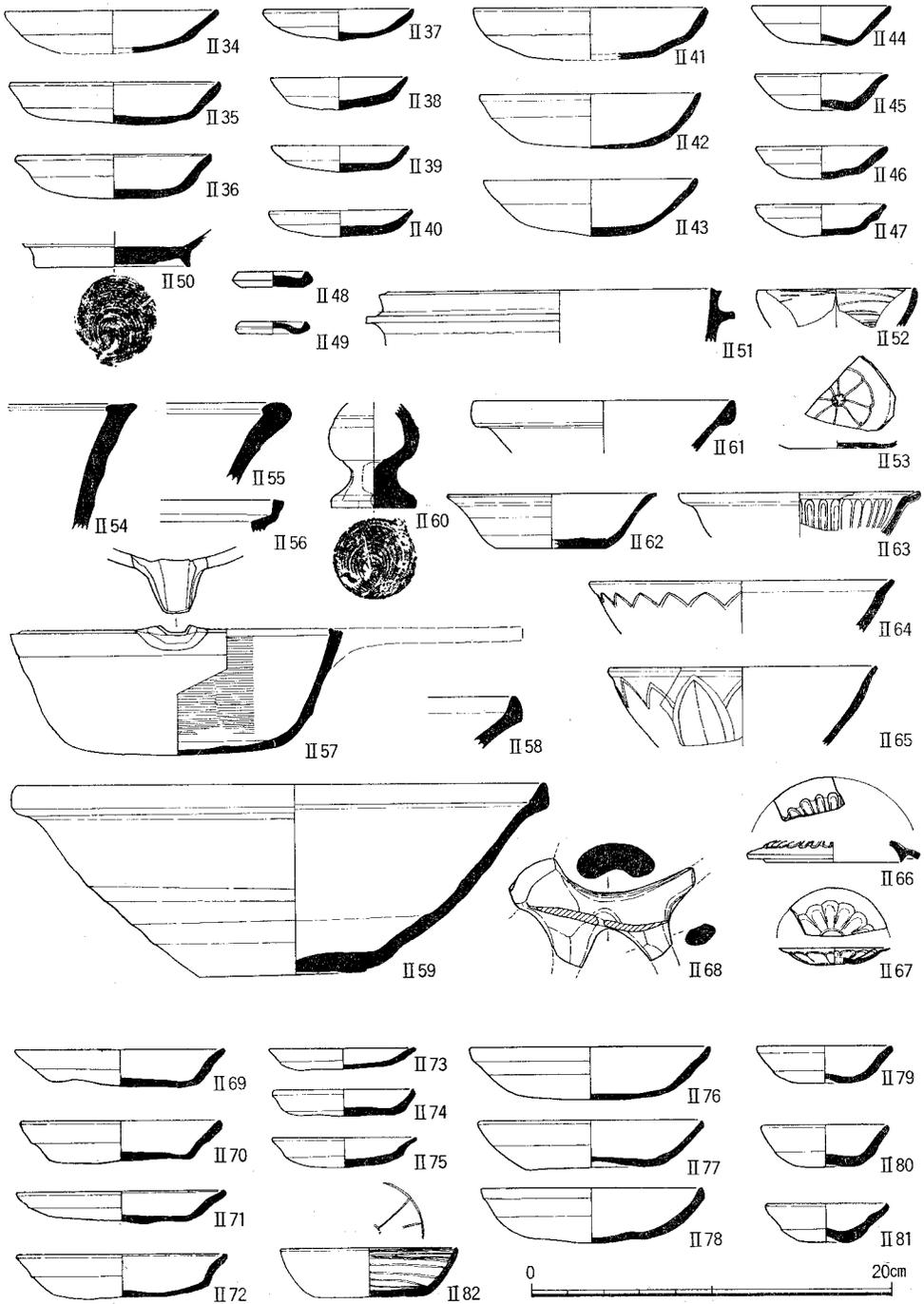


圖15 SE3出土遺物(II 34~II 50土師器, II 51~II 57瓦器, II 58・II 59須惠器, II 60瀬戸, II 61・II 62白磁, II 63~II 65青磁, II 66・II 67青白磁, II 68土馬), SK1出土遺物(II 69~II 81土師器, II 82瓦器)

が相半ばする。これらの特徴は、白河北殿北辺の調査 S D13 出土例(平安京Ⅳ期新段階)と S D11 上層出土例(中世京都Ⅰ期中段階)と比べると、口径分布は S D13 に近く、口縁部形態は S D11 上層に似る〔宇野81 pp. 68-71〕。よって本資料は中世京都Ⅰ期古段階の土師器といえ、157.5 個体分と総量も多く、当期の基準資料になりうる。Ⅱ11・Ⅱ12 は受皿。

瓦器 碗(Ⅱ13)は口縁内面に沈線を有し、内面の暗文はやや間隔があいて見込みには同心円状の暗文をもつ。橋本久和のいうⅢ-1の碗にあたる〔橋本80 p. 90〕。ほかに、第Ⅱ期の特徴をもつ小碗(Ⅱ14)、三足付き盤(Ⅱ15)、三足付きの羽釜Ⅰa類(Ⅱ17)〔宇野81 p. 77〕、羽釜Ⅰb類(Ⅱ16)などが出土している。

灰釉系陶器 碗には体部が直線的にひらくⅡ18と、やや内彎気味のⅡ19の2種がある。Ⅱ20は碗の高台部で、Ⅱ18とともにⅡ19より古い様相をもつ。Ⅱ21は底部寛切りの皿。

中国製陶磁器 Ⅱ22～Ⅱ24は白磁。Ⅱ22は口縁部が「く」の字状に短く外反し、内面に沈線と櫛描文をもつ碗、Ⅱ23はやや上げ底の底部に内彎する体部がつく皿、Ⅱ24は壺の口縁部である。Ⅱ25は内面有文の青白磁碗で、薄手に仕上げている。Ⅱ26・Ⅱ27・Ⅱ31は龍泉窯系の青磁で、Ⅱ26・Ⅱ27は割花文碗、Ⅱ31は櫛描花文皿である。Ⅱ28～Ⅱ30は同安窯系皿で、Ⅱ28・Ⅱ29には櫛描雷光文、x字文がある。Ⅱ32は褐釉陶器の鉢である。

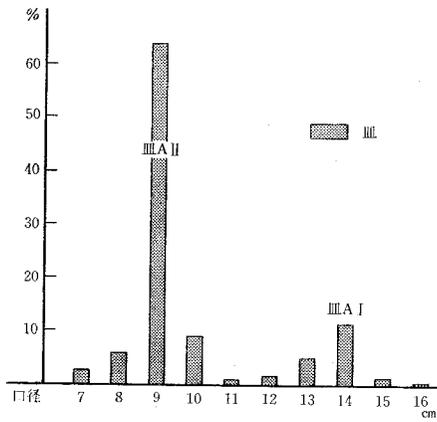
その他、Ⅱ4は外面に多条沈線文、内面にジグザグ状暗文を施す皿で、胎土は砂粒が多く、内面は黒色を呈する。Ⅱ33は四葉形の石製硯で、この種の硯としては古い例である。

SE3(図版9, 図15) 出土遺物は口縁部計測法による88.9個体分で、そのうち62個体分は試掘調査時にSE1として取上げた分である〔泉・浜崎81 p. 38〕。

土師器 皿AⅠの口径分布は12cmをピークとし、11cmと13cmも多い(表2)。口縁部形態はⅠ段撫で手法E<sub>2</sub>類(Ⅱ35・Ⅱ36)が最も多く、E<sub>1</sub>類(Ⅱ34)がそれに次ぐ。皿AⅡは口径8cmを主とし、9cmのものも少なくない。口縁部形態は皿AⅠと異なり、E<sub>1</sub>類(Ⅱ37～Ⅱ39)が主で、E<sub>2</sub>類(Ⅱ40)は少ない。碗AⅠは口径12cmをピークとし、11cmがそれに次ぎ、口縁部形態はE<sub>1</sub>類(Ⅱ41～Ⅱ43)が主である。碗AⅡでは口径7cmと8cmのものが多く、口縁部形態はE<sub>1</sub>類(Ⅱ44・Ⅱ45)とE<sub>2</sub>類(Ⅱ46・Ⅱ47)が相半ばする。赤褐色を呈する皿と灰白色を呈する碗の個体数比は3:2である。以上の特徴は、白河北殿北辺の調査S D06出土例(中世京都Ⅰ期新段階)とS K10出土例(中世京都Ⅱ期中段階)の特徴の中間に位置付けられ、中世京都Ⅱ期古段階の良好な資料である。Ⅱ48・Ⅱ49は灰白色の受皿で、かなり小型化している。Ⅱ50は底部に糸切り痕を残す高台付皿で、焼成は堅緻である。

瓦器 小型碗(Ⅱ52・Ⅱ53)は、本部構内A X28区出土例と比べて(図7 I 33 p. 12),

表1 SE6 出土遺物



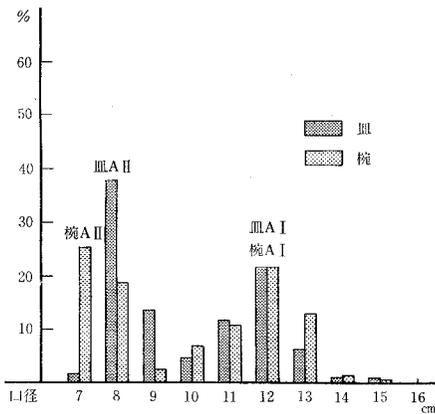
規格別口縁部形態の比率

	皿A I	皿A II	碗A I	碗A II
個体数	32.6	120.3	0.9	0.3
C <sub>5</sub> 類	1.4%	0.7%	—	—
D <sub>3</sub> 類	12.8%	42.8%	—	100%
D <sub>5</sub> 類	80.5%	56.0%	19.0%	—
D <sub>6</sub> 類	3.6%	0.5%	—	—
E <sub>1</sub> 類	1.7%	—	81.0%	—
E <sub>2</sub> 類	—	—	—	—
合計	100%	100%	100%	100%

種類別の比率

出土総個体数  
163.7個体  
種類別比率  
土師器 96.2%  
瓦器 2.8%  
須恵器 0.0%  
灰釉系陶器 0.5%  
中国製陶磁器 0.5%

表2 SE3 出土遺物



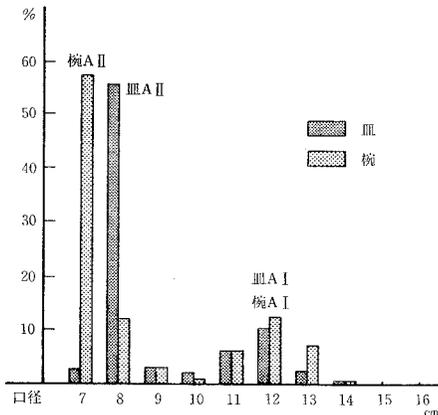
規格別口縁部形態の比率

	皿A I	皿A II	碗A I	碗A II
個体数	22.7	27.7	19.0	16.3
C <sub>5</sub> 類	—	—	—	—
D <sub>3</sub> 類	0.9%	—	—	1.0%
D <sub>5</sub> 類	—	—	—	—
D <sub>6</sub> 類	2.9%	8.7%	25.7%	6.2%
E <sub>1</sub> 類	31.4%	70.5%	62.2%	52.8%
E <sub>2</sub> 類	64.8%	20.8%	12.1%	40.0%
合計	100%	100%	100%	100%

種類別の比率

出土総個体数  
26.9個体  
種類別比率  
土師器 92.8%  
瓦器 0.9%  
須恵器 3.5%  
灰釉系陶器 1.1%  
中国製陶磁器 1.7%

表3 SK1 出土遺物



規格別口縁部形態の比率

	皿A I	皿A II	碗A I	碗A II
個体数	15.9	55.8	5.8	15.3
C <sub>5</sub> 類	—	—	—	—
D <sub>3</sub> 類	—	—	—	—
D <sub>5</sub> 類	—	—	—	—
D <sub>6</sub> 類	5.2%	—	2.2%	10.1%
E <sub>1</sub> 類	59.7%	88.3%	85.5%	69.1%
E <sub>2</sub> 類	35.1%	11.7%	12.3%	20.8%
合計	100%	100%	100%	100%

種類別の比率

出土総個体数  
95.8個体  
種類別比率  
土師器 98.7%  
瓦器 1.3%  
須恵器 0.0%  
灰釉系陶器 0.0%  
中国製陶磁器 0.0%

見込みの菊花文が硬化している。碗以外に羽釜 2 類(Ⅱ51)、盤(Ⅱ54・Ⅱ55)、鍋(Ⅱ56)、把手付き鍋(Ⅱ57)などの器種が出土している。

須恵器・灰釉系陶器 Ⅱ58・Ⅱ59は須恵器すり鉢 4 類で〔宇野81p.78〕、Ⅱ60は黄緑色の釉がつく瀬戸の仏花瓶である。内側底面はやや凹み、中空脚部の名残りをとどめている。

中国製陶磁器 Ⅱ61・Ⅱ62は白磁で、Ⅱ61は玉縁口縁の碗、Ⅱ62は口禿の皿である。Ⅱ63～Ⅱ65は龍泉窯系の青磁で、Ⅱ63が内面に菊花文をもつ杯、Ⅱ64・Ⅱ65は蓮弁文碗である。Ⅱ66・Ⅱ67は青白磁で、ともに印刻の菊花文を有し、Ⅱ66は蓋、Ⅱ67は小皿である。

Ⅱ68は土馬の体部で、脚部取付きの形態と体部の長さことから、小笠原好彦のいう第Ⅱ期 G 型式にあたり、9 世紀前半ごろの土馬と思われる〔小笠原75 pp.39-41〕。

SK 1 (図15) 出土遺物は口縁部計測法による 95.8 個体分で、瓦器小碗(Ⅱ82)を除き、残りの 98.7% は土師器の皿・碗類であった。皿と碗の口径分布は SE 3 と類似するが、碗 A Ⅱの口径が小さくなる(表3)。一方、口縁部形態は、E<sub>1</sub>類(Ⅱ69・Ⅱ70・Ⅱ73・Ⅱ76・Ⅱ77・Ⅱ79・Ⅱ80)の比率がやや増加して、E<sub>2</sub>類(Ⅱ71・Ⅱ72・Ⅱ74・Ⅱ75・Ⅱ78・Ⅱ81)が少なくなっている。中世京都Ⅱ期古段階でも新相の資料であろう。

## 5 小 結

調査区の北に隣接した AP 22 区で現在 1,716 m<sup>2</sup> を発掘調査中であり(図版 1-111)、本調査区検出の遺構の解釈については、その成果とあわせておこなうことにし、本節では出土遺物についてまとめる。本調査で得られた SE 6 と SE 3 の資料は、一括資料の乏しかった中世京都Ⅰ期古段階と中世京都Ⅱ期古段階を埋める資料である。その結果、土師器皿の分類では、SE 3 や SK 1 出土例でみる限り、E<sub>1</sub>類→E<sub>2</sub>類という従来の考え方ではなく、口縁端部の処理では D<sub>6</sub>類に近い E<sub>2</sub>類が皿 A Ⅰでは先に出現することを明らかにできた。E<sub>1</sub>類は皿 A Ⅱに用いられる手法として発達したものであろう。また、中国製陶磁器の組成変化では、明らかにしえた点が多い。SE 6 出土遺物から、遅くとも 13 世紀前葉には白磁外反口縁碗、龍泉窯系劃花文碗、同安窯系青磁皿とが主であったことが判明した。また、本部構内 A X 28 区の調査では 13 世紀中葉に龍泉窯系蓮弁文青磁碗がそれに加わることで明らかになっており(図 7 SK 51 出土遺物 p.12)、本調査区の SE 3 出土遺物から、14 世紀前葉に白磁口禿皿と龍泉窯系明緑色青磁蓮弁文碗・外反口縁杯・洗などを主とした組成に変わることが新たに判明した。この組成変化の年代観は北九州地方の編年〔横田・森田78〕よりかなり新しいものであり、今後検討を要する問題と思われる。

なお、出土遺物については京都大学文学部助手宇野隆夫氏に多くの御教示を賜った。

## 第4章 京都大学北部構内 BD30 区の発掘調査

浜崎 一志

### 1 調査の経過

京都大学北部構内は、白川の形成した扇状地上に位置する。この扇状地は人々の居住に適していたらしく、北部構内の11～13・16地点で縄文時代の遺跡が、54地点では弥生時代と平安時代の遺跡の存在が明らかになっている(図版1)。こうした中で本調査区に北部構内実験排水槽が設置されることになり、試掘調査をおこなったところ、弥生時代、平安時代および江戸時代の遺物が出土したため、設置予定地全域の発掘調査をおこなうことになった。

### 2 層位(図版11, 図16)

調査区の地表は標高約63mで、東から西へ緩やかに下がる。第1層は現代の盛土。第2層はSX1の埋土である。SX1は下層の青灰色土を掘込んだ瓦溜で、江戸末期の瓦が出土した。青灰色土は近世の耕作土で、SX1に切られている。青灰色土以下黄砂までの地形は、調査区中央付近で南から北へ段状に低くなる。第3層(赤褐色土)～第6層(暗赤褐色土)は調査区北半部の中央付近に存する東西方向の凹地に堆積している(図18梨地部分)。第3層と第4層からは、9～10世紀の遺物が出土した。第5層は無遺物層であった。調査区南半部では、盛土の下に茶褐色土(第9層)、淡褐色土(第10層)がうすく堆積し、その下はすぐに黄砂(第11層)となる。黄砂は上層の細砂から下層の礫混り粗砂まで6層に細分できる。第12層になると直径が2m近くもある花崗岩礫を含む礫が混じり、白川の土石流跡

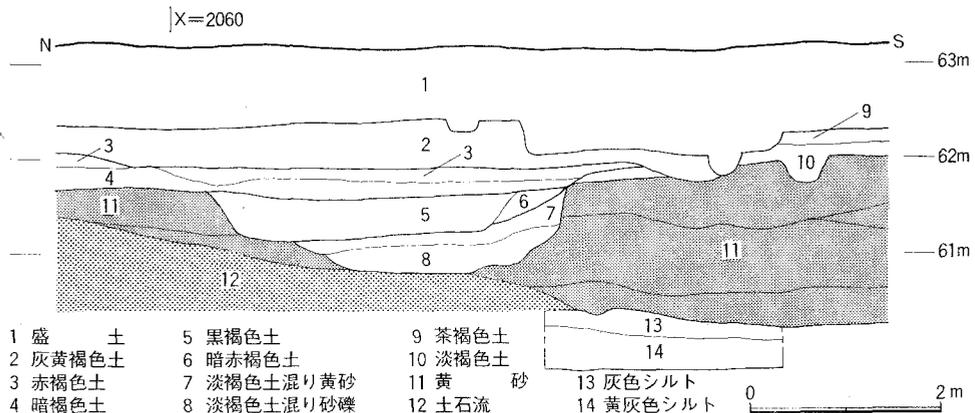


図16 調査区東壁の層位 縮尺1/80

と考えられる。この第12層の堆積は北東が高く、西へ低くなりながら続くものの、南へは調査区のほぼ中央で止まる。東から西へ流れた土石流の南端を検出したものと推定される。この土石流の発生は弥生前期末～中期初頭であろう。第13層、第14層はほぼ水平に堆積したシルト層で、第13層の直上より縄文晩期の凸帯文土器小片が出土した。

### 3 近世の遺構(図版10-1, 図17)

瓦溜、柵、溝がおもな遺構である。瓦溜はいずれも青灰色土上面で検出した。江戸末から明治初頭の遺構である。SX 1は青灰色土を10~20cm掘下げて、瓦を廃棄したもので、南北長は7.7mに達する。SX 2, SX 3は深さ10cm程度の浅い瓦溜で小片ばかりが出土した。SX 4は深さ約1mにおよぶ深い瓦溜で瓦片も大きなものが多い。これらの瓦溜から出土した瓦は、造りが非常に丁寧であることや、獅子口瓦、<sup>ししぐち</sup> 蝶羽瓦、<sup>けらば</sup> 雁振瓦<sup>がんぶり</sup>までであること

ことから、一般の民家に葺かれていたものとは考え難い。「改正京町御絵図細見大成」慶応4(1868)年刊を見ると、本調査区一带には、土佐藩邸が描かれており、これらの瓦は土佐藩邸内の建物に葺かれていた可能性が高い。柵SA 1~SA 8, 溝SD 1~SD 17は方位を真北から約11°東に振る遺構群で、江戸後期の耕作にともなう遺構と考えている。SD 3~SD 8・SD 11~SD 16はそれぞれ一群の遺構で、幅半間の畑の畝にともなうものであろう。SA 1~SA 4・SA 7・SA 8

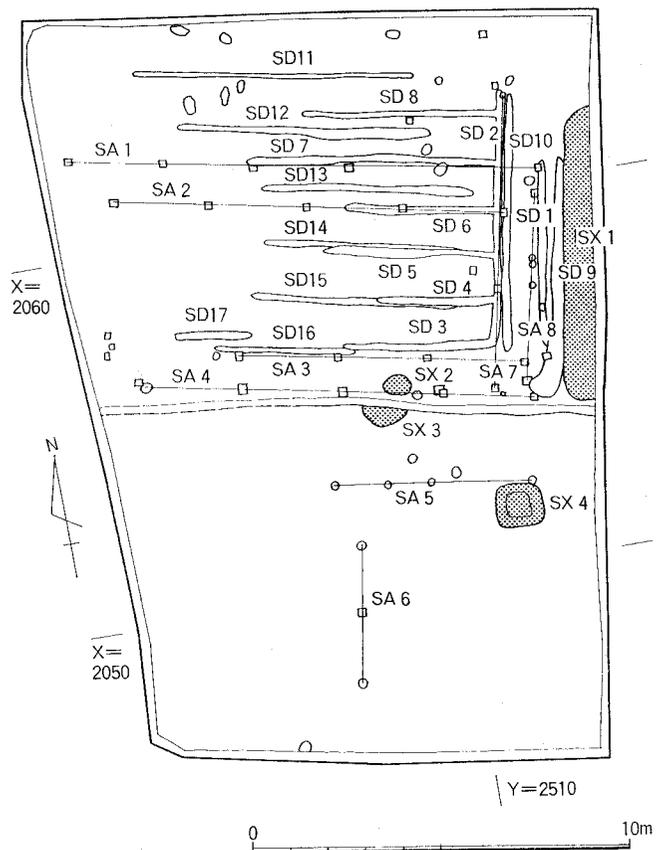


図17 近世の遺構 縮尺1/200

は耕作物の乾燥等に用いた柵の遺構であろう。

4 古代の遺構(図版10-2, 図18)

建物SB1, 柵SA9~SA11, 溝SD18~SD21, 土坑SK1~SK3がおもな遺構である。建物SB1は東西2間, 南北1間を確認したが, 北へ延びる可能性がある。柱間は2.1mで, 建物の方位は真北から東に5°振る。柱穴からは10世紀前葉の遺物が出土した(図20)。SA9~SA11はいずれも2間分のみを確認しえた柱穴列である。SA9・SA10の柱間は, 2.1mでSB1と同じであるが, SA11は3.0mとやや長い。方位はSA10・SA11が5°前後真北から東に振るのに対し, SA9は15度東に振る。各柵列の柱穴から, 10世紀前葉の遺物が出土した。溝SD19~SD21は黄砂層の高い調査区南半分で検出した。方位はいずれも真北から14°東に振り, 10世紀前葉~中葉の遺物が出土した。SD19が最も残りがよく, 幅50cm,

深さ15cmを計る。SK2は一辺約1mの隅丸方形の土坑で, 深さは約50cmであった。11世紀前半の完形の土師器皿(Ⅲ6)や壁土と思われる苧の入った泥土塊が出土した。

以上が古代の遺構のおもなものであるが, 土坑は北半部の一段低い所で多数検出され, 溝は南半部に分布した。調査区中央の段差を境にして, 当時の土地利用に差異があったと思われる。

5 遺物

(図19~21)

本調査では整理箱に25箱分の遺物が出土した

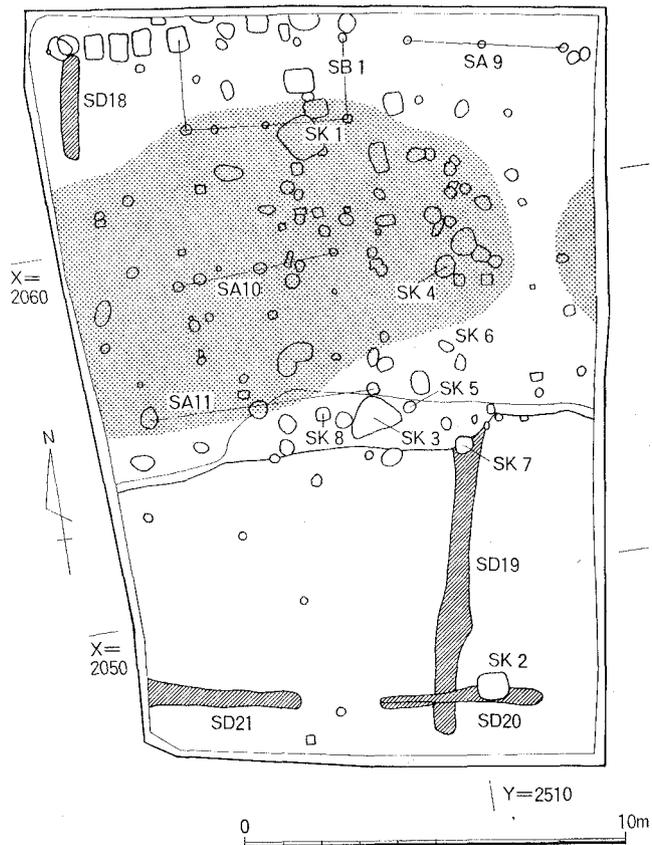


図18 古代の遺構 縮尺1/200

が、近世の遺物が19箱を占め、古代の遺物は6箱、縄文・弥生時代の遺物は少量であった。古代の遺物は主としてSK1～SK8, SD19より出土した。以下では遺構出土の遺物を中心にその概略を記す。

縄文・弥生時代の遺物(図19) III1は打製石鏃、III2は磨製石斧であるが、III1は黒褐色土、III2は暗褐色土から出土しており、原位置を保っているとは考えられない。そのほか図示していないが、縄文土器・弥生土器の小片も出土している。

古代の遺物(図20・21) 土坑SK1からは、III3～III5の土師器とIII9・III10の黒色土器が出土した。III3は口縁部に鋭い面取りを施した杯。III4・III5は10世紀前半と思わとる土師器皿で、「て」字状口縁手法B<sub>1</sub>類に相当する。III9・III10は黒色土器の鉢と甕で暗文をもち内面全面と外面の口縁部に炭素を吸着させている。土坑SK2からは土師器皿(III6)と灰釉陶器の椀(III7)が出土した。III6はB<sub>3</sub>類にあたり、11世紀前半のものである。III8はSK3から出土した緑釉陶器の皿で、須恵質に焼成されており、黄色の斑点をもつ。釉は淡緑色を呈し、外面の口縁下部には一条の凹線がはしる。土坑SK4からは、土師器(III11・III12・III14)、緑釉陶器(III13)、黒色土器(III15～III17)が出土した。III12はB<sub>1</sub>類の杯、III14は甕で内面に刷毛目を残す。III15・III16は外面胴部と内面頸部に、暗文を施した甕で、III15は内面胴部に刷毛目を残す。III17は内面全面に篋磨きを施した椀で、外面の口縁部には横撫でを施し、それ以下には指頭圧痕を残す。SK5からは土師器(III18～III21)、須恵器(III25)が出土した。土師器はいずれもB<sub>1</sub>類の杯で、10世紀前葉のものと思われる。III18は内面に幅広の刷毛目を残す。III25は須恵器水瓶の底部である。III22はSK6出土の高台のつく土師器杯でB<sub>1</sub>類にあたる。III24はSK7出土の黒色土器椀で、内面には丁寧な篋磨きの上に暗文が施されている。III23は溝SD19出土の土師器皿でB<sub>2</sub>類にあたる。III26はSA11の中央の

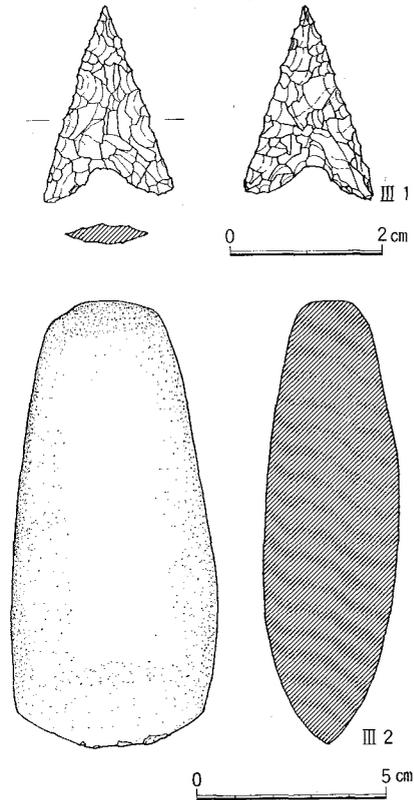


図19 縄文・弥生時代の遺物  
縮尺1/1(III1), 1/2(III2)

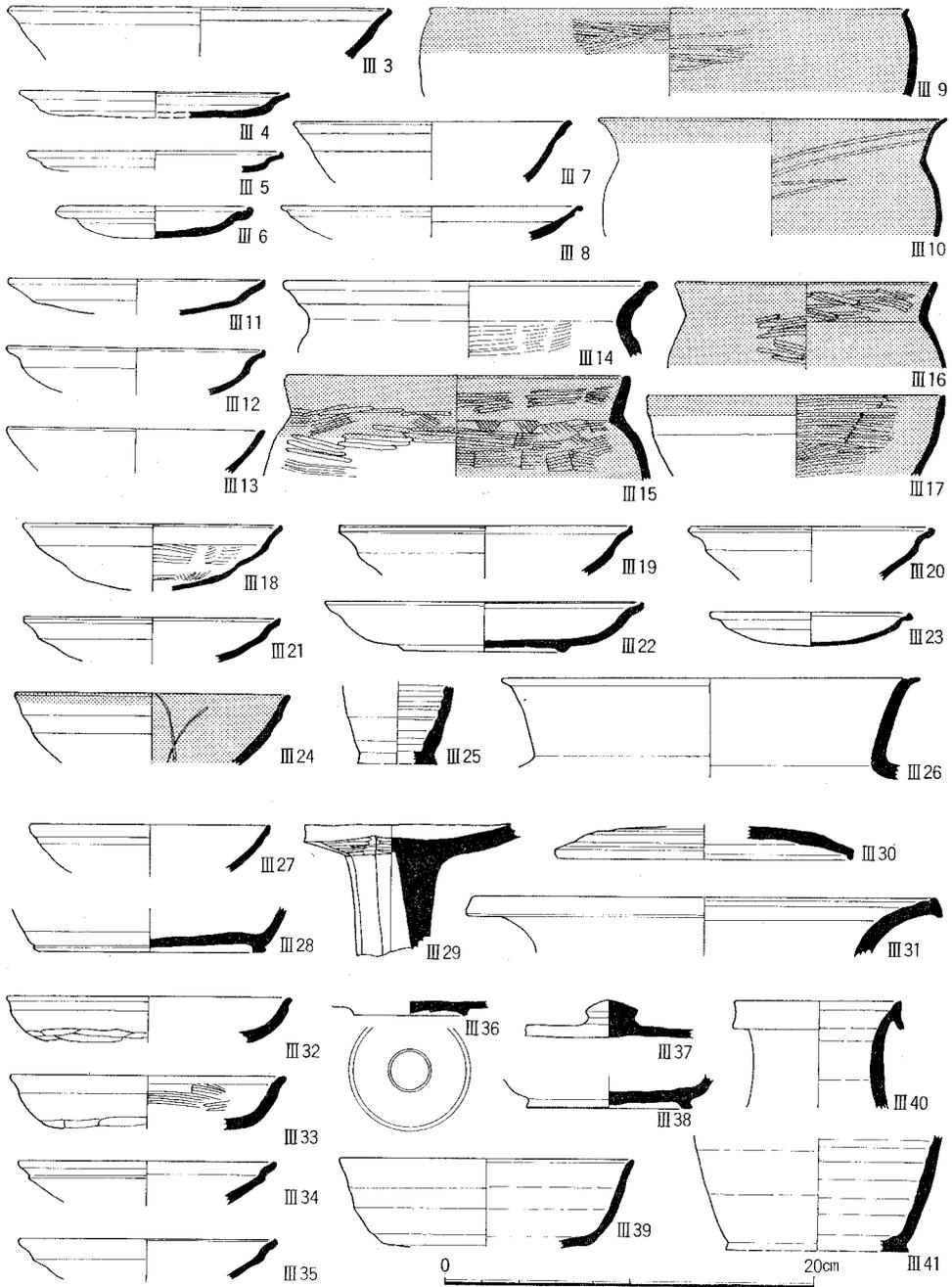


圖20 SK 1 出土遺物(Ⅲ 3~Ⅲ 5 土師器, Ⅲ 9・Ⅲ 10 黑色土器), SK 2 出土遺物(Ⅲ 6 土師器, Ⅲ 7 灰釉陶器, Ⅲ 15~Ⅲ 17 黑色土器), SK 3 出土遺物(Ⅲ 8 綠釉陶器), SK 4 出土遺物(Ⅲ 11・Ⅲ 12・Ⅲ 14 土師器, Ⅲ 13 綠釉陶器, Ⅲ 15~Ⅲ 17 黑色土器), SK 5 出土遺物(Ⅲ 18~Ⅲ 21 土師器, Ⅲ 25 須惠器), SK 6 出土遺物(Ⅲ 22 土師器), SK 7 出土遺物(Ⅲ 24 黑色土器), S D 19 出土遺物(Ⅲ 23 土師器), S A 11 出土遺物(Ⅲ 26 須惠器), 暗褐色土層出土遺物(Ⅲ 27・Ⅲ 29 土師器, Ⅲ 28・Ⅲ 30・Ⅲ 31 須惠器), 赤褐色土層出土遺物(Ⅲ 32~Ⅲ 35 土師器, Ⅲ 36 綠釉陶器, Ⅲ 37~Ⅲ 41 須惠器)

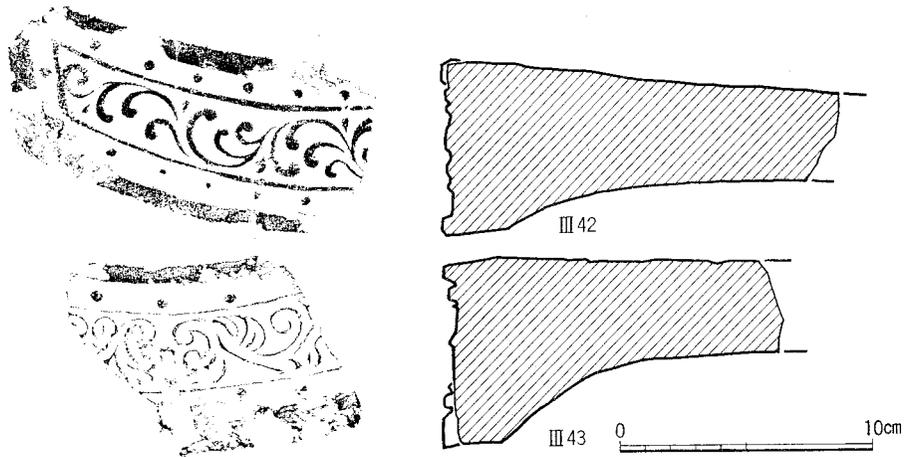


図21 調査区出土軒平瓦 縮尺1/3

ピットから出土した須恵器広口壺の口頸部である。Ⅲ27～Ⅲ31は第4層から出土した遺物である。Ⅲ27は口縁部に1段の横撫でを施す土師器杯。Ⅲ28は高台のつく須恵器杯の底部。Ⅲ29は土師器高杯の杯部と軸部の一部である。脚部の断面は八角形で表面は丁寧に磨きあげられている。Ⅲ30は須恵器杯蓋。Ⅲ31は須恵器の甕の口縁部である。Ⅲ32～Ⅲ41は第3層から出土した。Ⅲ32～Ⅲ35は土師器の杯。Ⅲ32・Ⅲ33はA<sub>1</sub>類の杯で、9世紀のものと思われる。Ⅲ34・Ⅲ35はB<sub>1</sub>類の杯。Ⅲ36は緑釉陶器皿の底部で蛇の目高台がつく。Ⅲ37～Ⅲ41は須恵器であるがⅢ40以外はいずれも生焼けで灰白色を呈する。Ⅲ37は宝珠のつまみのつく杯蓋。Ⅲ38・Ⅲ39は杯。Ⅲ38には外にふんばる高台がつく。Ⅲ40は壺の口頸部で口縁端部は上下に伸びる。Ⅲ41は壺の底部。Ⅲ42はSK8から出土した平安前期の均整唐草文軒平瓦であり、Ⅲ43は表土から出土した平安中期の均整唐草文軒平瓦である。

## 6 小 結

今回の調査により、弥生時代の地形・環境や、平安前・中期および江戸末期の本調査区一帯の状況を明らかにできた。弥生時代については、弥生前・中期ごろは本調査区一帯が白川の谷であったが土石流により白川の流は南に押しやられたことが判明し、この時期の地形・環境復原の貴重な資料を得た。また、平安前・中期の遺構、遺物の出土状況が、この時期の「寺院址」にごく近いと想定している9地点(図版1)の状況に似ていることから、本調査区がその寺域内に含まれている可能性が高いことがわかった。また、幕末の土佐藩邸のものと思われる遺構、遺物をはじめ明らかにできた。

## 第5章 京都府美月遺跡の発掘調査

清水 芳裕

美月遺跡<sup>みつき</sup>は京都府船井郡丹波町<sup>こもの</sup>蒲生野<sup>しゅうち</sup>の京都大学農学部附属牧場内にある。須知川と高屋川が由良川として北流するその合流点から南方約1 kmに位置しており、須知川左岸に形成された蒲生野丘陵の小規模な扇状地の末端部にあたる。遺跡の周辺は、西に大阪層群からなる美月山と南の蒲生野丘陵をひかえ、東は須知川によって形成された低い河岸段丘、北は高屋川の氾濫原が開けている(図22)。この一帯には、古くから遺跡の存在が知られており、大正2年に須知競馬場建設の折に古墳時代の土器が出土したと伝えられている。また昭和19年には小林行雄氏が、競馬場跡で土師器と須恵器を採集している。戦後の開拓時にも、蒲生野丘陵上で6世紀ごろの古墳が7基発見されており、高屋川に沿う富田地区には現在も3基の古墳が残っている。また、文献史料の上からは、古代末から中世を通じてこの地域が山内荘の荘域にもあたっている〔細見80 pp. 157-158〕。

このような周辺の遺跡が分布していることを考慮して、昭和53年度以降立合調査をおこなってきた。その結果、昭和55年度の中小家畜舎等の新営にともなって実施した立合調査で、予定地のほぼ全域に遺物の包含層が存在していることを確認し、同時に11世紀～12世紀の瓦器椀(図28 IV 25)を採集した〔京大埋文研 81b p. 2〕。そこで工事を中断し、昭和55年11月25日から12月27日にかけて1468 m<sup>2</sup>の発掘調査をおこなった。これによって、弥生中期と平安後期の溝や土坑などの遺構群の存在を明らかにし、丹波地方の弥生土器あるいは瓦器の地域性を考察するための多くの貴重な資料を得た。



図22 調査地点と周辺の地形 縮尺1/50,000

## 1 層 位

調査地の現地表面は標高約152mで、南東から北西にむかって緩やかに下がる。堆積する層位は調査区全域にわたって基本的に上から、表土(第1層)、淡茶褐色土(第2層)、黒褐色土(第4層)、黄色粘質土(第7層)、礫混り黄色粘質土(第8層)があり、その他部分的に暗茶褐色土(第3層)、黒褐色粘質土(第5層)と黄色粘質土混り黒褐色土(第6層)がみられる(図23)。このうち遺物包含層は第2層から第6層までで、第7層以下は、基盤および二次堆積物からなる。層位の堆積状況は全体に一律でなく、B5・B6区付近から南東へむかって黄色粘質土上面が次第に高くなり、このため黒褐色土は北西部に厚く、南東部に薄く堆積する。大部分の遺構は、この黒褐色土の上面とその細分によって検出され、8~11区では黄色粘質土上面で検出されるものが多い。主要な遺物包含層である黒褐色土は植物腐食物が含まれる黒ボクで、その性格について詳しい調査はおこなっていないが、蒲生野丘陵一帯に繁茂したイネ科草本類に関係をもつ腐蝕集積土壌で、弥生時代以前に生成され、これらの二次的な堆積にともなって遺跡の包含層が形成されたものと考えられる。

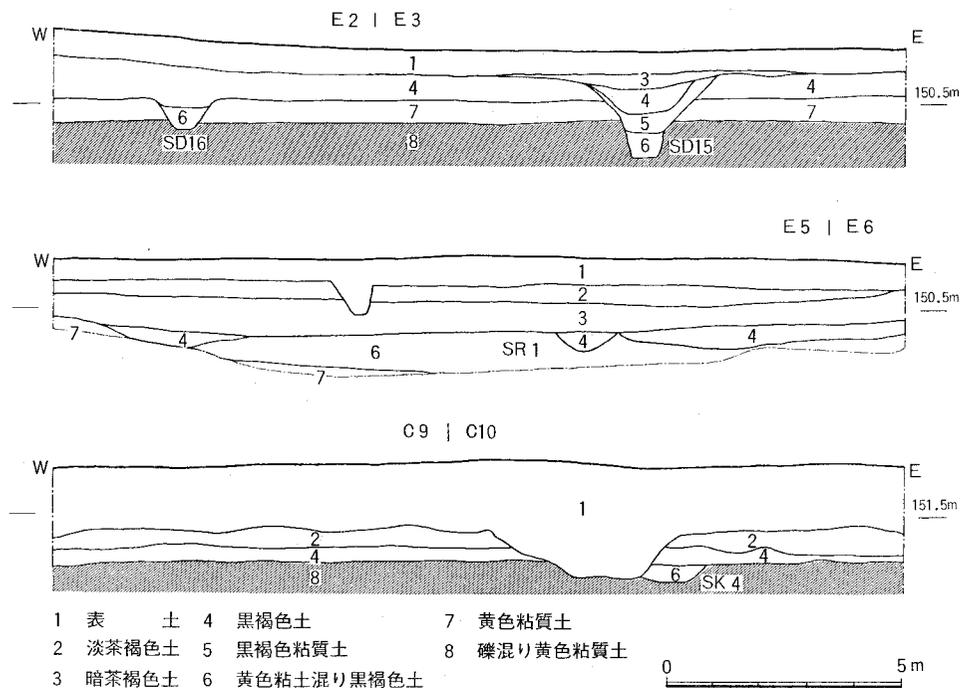


図23 調査区北壁の層位 E2・E3区(上), E5・E6区(中), C9・C10(下) 縮尺1/160

2 遺 構

現代・近代と平安時代，弥生時代の遺構群があり，以下各時期別に記述していく。

現代・近代の遺構(図24)

表土下の淡茶褐色土上面で検出される遺構としては，直線的に並ぶ柱穴群がある。直径15～30cmで，内に柱根を残すものが多い。B1～B4，C1～C4区に集中してみられ，東西方向と南北方向のそれぞれ4列が建物SB1に復原できた。柱穴からは，現代の陶磁器が出土すること，現代の建物群と同一方向に並ぶことから旧海軍の兵舎跡と考えている。このほかに同様の状況をもつ遺構として，D3・D4区でSB2が，C7～C10区で建物跡の一部とみられる柱穴列SB3が検出された。また黒褐色土上面では，上記の遺構群とは方向を異にして，方位を東と西に振る柵列SA1・SA2と溝SD1～SD14を検出した。このうちSA2とSD1・SD3，SA1とSD2・SD4は，それぞれほぼ平行する配置を示している。特にSA1・SA2とSD1・SD2とは，

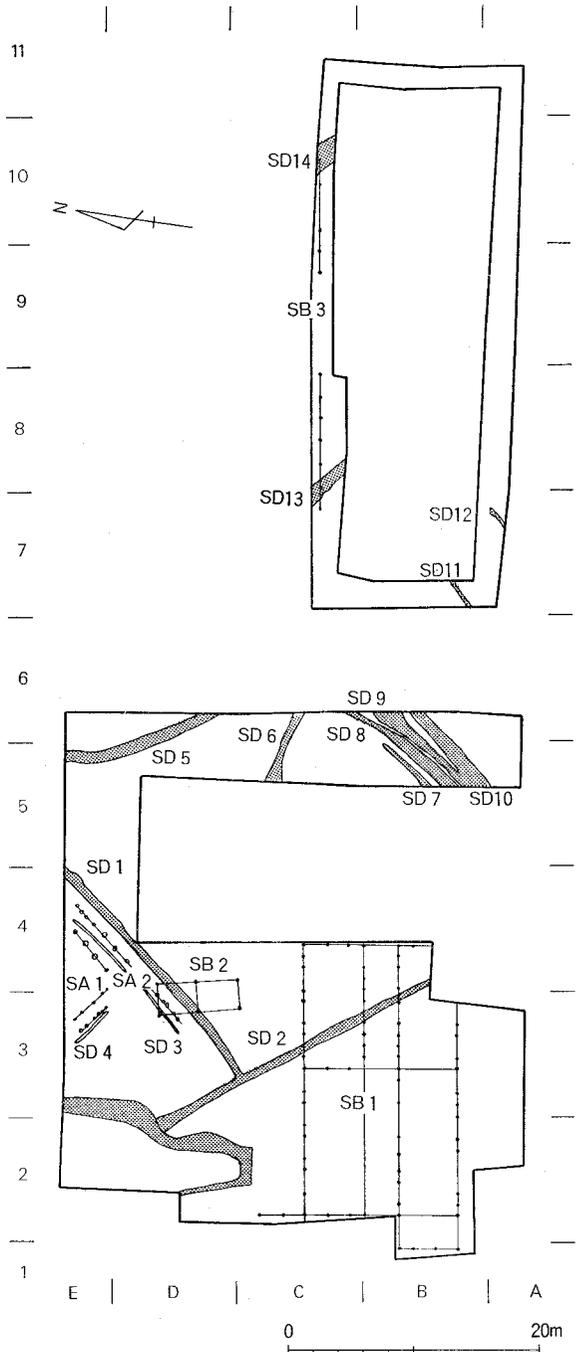


図24 現代・近代の遺構 縮尺1/600

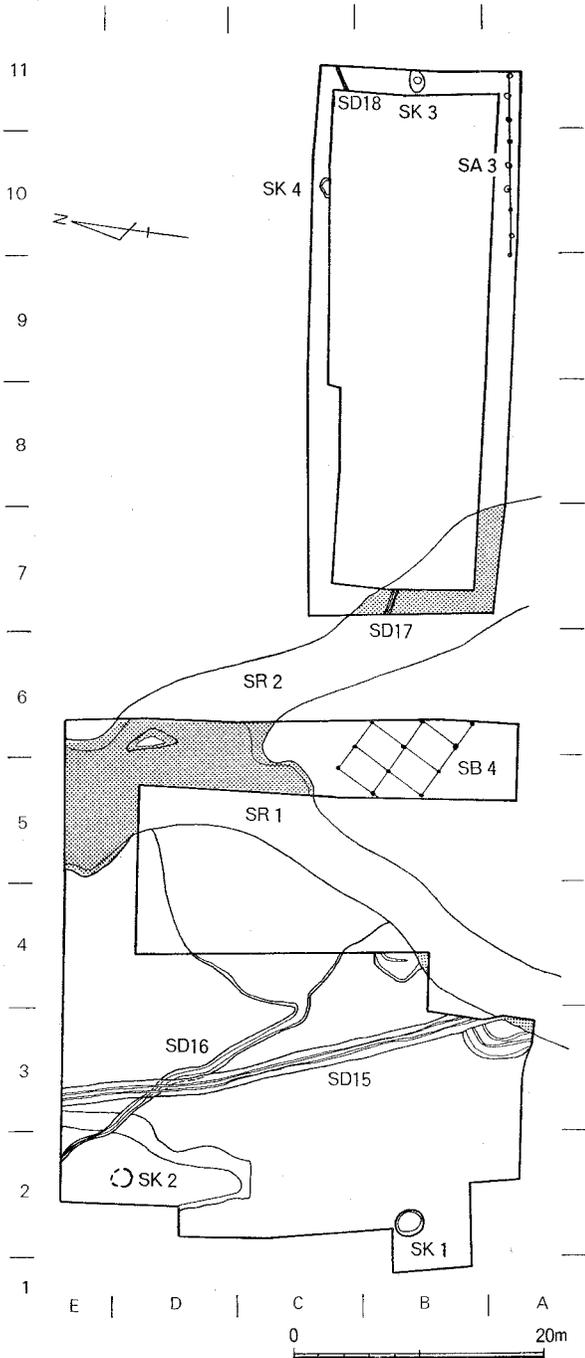


図25 平安・弥生時代の遺構 縮尺1/600

柵列とそれらをかこむ溝という一連の遺構群と考えることができる。これらは明治初期の地籍図にみえる地割に近い方向をもっており、当時の蒲生野開拓にともなうものであろう。

平安・弥生時代の遺構(図版12・13, 図25) 平安後期の遺構として、柵列SA3, 建物SB4, 土坑SK1・SK2, 川SR1上層・SR2上層が、黒褐色土上面および黄色粘質土上面で検出された。SA3は調査範囲が狭いため、これに関連する柱列を発見することはできなかったが、建物跡の可能性もある。SB4は柱間が2.1m×3.4mをもつ建物で、その柱穴埋土からは底部糸切りの土師器皿・甕, 黒色土器碗・皿, 玉縁口縁をもつ白磁碗などが出土した(図28)。これにより12世紀ごろの建物跡と考えられるが、遺物に白磁をともなっているものの、規模はSR1・SR2によって規制され、関連する遺構も不明であるため、その性格については明らかでない。SK1・SK2からは、土師器皿と瓦器の碗・皿が出土した。SR1・

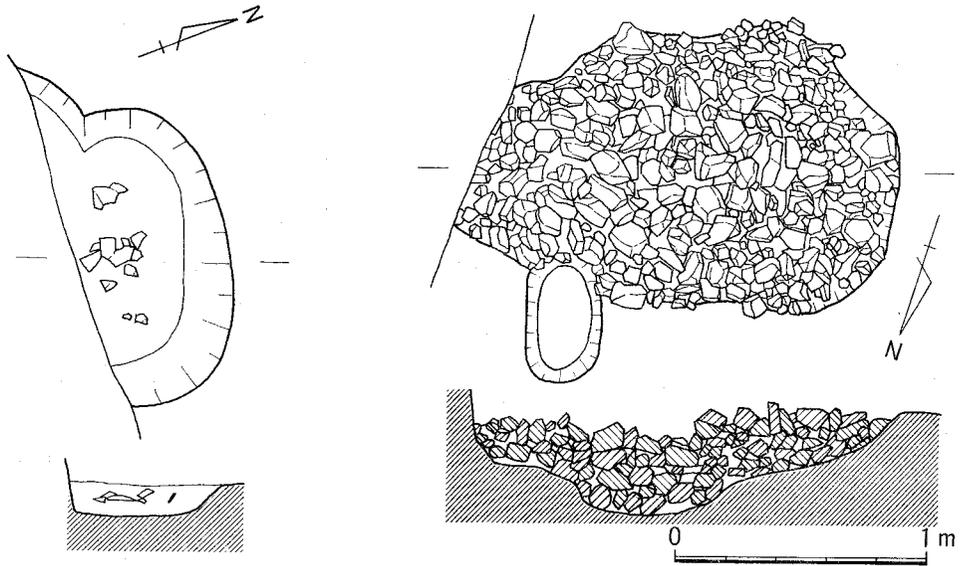


図26 土坑SK4(左), 土坑SK3(右) 縮尺1/30

SR2はC5・C6区から南で東西に分かれ、一方はA3・A4区の、他方はB7区の黒褐色土に連なる川と考えることができ、その上層では土師器皿、輪高台をもつ白磁碗、須恵器鉢などが出土し、若干の弥生土器が混在する。

弥生時代の遺構としては、溝SD15～SD18、土坑SK4、川SR1下層・SR2下層がある。SD15は断面V字形で、さらに溝底を方形に掘込むもので、同様の形態をもつ溝は、京都府船井郡園部町曾我谷遺跡〔園部町教委77 pp. 8～12〕、中郡峰山町途中ヶ丘遺跡〔峰山町教委77 pp. 41～76〕などに類例がある。これはB4区でSR1下層と連なっており、溝底は南から北へ向かって下がるもので、SR1から取水した水路と考えている。またSD16はD3区でSD15に切られて交差する溝で、これもSR1からの水路と考えられる。SD17・SD18は、ともに断面U字形をなす小規模な溝で、弥生中期の土器がまとまって出土する(図版13-3)。SK4は礫混り黄色粘質土を掘込んだ土坑で、弥生中期の壺2個体が良好な状態で出土した(図版13-2, 図26左)。

弥生・平安時代の遺構は、南東から北西へ下がる地形を反映して、建物、土坑などがおもに南東部にあり、川SR1・SR2によって南西部と区画されている様子がみられる。とくに弥生時代には、これらの川が生活と生業の場を境していたことを知ることができる。このほかに遺物がなく、時期や性格について明らかではないが、大量の礫を充填した土坑SK3もみられる(図版12-3, 図26右)。

### 3 遺物

弥生時代の土器、石器と古墳時代の土師器(図版14・15, 図27), 平安後期～鎌倉時代の土師器, 黒色土器, 瓦器, 須恵器, 中国製陶磁器(図版14・15, 図29)などが出土した。

弥生土器には壺(Ⅳ1～Ⅳ5), 甕(Ⅳ6・Ⅳ7), 高杯(Ⅳ8)があり, 石器には磨製石斧(Ⅳ10)と打製石斧(Ⅳ11・Ⅳ12)がある。そのうち第Ⅳ様式を中心とする土器が溝, 土坑, 川などからまとまって出土した。Ⅳ1はSK4, Ⅳ2・Ⅳ3・Ⅳ6はSD17, Ⅳ5・Ⅳ8はSR1上層, Ⅳ4・Ⅳ9は淡茶褐色土, Ⅳ7は黒褐色土から出土したものである。Ⅳ1は口縁部が大きく外反し, 端部をやや肥厚させて外面には凹線と刻み目が, 内面には櫛描波状文と扇状文が施され, 頸部には断面三角形の貼付け凸帯文がめぐる。Ⅳ2は壺形土器の体部で, 外面を刷毛目によって調整し, 櫛描の波状文と流水文を施す。流水文は時計回りに, そののちに下段の波状文を施文している。Ⅳ4は口縁部を上下に肥厚させて, 外面には凹線文と縦の棒状浮文を4個6単位で, 内面には櫛描波状文を施す。Ⅳ5は口縁端部を下方に垂れ下がらせて外面に凹線文を施すもの, Ⅳ6は「く」字状に口縁部が屈曲し, 指押え痕が残る。Ⅳ7は比較的小型の甕形土器で, 口縁部が屈曲して上端に刻み目が, 体部には叩き目が施されている。これらは途中ヶ丘遺跡〔峰山町教委77 pp. 77-134〕, 弥栄町奈具遺跡〔弥栄町教委72 pp. 19-48〕, 綾部市青野遺跡 A 地点〔綾部市教委76 pp. 53-73〕などでまとまって出土している。調整, 文様の構成は畿内弥生土器のそれに加えて, 丹後地方の影響を考慮しなければならないが, いずれも第Ⅳ様式にあたるものである。そのほかに, 体部が球形で口縁部が直線的に開く土師器(Ⅳ9)がある。Ⅳ10は砂岩製の磨製石斧の刃部でSR1から, Ⅳ11・Ⅳ12はスレート製で, それぞれSD15と黒褐色土から出土した。Ⅳ12の打製石斧は出土例は少ないが, 弥生時代のものと思われる。

平安・鎌倉時代の遺物には, 土師器の椀・皿・甕, 黒色土器, 瓦, 白磁・青磁の椀・皿, 須恵器鉢などがある。とくにSB4の柱穴からは, 土師器, 黒色土器, 白磁の良好な一括遺物が出土した。Ⅳ13は底部糸切りの土師器皿, Ⅳ16は頸部に指押えをもつ土師器甕である。Ⅳ14は内外面に丁寧な篋磨きを施す黒色土器皿, Ⅳ15は内面のみ篋磨きを施し, 高台のつく黒色土器椀で, いずれも糸切り底をもつ。Ⅳ17は比較的小さな玉縁の白磁椀で, 灰白色を呈する。平安後期の遺物で, この種の黒色土器は加悦町中上司遺跡〔加悦町教委79 pp. 33-36〕など丹後地方で集中的に出土している。Ⅳ18～Ⅳ21は土師器皿で, Ⅳ18・Ⅳ19は口縁部に2段撫でを, Ⅳ20は1段撫でを, Ⅳ21は底部に静止糸切り痕をもつ。Ⅳ22・Ⅳ23は瓦器皿。Ⅳ24は内面見込みに交差する暗文を, 内外面には篋磨きを施す瓦器椀

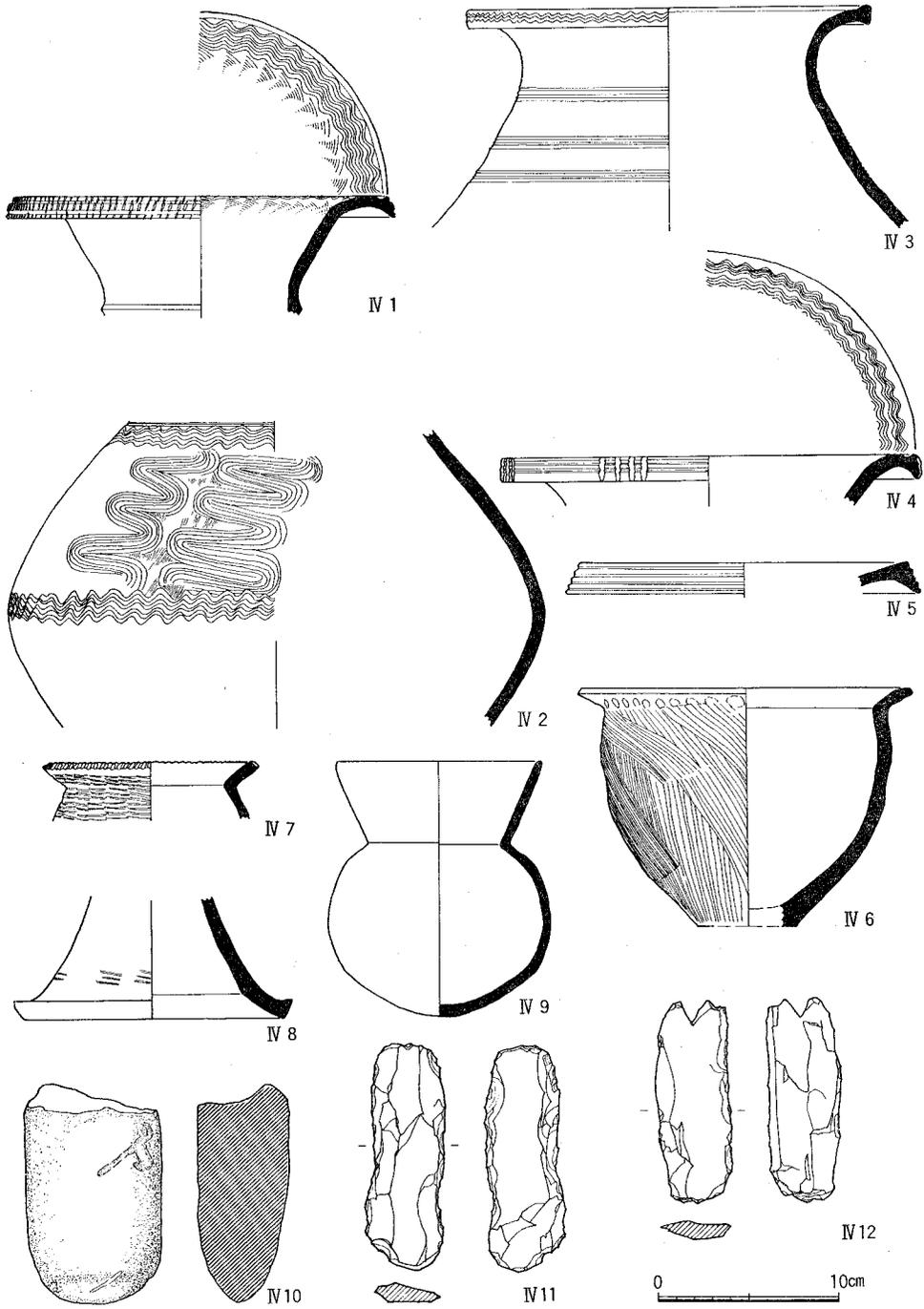


图27 SK 4 出土遺物(Ⅳ 1 弥生土器), SD17 出土遺物(Ⅳ 2 · Ⅳ 3 · Ⅳ 6 弥生土器), SR 1 上層出土遺物(Ⅳ 5 · Ⅳ 8 弥生土器, Ⅳ 10 石器), 淡茶褐色土層出土遺物(Ⅳ 4 弥生土器, Ⅳ 9 土師器), 黑褐色土層出土遺物(Ⅳ 7 弥生土器, Ⅳ 12 石器), SD15 出土遺物(Ⅳ 11 石器)

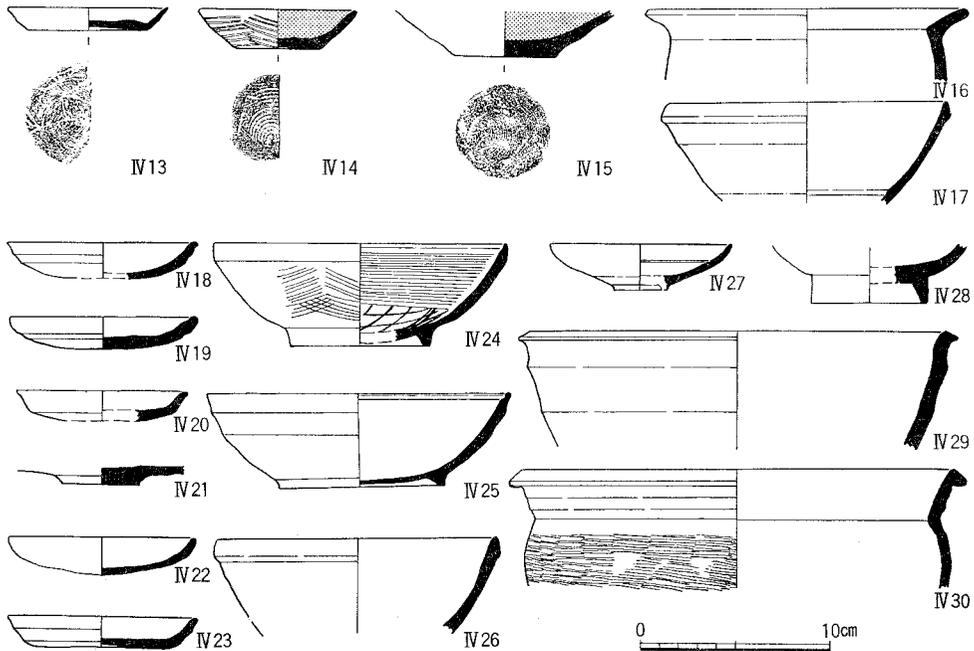


図28 S B 4 出土遺物(Ⅳ13・Ⅳ16土師器, Ⅳ14・Ⅳ15黒色土器, Ⅳ17白磁), 淡茶褐色土層出土遺物(Ⅳ18・Ⅳ21土師器, Ⅳ27白磁, Ⅳ29須恵器), 黒褐色土層出土遺物(Ⅳ19・Ⅳ20土師器, Ⅳ21～Ⅳ24瓦器, Ⅳ26白磁, Ⅳ30陶器), S K 2 出土遺物(Ⅳ25瓦器), S R 1 上層出土遺物(Ⅳ28白磁)

で、堅緻で暗灰色を呈する。Ⅳ25は口縁部を撫でによってやや外反させ、内面に沈線がめぐる瓦器碗。焼成が悪く黄灰色を呈する。S K 1 出土の碗には、この形態のものが多い。Ⅳ26は玉縁の、Ⅳ28は輪高台のつく白磁碗で、Ⅳ27は内面見込みに沈線がめぐる白磁皿である。Ⅳ29は須恵器鉢、Ⅳ30は中世陶器甕である。Ⅳ18・Ⅳ21・Ⅳ27・Ⅳ29は淡茶褐色土、Ⅳ19・Ⅳ20・Ⅳ22～Ⅳ24・Ⅳ26・Ⅳ30は黒褐色土、Ⅳ28はS R 1 上層から出土した。Ⅳ25は立合調査のさいにS K 2 から採集したものである。これらの瓦器や白磁は福知山市大内城跡〔伊野82 pp. 8-17〕からも出土しており、12世紀ごろにあたるものと考えられる。

#### 4 小 結

今回の調査によって、弥生中期と平安後期の遺構群の存在が明らかになり、さらに弥生中期の土器に関しては、由良川上流域では唯一の弥生時代遺跡の調査であり、畿内と丹後地方の土器要素の関係を捉える上で貴重な資料を得た。また、平安後期の建物、土坑などの遺構群と弥生時代以後連綿と残存した川S R 1・S R 2との立地の関係などは、今後に残された問題である。なお、遺物については佐原真氏、梅川光隆氏から、黒ボクに関しては石田志朗氏から有益な御教示をいただいた。

## 第6章 昭和56年度京都大学構内の試掘・立合調査

浜崎 一志

本章では京都市左京区所在の京都大学吉田キャンパスにおいて、昭和56年1月から昭和57年3月までに実施した試掘・立合調査について報告する。試掘調査は6件で総面積は、158㎡、諸配管理設工事立合調査が6件、建物新営工事立合調査が6件、道路造成工事立合調査が1件であった。以上の調査結果を、北部構内、本部構内、教養部・医学部・病院構内の3地域にわけて説明する。

### 1 北部構内(京都市左京区北白川追分町・北白川西町、図29・30)

農学部熱帯農学科校舎新営予定地(103)、農学部附属農業研究施設増築予定地(104)、北部構内実験排水槽設置予定地(105)の試掘調査がおもなものである。このうち、105地点の試掘調査については、この結果にもとづいて昭和56年7月より実施した発掘調査とともに第4章で報告したので、本章ではふれない。

**103地点の試掘調査** 103地点の地表は、ほぼ水平であったが、これは旧農学部本館撤去後の造成によるものである。試掘溝4および試掘坑5は旧本館基礎撤去工事により黄砂層まで攪乱されていたが、他の試掘坑は、ほとんど攪乱を受けておらず、層位も互いによく対応した。ここでは試掘溝3と試掘坑6の壁面層位図を用いて、103地点の層位について説明する(図30)。第1層は最近の盛土。第2層は旧本館新営(大正12年)の際の造成による盛土である。第3層(黄赤褐色土Ⅰ)、第5層(黄赤褐色土Ⅱ)は明治時代ごろの耕土層であり、第4層(砂礫)、第6層(黄白色砂)は小川の氾濫層である。この小川は下層のSD1やSD2の流れを踏襲するものであろう。第6層からは近世陶磁器とともに文久永寶(1863年初鋳)が出土した。第7層(青灰色土)は近世の耕土である。この耕土層は試掘坑6の西壁(図30左)で約40cmの段差

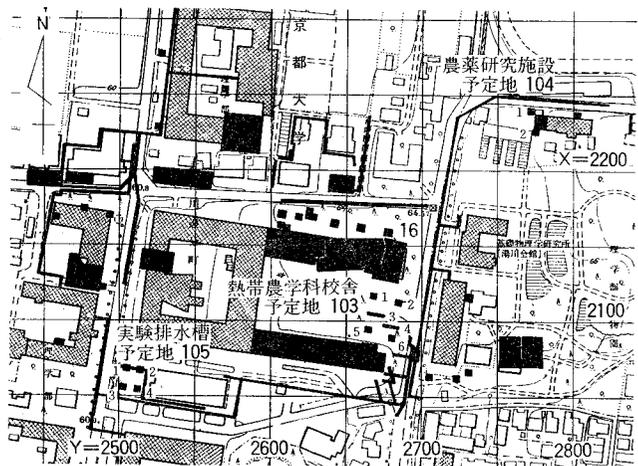


図29 北部構内の調査位置 縮尺1/5,000

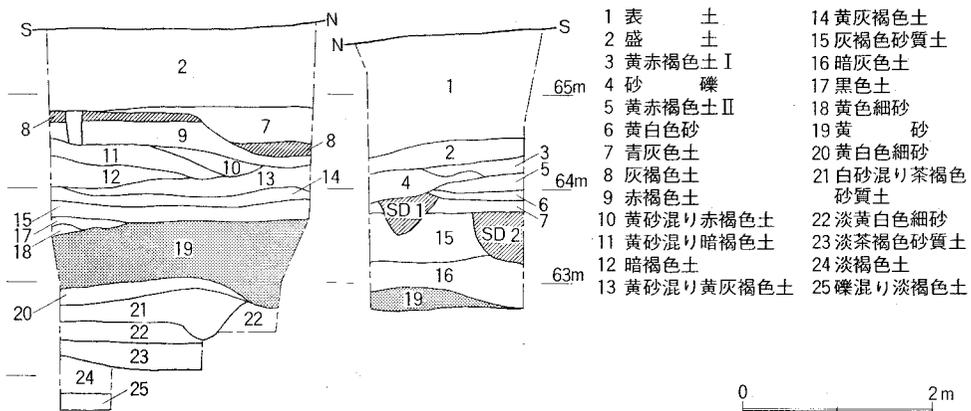


図30 北部構内試掘調査の層位(左 103-6, 右 103-3) 縮尺1/80

が観察されるほか、試掘溝3と試掘坑6の間にも約50cmの段差が存在する可能性があり、南から北に下がる棚田があったと思われる。103地点の北に隣接する16地点の調査では、北から南に下がる棚田を検出しており、103地点の北寄り部分は谷状にくぼんでいたと思われる。SD1・SD2は、こうした棚田に水を供給する水路のひとつであったのだろう。第9層(赤褐色土)は中世～近世の遺物を、第11層(黄砂混り暗褐色土)は中世京都Ⅲ期の土師器を含む。第12層(暗褐色土)は平安京Ⅱ期の土師器杯(V1)を含み、第15層(灰褐色砂質土)は9～10世紀ごろの黒色土器杯Bや緑釉の壺(V2)を含む(図33)。第19層は白川の堆積による黄砂層であるが、この層も第7層と同様に南から北に下がる。近世の谷状地形は、この黄砂上面の地形を踏襲しているものであろう。第20層から第23層は無遺物層であったが、第24層(淡褐色土)の上面から、縄文晩期(滋賀里Ⅳ)の深鉢の丸底部が坐った状態で出土した。16地点では集石と滋賀里Ⅳに相当する甕をともなった縄文晩期の土墳墓を検出している。16地点同様、103地点にも、縄文晩期の集石や土墳墓が存在する可能性が高い。

**104地点の試掘調査** 104地点は東から西へ緩やかに下がる。標高は約67mで、京都大学吉田キャンパス内で最も高い所に位置する。試掘調査は2ヶ所に試掘坑を掘削しておこなったが、近世以外の遺物はほとんど出土しなかった。しかし、104地点と約50mしか離れていない8地点(図版1)の調査で、平安後期の瓦溜が検出されており[京大埋文研78b]、増築工事の際に立合調査を実施した。その結果、104地点は東から西へ下がる棚田の段の下にあたり、古代・中世の遺物包含層は削平されていたことが判明した。

2 本部構内(京都市左京区吉田本町, 図31)

本年度は本部構内で発掘調査がなかったが、前年度から引続き実施した本部構内実験排水管理設工事等の立合調査により、近世の道路や中世の土器溜の貴重な資料を得ることができたので、従来成果とあわせてここに報告する。

道路造成工事のA地点の立合調査と実験排水管理設工事のC地点の立合調査により、近世の白川道および中世の白川道を検出した。A地点では現在の東大路通りの歩道とほぼ同じ高さで、幅1.4mにわたり近世の白川道を検出したが、その全幅は攪乱のため確認しえなかった。C地点では幅約3.2mの近世の白川道(第2章SF1)と、それに平行する流路(SD18・SD20)、および中世の白川道(SF2)を5.3mにわたり検出した。この両地点の調査結果と、B地点〔泉・浜崎81 p.39〕、57地点〔岡田・吉野80 pp.21-30〕、90地点(第2章)の調査結果から、近世の白川道の経路を復原した(図32)。吉田神社表参道から白川道に至る南北路は、D地点の立合調査〔泉・浜崎81 p.39〕と75地点の発掘調査〔五十川81 pp.23-24〕の結果から復原した。なお、近世道路については、第Ⅱ部第1章で吉田社周辺の景観復原を試みているため、これを参照されたい。

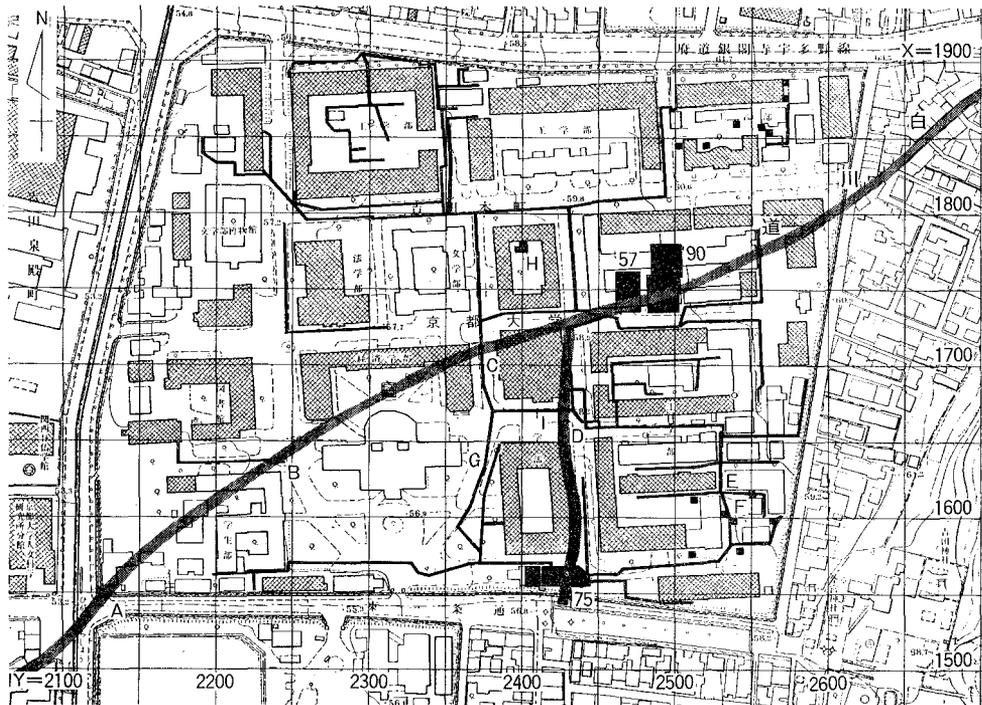


図31 本部構内の調査位置 縮尺1/5,000

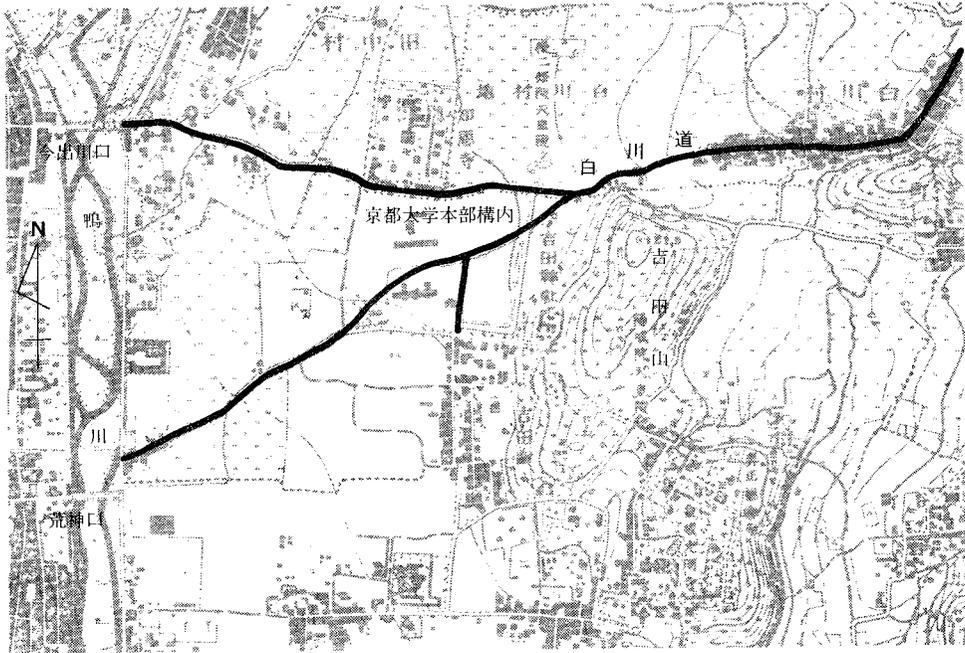


図32 近世の道路(明治25年仮製2万分1地形図から作成)

E地点では中世の土器溜を、F地点では中世の土坑を検出した。E地点の土器溜は、東西幅2.0m、深さ0.2mであったが、南北幅は確認できなかった。この土器溜からは大量の土師器と、須恵器すり鉢、瓦が出土した。これらの遺物の出土状況や、土師器の形態は、90地点のSK51(第2章)に似ている。V3～V11はE地点土器溜出土の土師器である(図33)。いずれも口縁部に1段の撫でと面取りを施す。V5は灰白色の碗の最も古い形態のものである。こうした碗を少量含むことから、SK51と同じく中世京都I期中段階のものであると思われる。F地点では土師器小片を含む大土坑を検出した。大土坑は南北6mにわたって検出された。これは、70地点の試掘調査の際に、TP6で検出した、深さ2m以上にもおよぶ土坑の続きである〔岡田ほか80 p.40〕。この大土坑も、E地点の土器溜とほぼ同時期のものである。本部構内で検出した中世京都I期の遺構は、以上のほかに71地点で検出されたSK1・SD1〔泉・浜崎81 pp.40-41〕があるが、検出例は、いずれも本部構内東半に集中している。SK51、E地点の土器溜のように大量の遺物の出土する特異な遺構の存在も、当時の本部構内一帯の地域の実態を考察するうえで注目すべき現象といえよう。

G地点では黄白色砂層を切る白砂層を検出した。この白砂層は北東から南西にはしる河川の埋土である。その本来の幅は不明であるが、検出幅は約25mにおよび、深さは0.6m

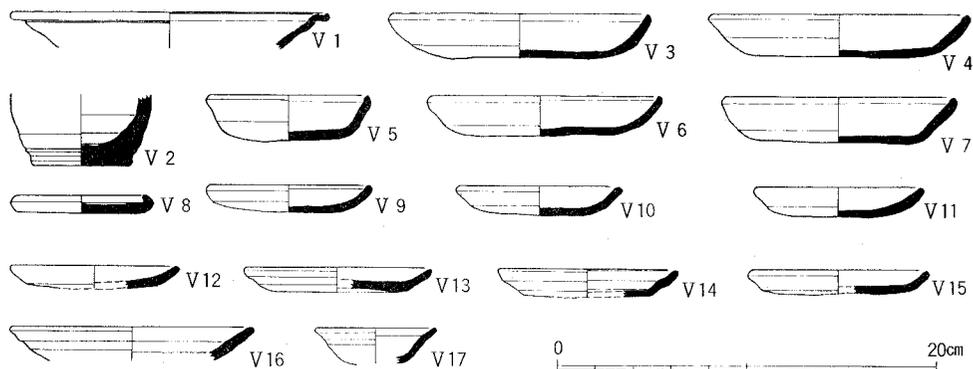


図33 北部構内103地点第12層出土遺物(V 1土師器, V 2緑釉陶器), 本部構内E地点土器溜出土遺物(V 3~V 11土師器), 医学部構内106・107地点出土遺物(V 12~V 17土師器)

であった。弥生前期末から中期初頭に埋積した黄砂層より下位にあり、それ以前に埋積した流路と考えられる。H地点では、75地点検出の溝SD3〔五十川81 pp.27-28〕の続きと思われる溝を検出した。この溝はI地点立合調査でも確認しており〔泉・浜崎81 p.41〕, 75地点では、土取り穴と墓地を区画する境界となっていた。北への連続部分が、等高線を斜めに横切って、まっすぐ延びることからも、13世紀ごろのこの地域の境界を示す重要な遺構と考えられる。

### 3 教養部・医学部・病院構内(京都市左京区吉田二本松町・吉田近衛町・吉田橋町・聖護院川原町, 図34・35)

放射性同位元素総合センター増築予定地(106-1~4), 放射線生物研究センター新営予定地(107-5~8), 医学部附属病院産科病棟ドライエリア増設予定地(108-1~4)の試掘調査と、教養部構内実験排水管理設工事(120)および医学部構内実験排水管理設工事(120)の立合調査がおもなものである。

**106・107地点の試掘調査** 放射線生物研究センターと放射性同位元素総合センターの新営・増築が隣接する敷地に計画されたため、一括して試掘調査を実施した。106・107地点の地表は緩やかに北から南へ下がり、その標高は51.5~52.0mをはかる。試掘坑6では激しい攪乱層を検出したのみであるが、試掘坑1~4・7・8で中世の土坑を、試掘坑5では弥生時代のものと考えられる溝を検出した。この地点の層位は以下のとおりである(図34)。第1層は表土。第2層(シルト混り灰褐色土)と第3層(暗褐色土)は無遺物層であったが、第4層(赤褐色土), 第5層(茶褐色土)からは13~14世紀の土師器皿や内面に櫛描き雷光文のある同安窯系青磁碗が出土した(図33)。第6層~第9層は不定形土坑の埋土であ

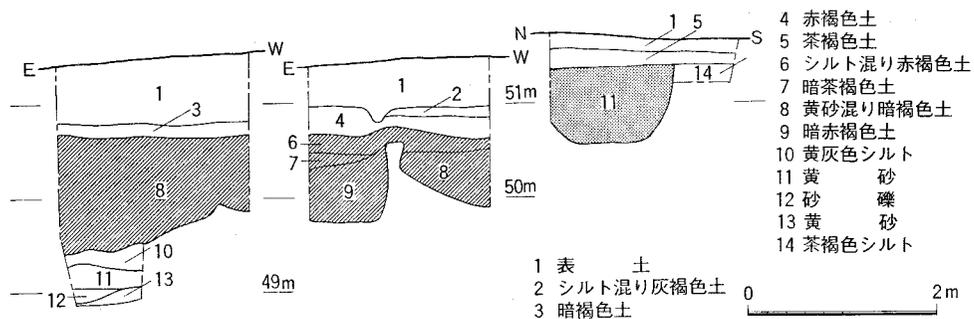


図34 医学部構内試掘調査の層位(左107-7, 中106-4, 右107-5) 縮尺1/80

る。こうした不定形土坑は、本調査区の北約100mの74地点でも多数検出しており、粘土を採取した跡と考えられている[清水・吉野81 p. 15]。本調査区の不定形土坑もこれらと一連の遺構であろう。ただし、これらの不定形土坑は、西側の41地点や東側の73地点および91地点には、まったく存在しない。不定形土坑の分布する範囲は医学部東半部に限られるようである。こうした現象は、74地点から106・107地点にかけての一带が13世紀頃には粘土を採取してもさしつかえのない状態であったことを示唆する。12世紀末から14世紀初

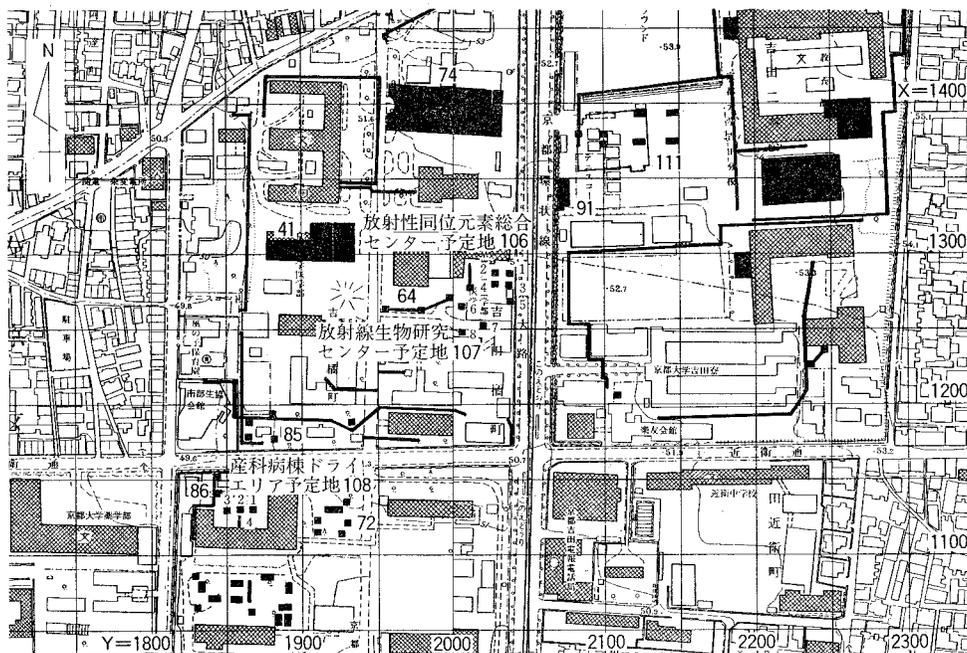


図35 教養部・医学部・病院構内の調査位置 縮尺1/5,000

頭にかけて、106・107地点を含む医学部構内から教養部構内西半部一帯には、藤原北家勸修寺家の流れをくむ吉田経房一族の吉田南亭や浄蓮華院があったと考えている（第Ⅱ部第1章）。こうした吉田氏の邸宅や菩提寺の占地を考察していくうえで、注目に値する現象である。第10層は採取の対象となった黄灰色シルトである。試掘坑5で幅1.3m、検出面からの深さが0.8m、断面がU字状をなし、北東から南西にはしる溝を検出した。溝の埋土の黄砂（第11層）は、弥生前期末から中期初頭にかけて埋積したもので、この溝は弥生前期以前のもと考えられる。現在発掘中の111地点では本調査地にむかってまっすぐ延びると想定できる弥生前期の溝を、40mにわたって検出している。この溝も、黄砂を埋土とし、断面がU字状をなすことから、同一の溝である可能性が高い。したがって、試掘坑5で検出した溝を、弥生前期のもと考えてよからう。なお、本調査区のすぐ西側の64地点では、弥生後期の壺・甕が出土している〔京大埋文研80 p.5〕。以上のような結果から本調査地には、弥生時代においては111地点と、また中世においては74地点と連続する遺構の存在を確認することができた。

**108地点の試掘調査** 108地点の地表はほぼ水平で、標高約50.1mをはかる。調査は試掘坑1～3と試掘溝4を設けて実施した。しかし、すぐ北側の85地点の試掘調査同様、遺物は出土せず、遺構も検出されず、地山の赤褐色砂礫を確認して調査を終了した。

医学部・病院構内では、平安後期以後の遺構が多数検出される地域と、古代・中世の遺構がまったく検出されない地域がある。後者は医学部構内西南部と、108地点をふくむ病院東構内西北部、病院西構内の東南部をのぞく全域がこれにあたり、中世までは高野川・鴨川の氾濫原であったと考えている。

## 参 考 文 献

- 綾部市教育委員会 1976年 『青野遺跡A地点発掘調査報告書』(『綾部市文化財調査報告書 第2集』)
- 石田志朗・中村徹也 1972年 『京都大学理学部構内遺跡調査の概要』
- 泉 拓良 1977年 「京都大学植物園遺跡」『仏教芸術』115号
- 1978年 「京都大学北部構内の地形復原——縄文時代から弥生時代——」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
- 泉 拓良・浜崎一志 1981年 「京都大学構内の試掘・立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 五十川伸矢 1981年 「京都大学本部構内A T27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 伊野近富 1982年 「大内城跡発掘調査概要」『京都府埋蔵文化財情報 第3号』
- 宇佐晋一 1956年 「緑釉土器窯址本山遺跡とその周辺」『古代学研究』15, 16合併号
- 宇野隆夫 1981年 「遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ——白河北殿北辺の調査——』
- 梅原末治 1923年 「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告 第5冊』
- 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第16冊』
- 1936年 『撰津阿武山古墓調査報告』(『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第7輯』)
- 小笠原好彦 1975年 「土馬考」『物質文化』25
- 岡田保良 1980年 「平安時代鴨東白河の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
- 岡田保良・吉野治雄 1980年 「京都大学本部構内A W28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
- 岡田保良・清水芳裕・吉野治雄 1980年 「京都大学吉田キャンパスの試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
- 加悦町教育委員会 1979年 『中上司遺跡発掘調査報告書』(『京都府・加悦町文化財調査報告 第2集』)
- 木下 良 1971年 「西岡地方における城館と防御集落」『京都社会史研究』(『同志社大学人文科学研究所研究叢書 XⅡ』)
- 京大調査会(京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会)  
1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研(京都大学埋蔵文化財研究センター)

- 1978年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』  
 1978年 b 『京都大学埋蔵文化財調査報告 第1冊——京大農学部遺跡B G 36区——』  
 1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』  
 1980年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』  
 1981年 a 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ——白河北殿北辺の調査——』  
 1981年 b 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 紅村 弘 1959年 『東海の先史時代——三河篇』（『東海叢書 第十巻』）
- 島田貞彦 1924年 「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号
- 清水芳裕・吉野治雄 1981年 「京都大学医学部構内A P 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 瀬川芳則 1976年 「弥生式時代の淀川左岸地方遺跡の検討」『大阪歴史学会二十五周年記念 古代国家の形成と展開』
- 園部町教育委員会 1977年 『曾我谷遺跡発掘調査概報』（『園部町埋蔵文化財調査報告書 第2集』）
- 高橋美久二・金村允人・森毅 1979年 「中海道遺跡発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第3集』
- 中村徹也 1973年 『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』  
 1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』  
 1974年 b 『京都大学理学部ノートパイオロン 実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』  
 1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
- 橋本久和 1980年 「中世土器研究予察」『上牧遺跡発掘調査報告書』（『高槻市文化財調査報告書 第13冊』）
- 藤岡謙二郎 1973年 「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集
- 文化庁文化財保護編 1976年 『全国遺跡地図 和歌山県』
- 細見末雄 1980年 『丹波の荘園』
- 峰山町教育委員会 1977年 『京都府峰山町途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』（『京都府峰山町文化財調査報告 第3・4集』）
- 弥栄町教育委員会 1972年 『奈良遺跡発掘調査報告書』（『京都府弥栄町文化財調査報告 第1集』）
- 横田賢次郎・森田勉 1978年 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について——型式分類と編年を中心にして——」『九州歴史資料館研究論集4』
- 横山浩一・佐原真 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料日録 第1部 日本先史時代』

# 京都大学構内遺跡調査要項

## 京都大学埋蔵文化財研究センター要項

- 第1条 京都大学に埋蔵文化財研究センター（以下「センター」という。）を置く。
- 第2条 センターは、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行う。
- 第3条 センターにセンター長を置く。
- センター長は、京都大学の専任の教授をもって充てる。
  - センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
  - センター長は、センターの所務を掌理する。
- 第4条 センターに、必要に応じて、助教授、助手その他の職員を置く。
- 第5条 センターに、調査研究及び保存に関する業務を処理するため、研究部を置く。
- 研究部に主任を置き、前条の教官をもって充てる。
  - 主任は、研究部の業務をつかさどる。
- 第6条 センターにセンターの事業に関する基本的計画、人事その他管理運営に関する重要事項を審議するため、運営協議会を置く。
- 運営協議会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
    - センター長
    - センターの研究部の主任
    - 前2号以外の学識経験者のうちから総長の委嘱した者 若干名
    - 事務局長及び施設部長
  - センター長は、運営協議会を招集し、議長となる。
  - 前各項に規定するもののほか、運営協議会の運営に関し必要な事項は、運営協議会が定める。
- 第7条 この要項に定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項はセンター長が定める。

センター長	樋口隆康（文学部教授）	研究部研究員	清水芳裕（文学部助手）
運営協議会委員	上田正昭（教養部教授）	〃	五十川伸矢（文学部助手）
〃	池田次郎（理学部教授）	〃	浜崎一志（工学部助手）
〃	西川幸治（工学部教授）	〃	吉野治雄（施設部技術補佐員） （～9月15日）
〃	石田志朗（理学部助教授）	〃	飛野博文（施設部技術補佐員） （10月1日～）
〃	澤田 徹（事務局長）	事務室	大八木邦雄（施設部事務官）
〃	井内 昭（施設部長）		梅川厚子（施設部技術補佐員）
研究部主任	泉 拓良（文学部助手）	〃	

## 京都大学構内遺跡調査会規約

- 第1条 この会は、京都大学構内遺跡調査会(以下「調査会」という。)と称し、京都大学の委託により同大学構内における建築物新営工事等に伴い必要な敷地内の遺跡調査を行うことを目的とする。
- 第2条 調査会は、事務所を京都市左京区北白川西町財団法人阪本奨学会内に置く。
- 第3条 調査会は、第1条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 京都大学の委託により行う当該敷地内の埋蔵文化財についての発掘調査
  - (2) 前号の調査により出土した埋蔵文化財の保存、管理に関する事項の審議
  - (3) 埋蔵文化財の調査に関する発掘調査概要報告書の作成
  - (4) その他必要とする事項
- 第4条 調査会に次の役員を置く。
- (1) 会長1名
  - (2) 委員  
イ 京都大学の学識経験者 若干名  
ロ 新営工事等の敷地の属する京都大学の部局の長または部局附属施設の長  
ハ 新営工事等の敷地の所在する地域の文化財保護行政当局の推薦する者 若干名
  - (3) 監事 若干名
- 2 会長は、前項第2号イの委員の推薦する者とする。
  - 3 委員及び監事は、会長が委嘱する。
  - 4 第1項第2号ロ及びハの委員は、当該敷地内の遺跡調査に関する委員としての任務が終わったときは、退任する。
- 第5条 会長は、調査会を代表し、業務を総括する。
- 2 委員は、委員会を構成し、委員会の議決に基づく業務を執行する。
  - 3 監事は、調査会の会計を監査する。
- 第6条 委員会は、会長及び委員をもって組織する。
- 2 委員会は、会長が招集し、議長となる。
  - 3 委員会は、新営工事等の敷地が京都市以外の地域にある場合で、必要と認めるときは、部会を置くことができる。
- 第7条 第3条の発掘調査の実施に当たるため、調査会に調査班を置く。
- 2 調査班は、調査班長、調査員及び調査補助員をもって組織する。
  - 3 調査班長は、委員会の議に基づき会長が委嘱する。
  - 4 調査員及び調査補助員は、調査班長の推薦により会長が委嘱する。
- 第8条 調査会の事務を処理するため、調査会に事務局を置く。
- 2 事務局に職員若干名を置く。

3 職員は、会長が任免する。

第9条 調査会の経費は、京都大学から支出される調査委託費をもって充てる。

第10条 調査会は、4月1日に始まる年度ごとに、事業報告書及び収支決算書を作成し、監事の監査を経て、年度終了後3月以内に委員会の承認を受けるものとする。

第11条 この規約に定めるもののほか、調査会の運営に関し必要な事項は、会長が定める。

会長	川上 貢(工学部教授)	委員	西村 進(理学部助教授)
委員	樋口隆康(文学部教授)		足利健亮(教養部助教授)
	亀井節夫(理学部教授)		泉 拓良(文学部助手)
	西川幸治(工学部教授)		小野真海(事務局庶務部長)(~5月31日)
	石田志朗(理学部助教授)		松村圭三(事務局庶務部長)(6月1日~)
規約第4条1項(2)ロ	繁沢和夫(教養部長)		北川善太郎(学生部長)
	山口昌哉(理学部長)		

規約第4条1項(2)ハ 山下利弘(京都市埋蔵文化財調査センター所長)

監事	藤原茂男(施設部企画課長)	藤沢正之(理学部事務長)
	笠原茂樹(教養部事務長)	飛弾昌人(学生部厚生課長)
事務局員	大八木邦雄(施設部事務官)	川野美栄子(調査会事務員)
	梅川厚子(施設部技術補佐員)	中村美代(調査会事務員)

#### 京都大学構内遺跡調査会丹波町部会

会長	川上 貢(工学部教授)	
委員	樋口隆康(文学部教授)	泉 拓良(文学部助手)
	石田志朗(理学部助教授)	
規約第4条1項(2)ロ	苦名 孝(農学部長)(~4月30日)	並河 澄(農学部附属牧場長)
	深海 浩(農学部長)(5月1日~)	

規約第4条1項(2)ハ 東條 壽(京都府文化財保護課長) 徳岡孫太郎(丹波町教育長)

監事	藤原茂男(施設部企画課長)	丸田義男(農学部事務長)
----	---------------	--------------

#### 京都大学構内遺跡調査会和歌山県部会

会長	川上 貢(工学部教授)	
委員	樋口隆康(文学部教授)	石田志朗(理学部助教授)
	亀井節夫(理学部教授)	泉 拓良(文学部助手)
規約第4条1項(2)ロ	山口昌哉(理学部長)	藤永太一郎(瀬戸臨海実験所長)

規約第4条1項(2)ハ

	翔磨正信(和歌山県文化財保護審議会委員)	畑村半亮(和歌山県教育庁文化財課長)
	巽 三郎(和歌山県文化財保護審議会委員)	真鍋清兵衛(白浜町教育委員会教育長)
	大原 満(白浜町文化財保護審議会委員)	
監事	藤原茂男(施設部企画課長)	藤沢正之(理学部事務長)

調 査 班

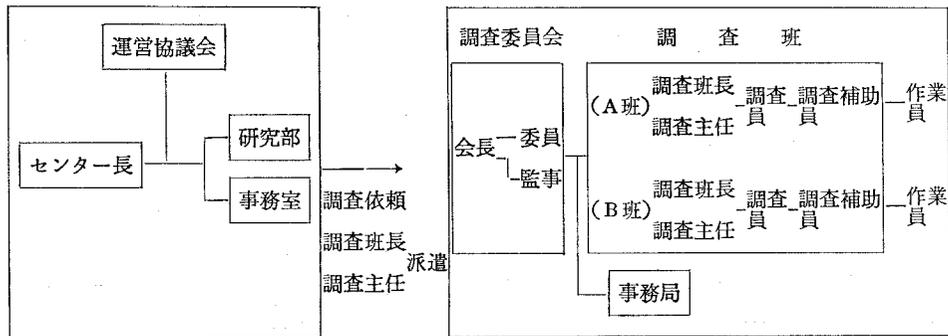
調査班長・主任 泉拓良, 清水芳裕, 五十川伸矢, 浜崎一志, 吉野治雄, 飛野博文  
 調査員 鎌田博子, 川島はる代, 津隈久美子, 花谷 浩, 増井正哉, 森本 晋, 家根祥多  
 調査補助員 浅田泰央, 浅野恒一郎, 井浦由美, 井上 真, 岩堀美香, 小川晃代, 小東和美, 柴田裕子, 下位幸弘, 寺門真佐子, 寺島千春, 西脇对名夫, 馬場照彦, 前田禎彦, 宮川禎一, 宮本一夫  
 作業員 赤沢俊男, 池田イン, 池田みどり, 池ノ本二郎, 石原規子, 五十榎彰男, 五十榎宏, 井濶タイ子, 井濶美代子, 入山 明, 岩城英伸, 岩下武男, 岩瀬洋子, 宇井保彦, 岡本 勇, 小原祥市, 川崎雅史, 菊原 淳, 木村栄三郎, 木村謙次, 木村 漣, 久世和則, 栗須京子, 佐藤初恵, 壺井美春, 中村皓子, 西 浩, 西川貞子, 橋本庄次, 橋本俊夫, 浜野茂弘, 平山聖顯, 福井長治, 福田文治, 本田好恵, 松井ヤス子, 松川登城, 眞鍋政一, 三浦信一, 水上光雄, 南さつき, 森田勝晴, 安田秀男, 山崎伝七, 山中貞男, 結城澄江, 吉田禎二, 吉田龍太郎  
 現場事務員 文字幸子

<b>本部構内A X28区調査班</b>		発掘期間	昭和56年2月20日～同3月31日
所在地	京都市左京区吉田本町	面積	112㎡
工事名	工学部電気系学科校舎新営	班長・主任	泉 拓良, 吉野治雄
発掘期間	昭和55年7月21日～同11月21日	調査員	津隈久美子
面積	1120㎡	作業員	5名
班長・主任	泉 拓良, 五十川伸矢, 浜崎一志	<b>北部構内B D30区発掘調査班</b>	
調査協力者	岡田保良	所在地	京都市左京区北白川追分町
調査員	川島はる代, 竹村恵二, 津隈久美子 増井正哉	工事名	北部構内実験排水槽設置
調査補助員	9名	発掘期間	昭和56年8月1日～同9月5日
作業員	12名	面積	272㎡
<b>農学部附属牧場施設新営予定地調査班</b>		班長・主任	泉 拓良, 浜崎一志
所在地	京都府船井郡丹波町蒲生野	調査員	川島はる代, 津隈久美子, 森本晋, 家根祥多
工事名	農学部附属牧場施設新営	作業員	9名
発掘期間	昭和55年11月25日～同12月27日	<b>和歌山県瀬戸遺跡発掘調査班</b>	
面積	1468㎡	所在地	和歌山県西牟婁郡白浜町
班長・主任	泉 拓良, 清水芳裕, 五十川伸矢, 浜崎一志, 吉野治雄	工事名	理学部附属瀬戸臨海実験所研究棟新 営
調査員	川島はる代, 津隈久美子	発掘期間	昭和56年9月14日～同11月20日
作業員	27名	面積	1500㎡
<b>教養部構内A O21区発掘調査班</b>		班長・主任	泉 拓良, 清水芳裕, 五十川伸矢, 浜崎一志
所在地	京都市左京区吉田二本松町	調査員	川島はる代, 津隈久美子, 花谷浩,
工事名	教養部構内実験排水槽設置		

家根祥多  
 作業員 28名  
**本部構内 A X 28区調査班**  
 所在地 京都市左京区吉田本町  
 工事名 工学部電気系学科校舎附属施設設置  
 発掘期間 昭和56年11月17日～同12月12日  
 面積 34㎡  
 班長 浜崎一志  
 調査補助員 3名  
 作業員 4名  
**教養部構内 A P 22区調査班**  
 所在地 京都市左京区吉田二本松町  
 工事名 吉田食堂新営  
 発掘期間 昭和56年11月20日～昭和57年5月8日  
 面積 1716㎡  
 班長・主任 五十川伸矢, 清水芳裕, 飛野博文  
 調査員 竹村恵二, 津隈久美子  
 調査補助員 9名  
 作業員 20名  
**農学部附属垂熱帯植物実験所実習宿泊施設  
 新営予定地試掘調査**  
 所在地 和歌山県西牟婁郡串本町須江  
 調査期間 昭和56年4月1日～同4月3日  
 面積 28㎡  
 担当者 泉拓良, 浜崎一志  
**農学部熱帯農学科校舎新営予定地試掘調査**  
 所在地 京都市左京区北白川追分町  
 試掘期間 昭和56年6月1日～同6月18日

面積 56㎡  
 担当者 泉 拓良, 浜崎一志  
**農定部附属農薬研究施設増築予定地試験調査**  
 所在地 京都市左京区北白川追分町  
 試掘期間 昭和56年6月17日～同6月19日  
 面積 8㎡  
 担当者 泉 拓良, 浜崎一志  
**北部構内実験排水槽設置予定地試掘調査**  
 所在地 京都市左京区北白川追分町  
 試掘期間 昭和56年6月20日～同7月1日  
 面積 26㎡  
 担当者 泉 拓良, 浜崎一志  
**放射線生物研究センター新営予定地試掘調査**  
 所在地 京都市左京区吉田橋町  
 試掘期間 昭和56年7月6日～同7月10日  
 面積 16㎡  
 担当者 泉 拓良, 浜崎一志  
**放射性同位元素総合センター増築予定地  
 試掘調査**  
 所在地 京都市左京区吉田橋町  
 試掘期間 昭和56年7月9日～同7月15日  
 面積 16㎡  
 担当者 泉 拓良, 浜崎一志  
**医学部附属病院産科病棟ドライエリア増設  
 予定地試験調査**  
 所在地 京都市左京区聖護院川原町  
 試掘期間 昭和56年7月14日～同7月18日  
 面積 16㎡  
 担当者 泉 拓良, 浜崎一志

京都大学構内遺跡調査の構成



京都大学埋蔵文化財研究センター

京都大学構内遺跡調査会

表 4 京都大学構内遺跡のおもな調査

(地点は図版1を参照，文献中「埋」は京大埋文研，「調」は京大調査会をさす。)

年 度	遺 跡 名 称	地 点	担 当 者	調 査 の 種 類	面 積 (m <sup>2</sup> )	遺 構	遺 物	文 献	備 考
大正12年	農 学 部	1・2	浜田 耕作	表採・試掘			縄文土器，石器	梅原23 島田24	
13年	農 学 部	不明	藤本理三郎				石 棒	横山・佐原60	
昭和9年	大阪府阿武山古墓		梅原 末治	発 掘			乾漆棺，玉飾枕	梅原36	
10年	北 白 川 小 倉 町		梅原 末治				縄文土器，石器	梅原35	
31年	農 学 部	3	羽館 易	採 集			縄文土器		
46年	農 学 部	4	石田 志朗	採 集			弥生土器	埋79	
47年	農 学 部	5		採 集			石 棒		
	大阪府溝		小野山 節都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器，石器	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
	追分地蔵	6	石田 志朗 中村 徹也	事前発掘	600		弥生土器，石器	石田・中村72	
	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
48年	農 学 部	8	中村 徹也	事前発掘	13	瓦 溜	縄文土器，瓦(平安)	埋78b	瓦溜埋戻し
	農 学 部	9	中村 徹也	事前発掘	600		縄文土器，土師器	中村73	
	農 学 部	10	中村 徹也	事前発掘	40		縄文土器		
	植 物 園	11	中村 徹也	事前発掘	400	縄文後期 甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74b， 泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
49年	農 学 部	12	中村 徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74a	
	農 学 部	13	中村 徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
50年	教養部	14	小野山 節 中村 徹也	事前発掘	750		縄文土器		
51年	農 学 部 B E 33区	16	泉 拓良	事前発掘	900	縄文晩期 土壙墓	縄文土器， 土師器，瓦	調77	
	病 院 A E 15区	19	岡田 保良	事前発掘	2200	古代・中世 池，溝，土 器溜	土師器，瓦， 陶磁器	調77， 埋81a	
	植 物 園 B D 35区	29	吉野 治雄	保 存				調77	甕棺・配石の移築復原

年 度	遺 跡 名 称	地 点	担 当 者	調 査 の 種 類	面 積 (㎡)	遺 構	遺 物	文 献	備 考
昭和51年	病 院 A H17区	34	泉 拓良	事前発掘	200	近世溝, 井戸, 集 石	土師器, 瓦	埋78 a	
	和歌山県 瀬 戸		丹羽 佑一	事前発掘	300	縄文時代 土壙墓	縄文土器, 人骨	埋78 a	
52年	病 院 A F14区	39	岡田 保良 宇野 隆夫	事前発掘	800	古代・中世 護岸, 溝, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋78 a, 埋81 a	
	医 学 部 A O18区	41	泉 拓良 吉野 治雄	事前発掘	1200	中世溝, 土器溜, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋78 a	
53年	理 学 部 B E29区	54	岡田 保良 吉野 宇野 宇野 隆夫	事前発掘	500	弥生中期 方形周溝 墓, 中世 火葬塚	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	火葬塚と方 形周溝墓を 現地保存
	農 学 部 B G32区	55	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	100	古代土坑, 溝	縄文土器, 土師器	埋79	
	農 学 部 B G31区	56	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	650	縄文晩期 埋没林	縄文土器	埋80	
	本 部 A W28区	57	岡田 保良 吉野 治雄	事前発掘	500	近世白川 道	陶磁器, 土 師器, 銭貨	埋80	
54年	医 学 部 A P19区	74	清水 芳裕 吉野 治雄 五十川伸矢	事前発掘	2776	中世井戸, 溝, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 旧 石器	埋81 b	
	本 部 A T27区	75	五十川伸矢	事前発掘	400	奈良後期 堅穴住居, 中世土壙 墓, 近世 道路	土師器, 須 恵器, 白磁	埋81 b	堅穴住居跡 を現地保存
昭和55年	本 部 A T27区	89	泉 拓良	事前発掘	115	近世道路, 堀	土師器, 近 世陶磁器	埋81 b	
	本 部 A X28区	90	泉 拓良 五十川伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1120	近世白川 道, 中世 土器溜, 井戸, 建 物	土師器, 瓦, 陶磁器, 銅 鏃(弥生), 磨製石鏃	第2章	
	京 都 府 月 美		泉 拓良 清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 治雄 吉野 治雄	事前発掘	1468	弥生中・ 後期水路, 土坑, 中 世土器溜	弥生土器, 打製石斧, 瓦器, 陶磁 器	第5章	立合調査中 に遺跡発見, 工事を中 断し発掘 調査
	教 養 部 A O21区	91	吉野 治雄	事前発掘	112	中世井戸, 土壙墓	土師器, 瓦 器, 陶磁器	第3章	
	本 実 験 排 水	98	清水 芳裕	立 合		流路, 中 世土器溜	土師器, 丸 瓦	第6章	遺構実測

年 度	遺 跡 名 称	地 点	担 当 者	調 査 の 種 類	面 積 (㎡)	遺 構	遺 物	文 献	備 考	
昭和56年	和歌山県山田郡大森農学部BE33区	103	泉浜崎 拓良一志	試掘	28			第1章	遺跡なし	
	農学部BG35区	104	泉浜崎 拓良一志	試掘	76	近世水路	縄文土器, 瓦, 緑釉須恵器	第6章	発掘調査決定	
	理学部BD30区	105	泉浜崎 拓良一志	試掘	8		縄文土器, 須恵器	第6章	立合調査決定	
	医学部AN20区	106	泉浜崎 拓良一志	試掘	26	近世瓦溜	弥生土器, 瓦	第4章	発掘調査決定	
	医学部AN20区	107	泉浜崎 拓良一志	試掘	16	中世土坑	土師器	第6章	発掘調査決定	
	医学部AN20区	107	泉浜崎 拓良一志	試掘	16	中世土坑, 弥生溝	土師器, 陶磁器	第6章	発掘調査決定	
	病院AK17区	108	泉浜崎 拓良一志	試掘	16			第6章	遺跡なし	
	理学部BD30区	109	泉浜崎 拓良一志	事前調査	272	古代建物, 近世瓦溜	土師器, 瓦, 陶磁器	第4章		
	和歌山県山田郡瀬本農学部AX28区	110	泉清水五十川浜崎 拓良一志	事前調査	1500	弥生土坑, 弥生配石, 古墳時代土坑	縄文土器, 硬玉管玉, 弥生土器, 製塩土器		整理中	
	教養部AP22区	111	五十川飛野 仲矢博文	事前調査	34	中世土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 硯	第2章	整理中	
	教養部AP22区	111	五十川飛野 仲矢博文	事前調査	1716	弥生溝, 古墳, 古鐘, 代梵鐘, 造遺構, 中世溝, 墓	縄文土器, 弥生土器, 須恵器, 土師器, 銚形, こしき, 炉		発掘中	
	京都府海部郡宇治市		泉 拓良一志	立合			石器, 中世陶磁器	第1章		
	医学部AG12区	112	泉浜崎 拓良一志	立合					遺跡なし	
	京都府宇治市		泉 拓良一志	立合					遺跡なし	
	農学部BG36区	113	泉浜崎 拓良一志	立合				須恵器, 瓦		
	和歌山県山田郡瀬本農学部AT21区	114	清水 芳裕	立合			白川道	縄文土器	第1章	
	教養部電気本館AU21区	115	五十川飛野 仲矢博文	立合			中世土器溜	土師器, 瓦	第1章	遺構実測
	農学部BG35区	116	清水 芳裕	立合				土師器, 近世陶磁器		
	本館AX26区	117	泉 拓良一志	立合			中世溝	土師器, 瓦	第6章	
	医学部病院給水管	118	清水 芳裕	立合			中世土器溜	瓦	第6章	
	教養部医学部実験排水	119	清水 五十川 芳裕 仲矢博文	立合			中世土器溜	土師器		
教養部医学部実験排水	120	清水 芳裕	立合			中世溝, 中世土坑	土師器, 瓦			
ヘリウム管	121	清水 芳裕	立合						遺物なし	
京都市山本				分布調査			縄文土器, 緑釉陶器, 灰釉陶器	第1章		

## 第Ⅱ部 京都大学埋蔵文化財研究センター紀要

### 第1章 浄蓮華院と吉田構

——応仁の乱後の吉田の復元的考察——

浜崎 一志

#### 1 はじめに

文正2(1467)年の「御霊林の戦い」<sup>(1)</sup>に端を發した応仁の乱は、応仁元(1467)年5月には本格的な大乱となり、洛中に壊滅的な打撃をあたえた。応仁2(1468)年にはいると戦火は洛外にもおよび、7月には吉田郷<sup>(2)</sup>が、8月には聖護院と熊野社が焼き打ちを受け、吉田郷の西にあった浄蓮華院も同じころ兵火にかかり炎上した。この乱の後、聖護院は岩倉へ退転し、浄蓮華院は廢寺同様となった。こうした事態と併行して、吉田では所領の再編がおこなわれ、土地の利用状況も変化し、その様相は激変した。そして16世紀前葉に吉田一帯は吉田社の一円支配のもとにおさまり、そのまま近世を経て近代をむかえる。本稿では、中世後半から近世にかけての吉田を知る上で欠くことのできない浄蓮華院と吉田構<sup>よしだのかまえ</sup>に関する知見をまとめ、そうした中世後半の状況を踏襲した近世の吉田村の復原を試み、当時の吉田の状況を知る上での一助としたい。

#### 2 浄蓮華院と吉田社領

浄蓮華院は正治元(1199)年に、藤原北家勸修寺流の吉田経房が建立した寺で、経房の死後は彼の菩提所となった寺である。この浄蓮華院や勸修寺家の吉田の別業については中村直勝<sup>(3)</sup>の研究がある。その中で中村は、経房がさして広くもない吉田の所領を、細分して子孫に譲ることにより、浄蓮華院がすたれることのないように配慮していたことを明らかにしている。しかし、こうした配慮もむなしく、建武4(1337)年に氏の長者吉田定房が南朝に従い吉野に移ったことにより、浄蓮華院は、その有力な支持基盤を失い、寺勢が衰えたようである。そして、応仁の乱によって炎上してからは荒廢をきわめ、その所領も、吉田(卜部)兼俱の率いる吉田社に蚕食され、ついには吉田社領に組みこまれてしまう。本節では、経房と同じ藤原北家勸修寺の流れをくむ中御門宣胤<sup>ひなみき</sup>の日記『宣胤卿記』を中心に、浄蓮華院の退転の状況について述べる。

応仁の乱以来、浄蓮華院は「乱来無寺、只竹木許也、石塔譏殘、寺僧在京」<sup>(4)</sup>と無住寺に等

しい荒れようであった。こうした状況のもとで、文亀元(1501)年には「寺辺田畠混乱」と所領の混乱がはじまる。浄蓮華院でしばしば先祖の法要を営んでいた宣胤は、浄蓮華院の住持と、吉田社の神官吉田兼俱のあいだを取り持つことになった。<sup>(5)</sup>しかし、兼俱は浄蓮華院からの再三の抗議も意に介さず、<sup>(6)</sup>ついには「浄蓮華院寺辺田畠、兼俱卿違乱間事、(中略)近日悉押之云々」<sup>(7)</sup>と完全に押領してしまった。事態はそのまま吉田社に有利に展開し、幕府に持ちこまれた訴訟も吉田社の勝訴に終わった。<sup>(8)</sup>これに対して宣胤は一門の署名を集め、再度幕府に訴えているが、<sup>(9)</sup>そのかいもなく、永正14(1517)年には「寺跡彌荒廢、一家中墓悉取散、本願御墓只一残、不思議也」<sup>(10)</sup>と吉田経房の墓が一基だけ残っているのを不思議がるほどの荒れようとなった。周囲の状況も同じ条の記述によれば、寺領が耕地と化し墓地への通路すらなくなっていた。<sup>(11)</sup>そのため墓から少し離れた所での法要を余儀なくされた宣胤は、吉田の郷民の所業におおいに憤慨するのであった。しかし、宣胤は浄蓮華院領の押領に対しては抵抗したものの、積極的に浄蓮華院を再興しようとする意志は見られず、ついに浄蓮華院は退転し、天文2(1533)年には正式に吉田社領となったようである。

この浄蓮華院の位置については、『山城名勝志』に「吉田村北口三町許西也、今田字號浄蓮華院」<sup>(12)</sup>とあり、京都大学教養部構内西半から医学部構内に比定できる。『京都坊目誌』には、「字腰前。字窪の南に當る。」<sup>(13)</sup>とあり、ほぼ同じ場所に比定できる。この比定地付近で実施した発掘調査には、AO18区の調査<sup>(14)</sup>(図版1-41)、AP19区の調査<sup>(15)</sup>(図版1-74)、AO21区の調査<sup>(16)</sup>(図版1-91)がある。これらの調査区に共通して言えることは、14世紀の中葉から後葉を境に遺構や遺物の出土量が減少することである。吉田定房が吉野に移った1337年以降、浄蓮華院の勢力が衰えたためと考えられる。また、室町後期以降に耕地化することも指摘されているが、こうした状況は浄蓮華院が吉田社領に組みこまれ、耕地化していった状況とよく対応する。

### 3 吉田構

応仁・文明の大乱で再三にわたり甚大な被害を受けた洛中・洛外の人々は、みずからの集落を戦火から守るため、集落の周囲を柵、堀、土塁などで囲み、出入口には木戸門を設けた。こうした防禦施設は構(かまえ)とよばれていたが、この構は洛中・洛外を問わず構築され、<sup>(17)</sup>戦乱の有無にかかわらず維持されていた。上賀茂社の氏人が上賀茂社の門前に構築した構や、京都大学北部構内の北西約100mの所にある田中神社を中心とした田中構、真宗門徒が仏国を夢みて「構のほり」をめぐらした山科本願寺寺内町などがその好例である。みずからの住空間をすべて囲いこむという点で、城郭や寺社の防禦施設とは違った意

味を持っていた。上賀茂の構は、氏人が申し合わせをおこない、堀を構築する分担を決めたり、構の維持管理に関する置文を作成するなど、氏人が自衛のために結束して構築したものである。<sup>(18)</sup> 田中構も文明5(1473)年ごろに、田中の郷民が結束して構築したものである。<sup>(19)</sup> それに対して、吉田構は吉田家<sup>よしだのかまえ</sup>が主体となって構築したものらしく、維持管理も吉田家の指揮下でおこなわれている。以下、本節では吉田構の状況を、吉田社の神官吉田兼見の記した『兼見卿記』を中心に復原してみたい(表5)。なお、吉田構は『兼見卿記』の中では「在所之構」とよばれている。吉田構の名称は兼見の弟梵舜の日次記『舜旧記』によった。<sup>(20)</sup> 吉田構の中は大きくふたつに分かれ、「北之在所」と「南之在所」があった。天正12(1584)年5月15日の条に、斎場所の屋根を葺き替えるために藁を集めたという記述があるが、集まった藁束の数より、「北之在所」に約40戸、「南之在所」に約30戸の地下の家<sup>ちげ</sup>があったことがわかる。出入口も「北之構」<sup>(21)</sup>と「南之構」があった。「北之構」に付随して橋の記述があり、「南之構」に付随して堀の記述があるが、常識的に考えて南北両構の前面には堀があり、橋がかかっていたものと思われる。そして、南北両構には惣門または構とよばれる防禦用の門が構築されていた。

吉田構の周囲は堀で囲まれていたと考えられる。南には「南之外堀」があり、北には後述する「馬場之南之堀」があった。「西之堀」の記述はないが、「西之堀道」があることによって西の堀とそれに平行する道があったと考えられる。東側については「内山之堀」に関する記述が再三あり、堀があったと考えられるが、吉田構を吉田山から完全に切り離して防禦していたのか、山腹にある吉田社などを含めて防禦していたのかは不明である。このように堀と惣門で固めた吉田構の防禦能力は相応にあったことが、元亀4(1573)年に信長上洛の噂を聞いた近郷の人々が、あわてふためいて吉田構へ逃げこんできたことからわかる。こうした有事に備えて、構の堀の維持管理は間断なくおこなわれていた。織豊政権が成立する前後の不安定な世相を反映していると考えられる。

こうした吉田の景観を具体的に示してくれるものに洛中洛外図がある。『兼見卿記』の記事より50年ばかりさかのぼるが、大永5(1525)年以降に描かれたと考えられている町田家本洛中洛外図屏風の右隻を見ると、のぞき窓らしきもののある築地塀と、木戸門で囲まれた吉田構の様子<sup>(図36)</sup>がわかる。西向きの木戸門は、南北いずれの構にあたるかは不明であるが、洛中に向けて開かれている点では、後述する近世の吉田村の惣門と同じである。構の中に藁葺きの家が5棟ばかり描かれている。家の前で箆をひろげ農作物を干していることから農家と考えられる。社家の邸宅や、構の堀などは描かれていない。

吉田構のすぐ北側で、吉田社にむかってのびる2条の松並木のある所が、「春日之馬場」である。この馬場の松並木には大木が多かったため、神木であるにもかかわらず、所望する権力者があとを断たなかった。『兼見卿記』に断りあぐねる吉田社の様子がよみとれる。この馬場の位置は近世になっても変わらないが、「北馬場」「南馬場」の2本となり、松並木は3条になった(図39)。この馬場の南に土塁をはさみ幅1間の堀がある。『兼見卿記』の「馬場之南之堀」がこれにあたと考えられる。現在この2本の馬場がそのまま吉田社の参道となったため、参道の中央に1列の松並木が残る結果となった。

次に吉田の構の中で大きな景観構成要素となっていたであろう吉田家の邸宅について、ふれておく。『兼見卿記』には兼見邸に関する記述は多いが、逐一列記することは省略し、その大要を伝えたい。まず、兼見邸の母屋は瓦葺きの二階建てで、面(表)の座敷、裏の座敷、奥座敷、茶湯座敷、小座敷のほか、青女不断の座敷(兼見夫人の居間)、台所などのある豪邸であった。屋敷内には他に馬屋、二階土蔵、客殿、別屋などがあった。東と北には庭があり、北の庭には山中路より運び出した白川石が据えられていた。兼見邸の周囲には築地と堀がめぐり、特に西側の堀は二重であった。兼見邸のこうした様子から、ほかの社家も相応に立派なものであったと推定できる。近世の社家町の景観は中世末には完成されていたものと思われる。

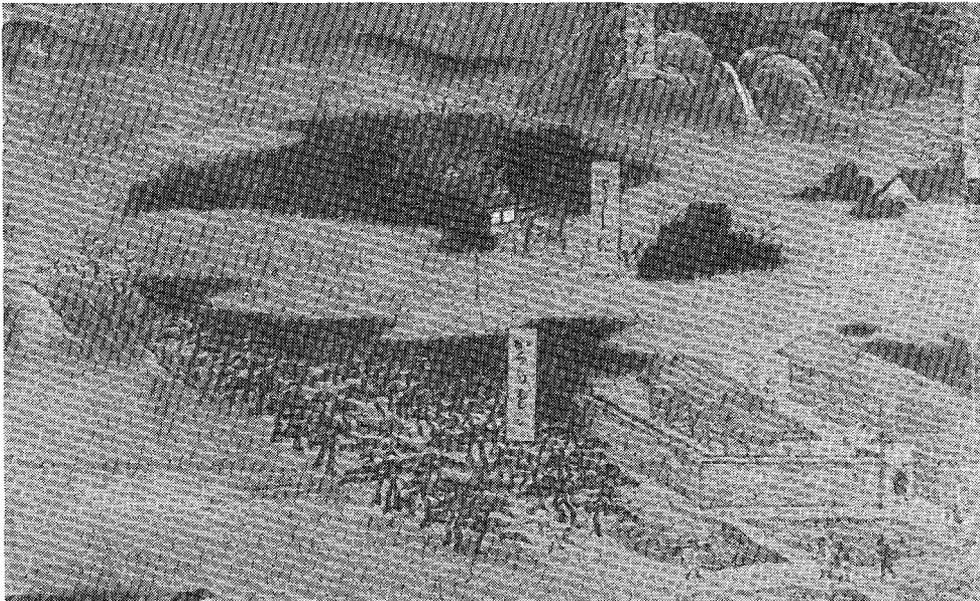


図36 町田家本洛中洛外絵図(東京国立博物館蔵)

表5 『兼見卿記』にみる吉田構の主要関連記事

記 載 日	記 載 事 項
1572 元亀 3. 閏 1. 9	在所北之構普請，橋以下申付了
〃 〃 3. 22	(信長が)社頭馬場之木一本御所望之旨仰云々(中略)不及是非，馬場之内切大木了
1573 元亀 4. 3. 17	在所之構門以下，申付普請了
〃 〃 3. 29	(信長上洛)近郷男女逃入 当郷無正鉢，堅申付，打兩門令堅(警?)固了，(中略)兩人(柴田勝家ほか)来，兩門堅令番了
〃 〃 6. 8	自武家御所(足利義昭)当社馬場之松木五本御所望之旨兩使也，御理每度不相届，不及是非，畏之由申入了
1575 天正 3. 2. 15	(信長より)為十郷山中路可造之由村民申付也，(中略)不及是非，六百間之分請取之
1578 天正 6. 7. 5	南之在所火事，廿間計焼亡
〃 〃 10. 2	山中路普請遣人足，後刻罷出見舞
1579 天正 7. 2. 8	在所之北藪へ之通路無正鉢，端之事人々之分申付也
1580 天正 8. 閏 3. 6	(村井貞勝)松木一本所望，召連杣来，馬場之木，南方西之第一之木採之
〃 〃 10. 22	内山=新堀之事申付，普請
〃 〃 11. 18	(近衛前久)馬場之木一本御所望，畏之由申了
1581 天正 9. 2. 23	於當所春日馬場可令乘馬之由申来
〃 〃 4. 22	於當弓場而的所望也
〃 〃 9. 6	普請内山新堀也
1582 天正10. 3. 6	西面之土居牆已下普請出来畢(『兼見卿記別本』)
〃 〃 6. 12	在所之構，南之外堀普請，白川・浄土寺・聖護院三郷之人足合力也
〃 〃 6. 24	在所之構普請，堀也
〃 〃 7. 16	於當所南之在所施餓鬼之事案内申候
〃 〃 12. 15	普請，右馬助屋敷之東堀之南北七間，南之在所今小路留道堀切南衆普請，北衆右之堀也
1583 天正11. 閏 1. 24	西之堀道之筋垣ヲ仕了
〃 〃 4. 17	馬場之南之堀普請申付了
〃 〃 5. 27	三条之伊藤方ヨリ山中路普請之儀申来，御朱印諸式免許之由申理了
〃 〃 7. 22	(山中郷の)磯谷彦四郎来云，山中路道作之儀(中略)令対面申理了
〃 〃 10. 20	普請申付，与一屋敷通掘堀，去年新道通也
〃 〃 12. 27	南之構藪之内ノ堅木切之
1584 天正12. 5. 15	小麥之藪，地下家次四束宛出之，北之在家源三郎奉行=申付，百五十四束，南在家平左衛門尉奉行，百十八束観音堂=置之，斎場所御屋根之用也
〃 〃 5. 22	當郷惣門南=打高札
〃 〃 9. 3	普請，月齋之東掘之，惣別古堀之其内猶掘之

#### 4 近世の吉田村

近世の吉田の社家町は、基本的には吉田構の町割りを踏襲したものと考えられる。本節では吉田の社家町とその周囲の状況を明らかにし、吉田構を復原する上での手がかりとしたい。そのため、天理大学附属天理図書館吉田文庫所蔵の「吉田社家住宅配図」(図38)と「吉田社周辺絵図」(図39)を中心に、吉田の社家町の復原を試みた(図40)。

「吉田社家住宅配図」<sup>(23)</sup>は、社家町の中に住む人々の屋敷の配置をしるしたものである。この図の町割りを、都市計画図の上に復原してみると、そのまま現在まで踏襲されていることがわかる。社家町の出入口は、斎場所に向かう東向き「坂口」以外は、洛中洛外図で見たように西向きである。この西向きの出入口のうち、「中口門」が「北之構」に、「南口門」が「南之構」に対応するものと考えられる。なぜなら、「北口」周辺の町割りには社家町の南半と比べて多少混乱が見えるうえ、『兼見卿記』に「在所之北藪」などの記述があることから、もともと藪であった所をなしくずしに宅地化した可能性があり、「北口」は新しい出入口と考えられる。その上、「中口門」や「南口門」にはその名称に門がつくのに対し、「北口」にはつかず、正式な出入口ではない可能性が高いからである。「中口門」の具体的な姿は、「拾遺都名所図絵」天明7(1787)年刊に詳しい(図37)。それによる

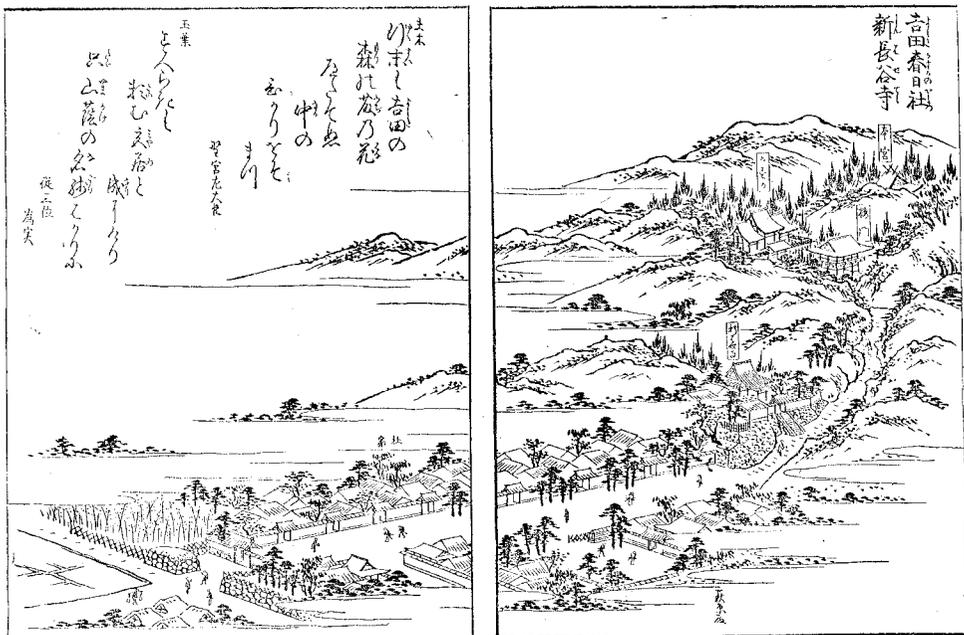


図37 吉田春日社、新長谷寺の図(『拾遺都名所図会』)

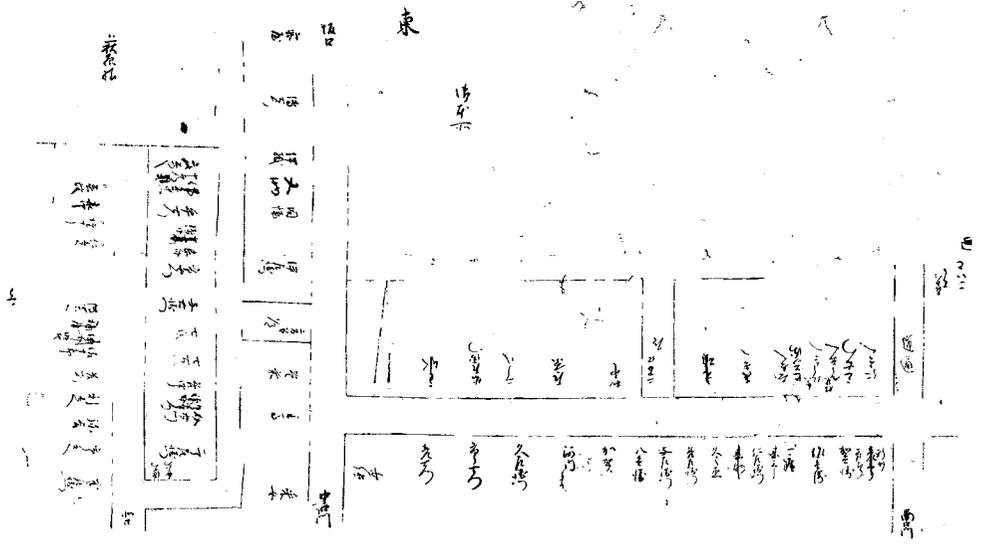


図38 吉田社家住宅配図 (天理大学附属天理図書館蔵)

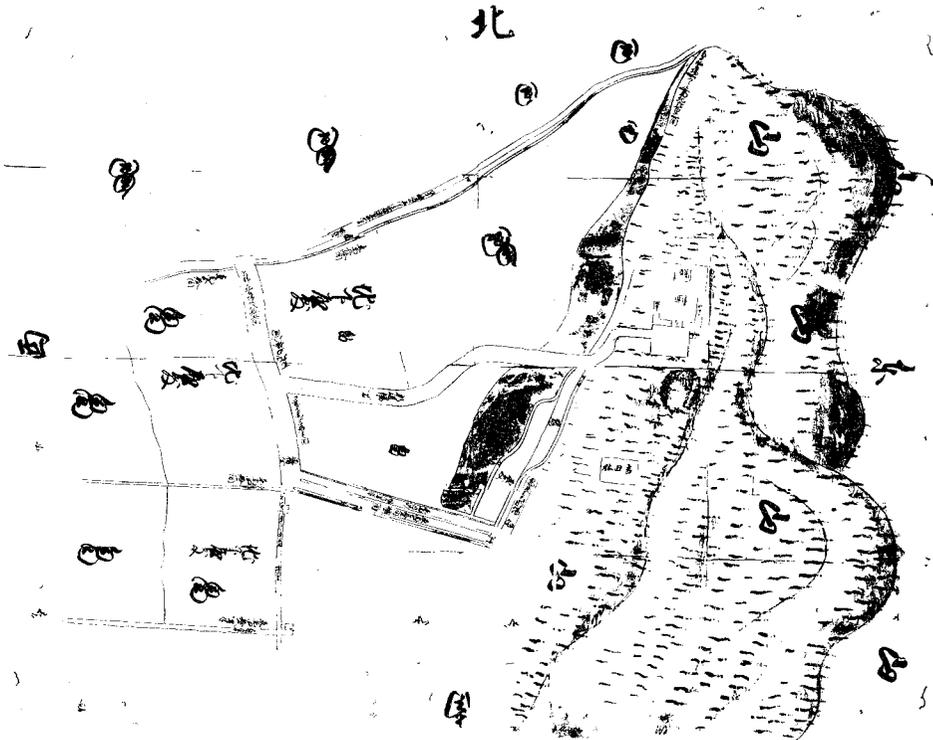


図39 吉田社周辺絵図 (天理大学附属天理図書館蔵)

と、「中口門」は社家町の西側の南北路より東によせて建てられ、門の前には石垣により柵形が構築されている。この柵形のため、「中口門」のあった四つ辻は、今も街路がくい違っている。「南口門」もその比定地で街路がくい違っており、石垣による柵形があったと思われる。

「吉田社家住宅配図」の中で、「采女」、「主馬」、「主水」、「左京」などの社家の名は、「中口門」から「坂口」へぬける東西路と、社家町の中を南北にぬける道の北半に集中する(図40の濃い斜線部分)。図37でも、東西路の南北両側に、立派な門構えの社家が整然と並んで描かれており、社家と地下の居住地域は明確に分離されていたと思われる。なお、この図で右下に「萩原殿」とあるのは「吉田殿」の誤りである。

「吉田社周辺絵図」は、吉田の社家町の北辺から、吉田社領と白川村の境界である白川道までを描いた図で、道路、堀、馬場などの幅や長さが書きこまれている。この図は、吉田社の北に宝永年間(1704~1711)から元文年間(1736~1741)のわずかな間だけ存在した東照宮<sup>(24)</sup>が描かれていることから、18世紀前半のものと思われる。この図には、白川道やそれにとりつく南北路、そして東照宮にむかう新道が詳細に描かれている。白川道は「坂本海道」とかかれ、幅は2間とある。この白川道の南側に少し間をあけて水路が平行する。こうした状況は、AW28区の発掘調査<sup>(25)</sup>やAX28区の発掘調査<sup>(26)</sup>で得られた知見と一致する。特にAX28区では、白川道と水路との間で、土留めの杭や野壺を多数検出し、近世の白川道周辺の景観復原を可能にただけでなく、吉田の郷民がしばしば補修を命じられた、中世の白川道と推定される遺構を検出している。南北路は幅が8間で、白川道にとりつく所には石橋があった。この道の異常な広さは東照宮の新造にともなう拡幅のせいであろうか。AT27区<sup>(27)</sup>の発掘調査で近世の南北路を検出したが、幅は2.5mしかなく、図中の南北路との関係は不明である。東照宮に向かう幅6間の新道については、立合調査を含めいまだ確認していない。

## 5 小 結

以上、応仁の乱以降の吉田について、浄蓮華院と吉田構を中心に述べてきた。浄蓮華院については、応仁の乱による荒廃、所領の混乱、訴訟、敗訴、退転となった経緯を明らかにし、発掘調査で得た知見がよく一致することを指摘した。医学部構内北半から教養部の西北部にかけての地が、浄蓮華院の寺地や墓地であった可能性は高い。また、吉田構と吉田の社家町についてはその景観を復原し、中世後半から近世の吉田の集落の状況を明らかにした。なお、乱前の吉田については、所領の再編や、乱による資料の散逸のため不明な

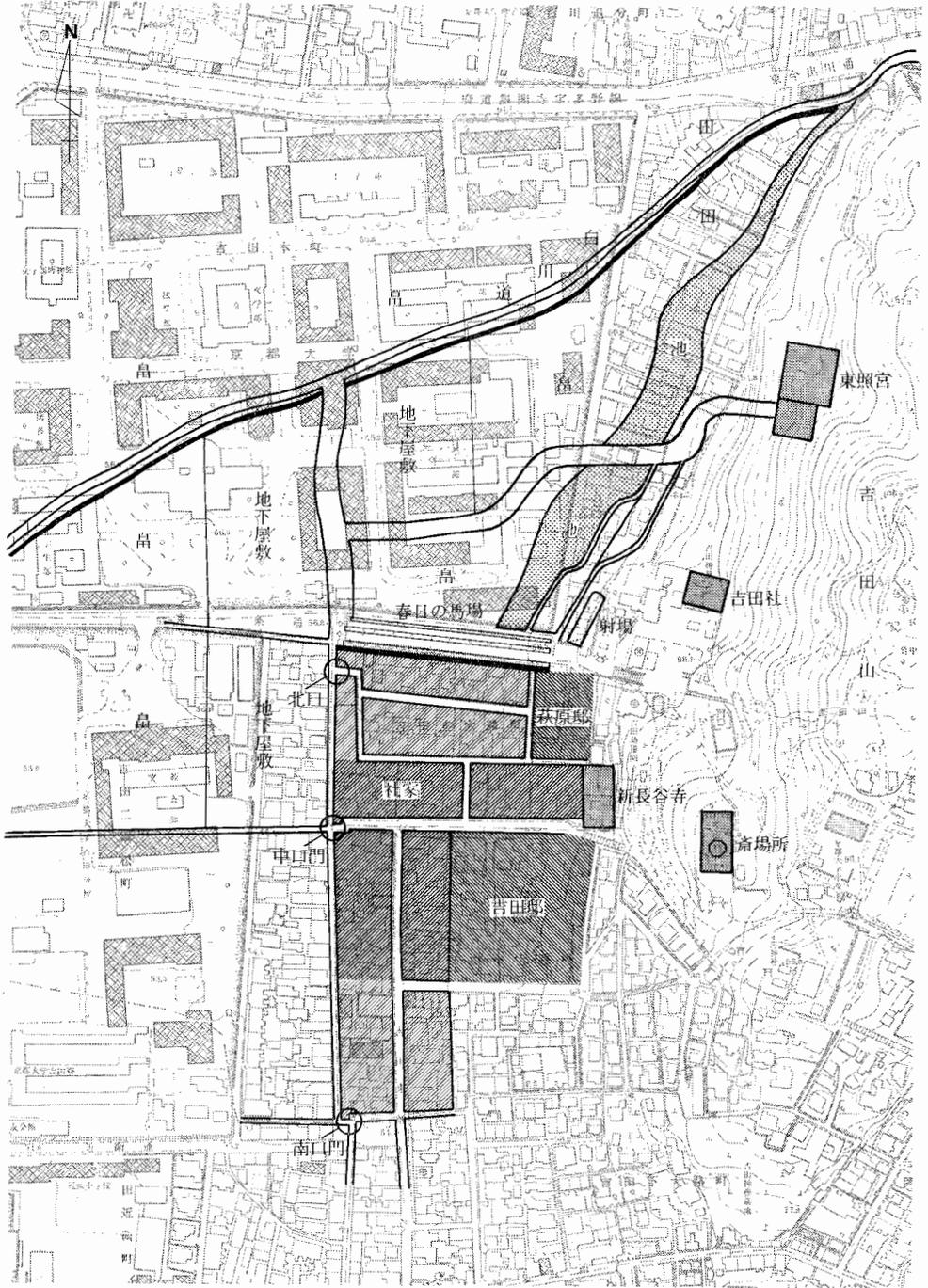


図40 吉田村の復原図 縮尺1/5,000

部分が多い。乱前に吉田の地にあった勸修寺家、福勝院、吉田社の旧社地については今後の課題としたい。

また、この小論をまとめるにあたり、資料の閲覧と掲載を許可していただいた天理大学附属天理図書館に、文末をかりて謝意を表します。

〔注〕

- 1 文正2年1月18日、上御霊神社の森でくりひろげられた応仁の乱の前哨戦。この年の3月に改元があり、応仁となる。
- 2 古代末から吉田村とよばれていたが、室町時代後期には吉田郷とよばれた。
- 3 中村直勝「勸修寺家領に就いて」『紀元二千六百年記念史学論文集』, 1941年 pp.21-160
- 4 『宣胤卿記』永正元(1504)年閏3月11日の条
- 5 『宣胤卿記』文亀元(1501)年10月10日の条 「先之浄蓮華院住持来, 接同席, 寺辺田畠混乱, 吉田社領事, 余口入, 兼俱卿間事也」
- 6 『宣胤卿記』文亀2(1502)年3月6日の条 「兼俱卿押妨間事, 此事旧冬度々申遣事也」
- 7 『宣胤卿記』文亀元(1501)年11月24日の条
- 8 横山晴夫「室町期の吉田社領について」『国学院雑誌』第62巻第9号, 1961年 p.133
- 9 『宣胤卿記』永正5(1508)閏年9月15日の条
- 10 『宣胤卿記』永正14(1517)年7月12日の条
- 11 『宣胤卿記』永正14(1517)年7月12日の条 「作田之間無通路式也, 於近辺称名念仏廻向了, 此田事吉田郷民所行與, 以外事也」
- 12 『山城名勝志』 卷13
- 13 『京都坊目誌』 上巻 廿七学区
- 14 泉拓良・吉野治雄「京都大学医学部遺跡 A O 18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』, 1979年 pp.7-16
- 15 清水芳裕・吉野治雄「京都大学医学部構内 A P 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』, 1981年 pp.13-20
- 16 第I部第3章
- 17 高橋康夫は上京だけでも武衛構, 実相院構, 白雲構, 田中構, 柳原構, 讃州構, 御所東構, 山名構, 伏見殿構, 北小路構, 御霊構のあったことを指摘している。「応仁の乱と京の都市空間」『歴史公論』No.72, 1981年 p.100
- 18 谷直樹「上賀茂の歴史」『上賀茂』京都市都市計画局編, 1978年 pp.1-14
- 19 『親長卿記』文明6(1474)年8月1日の条 「田中之郷輩, 先年炎上之後構, 五霊日群集, 人々近日號田中構」
- 20 『舜旧記』元和2(1616)年3月8日の条 「今日吉田構之堀, 新度畠ヲ堀普請也」
- 21 構は防禦している範囲全体を意味する場合と, 出入口の構築物だけを意味する場合がある。
- 22 吉田構の名称は近世にはいと消滅する。本稿ではこれと区別して近世の吉田の集落を社家町とよぶ。なお, 社家については京都市町名変遷史研究所の松本利治氏の御教示を得た。
- 23 江戸時代初期の写しと伝えられている。
- 24 「神樂岡東照宮之事」『神業類要 上巻』
- 25 岡田保良・吉野治雄「京都大学本部構内 A W 28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』, 1980年 pp.21-30
- 26 第I部第2章
- 27 五十川伸矢「京都大学本部構内 A T 27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』1981年 pp.21-34

## 第2章 山城の弥生後期の土器

—京都市左京区岡崎南御所採集の土器について—

飛野 博文

### 1 はじめに

昭和18年、奈良県田原本町唐古遺跡の発掘調査報告<sup>(1)</sup>によって畿内弥生土器編年の大要が確立されて以来、その細分化の試みは絶えず、近年は地域性をも重視する精緻な研究も活発におこなわれている。その中で、後期第V様式から古墳時代前期にかけての土器研究は、古墳から出土する土器が数少なかったことなどの理由から、前・中期のそれに比して遅れていた。しかし、従来の古墳時代研究の主対象であった大規模な古墳とは異なる、規模・

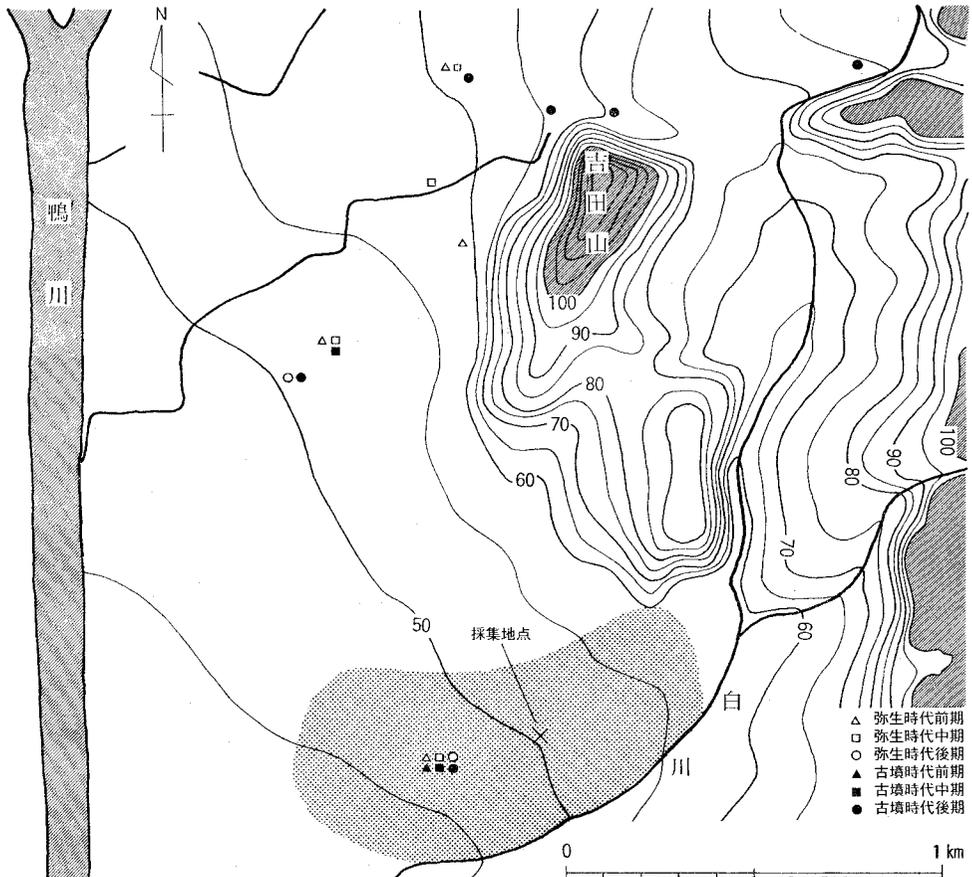


図41 岡崎遺跡とその周辺（明治25年仮製2万分1地形図から作成）

副葬品ともに貧弱な「墳丘墓」<sup>(2)</sup>が認識され、かつ、それらの多くが土器をともなうことは当該期の研究に新たな視点を加えることとなった。「土器」と「古墳」という異質な歴史的概念で区分された、「弥生」・「古墳」時代を土器を用いて同じ俎上にのせることが可能となったからである。ここに至り、弥生後期土器の研究は、単に土器論にとどまらず、古墳の発生という重要な命題に迫る有力な一方法となった。

田中琢が「庄内式土器」<sup>(3)</sup>を提唱し、都出比呂志が中・南河内地域の弥生後期～古墳前期にかけての編年案を発表してのち、華々しく展開されてきた第Ⅴ様式の細分編年案の中にあつて、山城地方、ことに都心と化した京都市域は資料的制約があつてほとんど除かれていた。しかし、近年、山科区中臣遺跡<sup>(5)</sup>、北区植物園北遺跡<sup>(6)</sup>や左京区岡崎遺跡などの調査によって資料が蓄積されつつある。

本稿では、昭和40年に梶谷昭氏が採集した遺物<sup>(7)</sup>を紹介し、山城地方の当該期の土器研究に一助を供しようとするものである。

## 2 遺跡の概要

ここに紹介する土器は、京都市立動物園の北西交差点を少し東に入った、標高50m余りの地点で工事中に採集された。そこは岡崎遺跡の一角で、当時の覚え書きによると、現地表下約1.3mほどの「白川砂」(京都大学構内でいう黄砂)上面で出土したという(図41)。

岡崎遺跡発見の端緒は、昭和34年の尊勝寺跡の発掘調査に際して、大型蛤刃石斧と6世紀代の須恵器杯蓋の出土をみたことにはじまる<sup>(8)</sup>。次に、45年の京都市立美術館敷地内での円勝寺発掘調査では、弥生後期から古墳前期にかけての大量の土器が出土した。また、56・57年の京都市埋蔵文化財研究所による調査では、弥生中期の方形周溝墓や、後期から古墳時代にかけての数多くの土器や木製品を検出し<sup>(9)</sup>、相当な規模の遺跡であろうことが推測されるに至っている。

## 3 遺物 (図42・43)

採集された遺物は破損品のみで、全形を知りうるものは甕形土器(以下、甕と略す。他器種についても同様に扱う。)1例のみである。また、図示したもの以外にも若干の土器片や、砥石を含む数点の石器がある。以下、口縁形態に着目して分類し、土器の説明をする。

壺(1～8) 二重口縁をもつ壺A、C字形に緩く外反する口頸部をもつ短頸壺B、そしてパレススタイルの系譜を引く壺Cに分類できる。

壺A(1～3) 1は黄白色を呈する。口縁部上半外面には、いびつな円弧を接続した

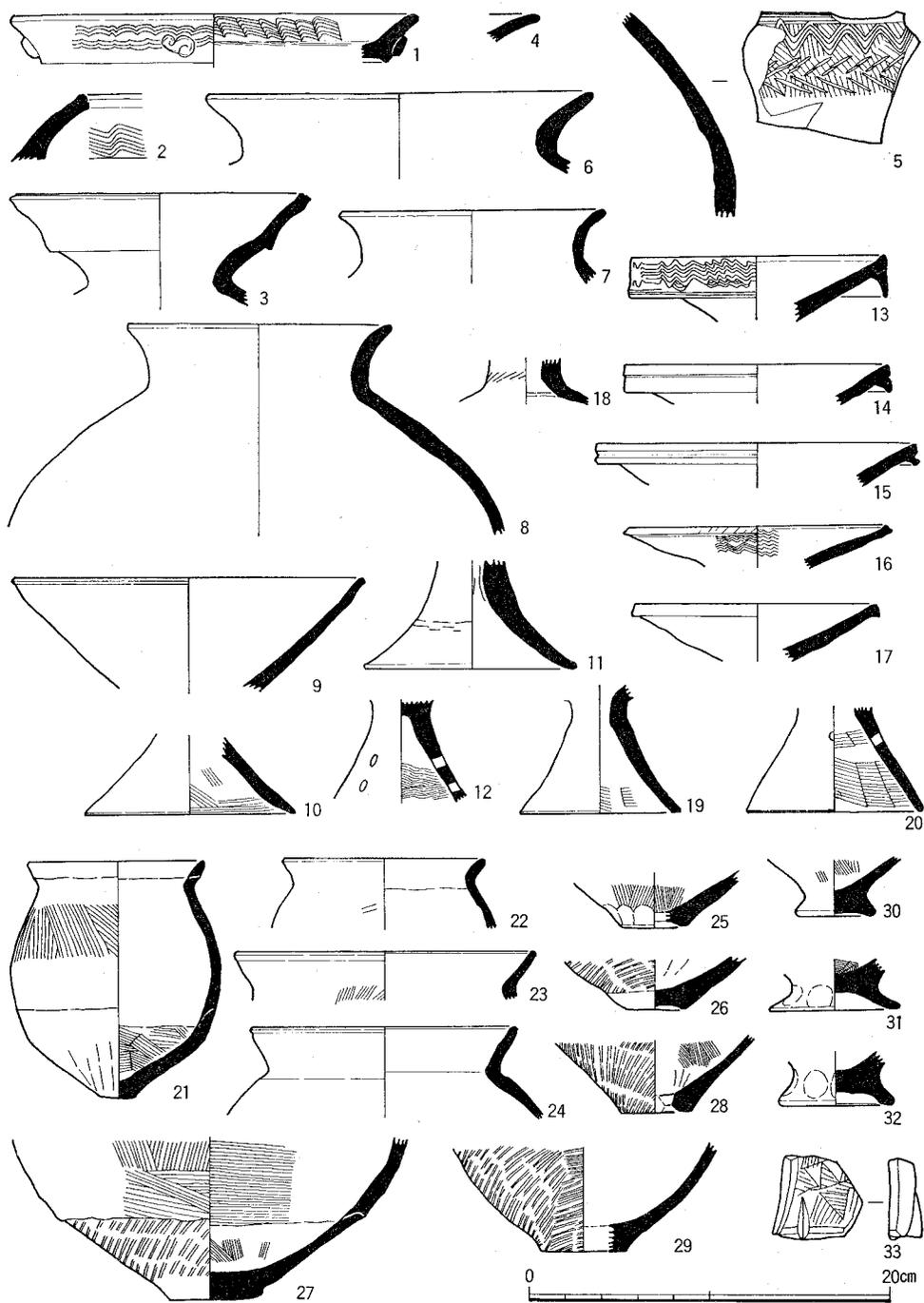


図42 岡崎南御所町採集の土器(1)

ような櫛描波状文を上下に相対するように施したのちに、個数不明のS字状浮文を配する。内面にも同様な櫛描波状文を単体構成で施す。屈曲部以下は外面を指撫で、内面を刷毛目で調整する。2は口縁部端面に1条の浅い沈線を有し、外面には正立させて右方向への櫛描波状文を施す。口縁部は小さく肥厚し、内面は横位篋磨き、外面は横撫でで仕上げる。3も2と同様に口縁部端面に1条の浅い沈線を有し、口縁部が緩くカーブを描く無文の壺である。調整は篋磨きを主に用いるが、胴部内面は刷毛目のようである。

壺B(6~8) いずれも器表の風化が著しく、6が口縁部内外面を横撫でするほかは調整痕を確認できない。黄白色~灰褐色を呈する。

壺C(4・5) 4・5は胎土・色調などからみて同一個体と思われる。胴部上半には櫛描直線文・波状文、および刷毛目原体によるとと思われる上下2段の刺突を羽状に施す。上段の刺突文が木目痕を明瞭に残すうえに、二度の刺突を重複しておこなうのに対して、下段では上端の一部に木目痕を残すものの、それ以下は篋状工具を用いて押し引きしたかのような滑らかな沈線状をなし、刺突方法の異なっている点が注意される。文様帯は縦優位の粗い刷毛目、それ以下は刷毛目調整ののちに入念な篋磨きをおこない、赤色顔料の塗布された痕跡も認められる。内面は黒色を呈し、部分的に横撫でをおこなうほかは、外面と異なる原体を用いて縦位刷毛目を全面に施す。また、口縁部も内外面を丁寧な篋磨きで調整し、赤色塗彩をおこなう。

ここで、1の壺に用いられたS字状浮文について触れておく。S字状文は銅鐸によく使用される意匠であり、土器に施される例は多くない<sup>(11)</sup>。さらに、同一意匠の浮文となると、大阪府高槻市安満遺跡9地区土壙<sup>(12)</sup>、兵庫県西宮市越水山遺跡採集資料<sup>(13)</sup>、石川県松任市竹松遺跡採集資料<sup>(14)</sup>などが知見にのぼるのみである。安満遺跡例は、壺の垂下した口縁部外面に櫛描波状文を施したのちに、本例と同様な浮文を4個付す。共伴した土器は壺・甕各1点ずつで、口縁部叩き出し技法や胴部の張り具合などからみて後期後半のものである。越水山遺跡例も二重口縁壺で、口縁部外面に櫛描波状文とS字状浮文を付す。採集された土器の総数は少ないが大半は後期後半の特徴をみせる。竹松遺跡例は異形の器台で、受部下端の拡張部外面に逆S字状浮文と棒状浮文を交互に3個ずつ付す。この種の異形土器の在り方からみて、庄内式並行に位置付けることは妥当であろう。また、類似資料として大阪府茨木市東奈良遺跡採集資料中に、渦巻状浮文をもつ二重口縁壺が存する<sup>(15)</sup>。極めて数少ない例であり、断定することはできないが、S字状浮文という装飾意匠が弥生後期後半から庄内式のところに用いられた可能性は指摘できよう。

**高杯(9~12)** 9は杯部が直線的に大きく開く、庄内式以降に主流となる形式である。口縁端部は外傾する面を形成し端面直下は強く撫でられてあまい稜をもつ。杯部下端(残存部下端)は明瞭な剝離面をとどめる。調整は内外面とも篋磨きをおこなうが、粗雑である。10は胎土・色調からみて9の脚部と思われる。直線的に大きく開く脚部で、尖り気味の端部に特徴を示す。明黄褐色を呈し、黒斑をもつ。外面は風化著しく調整痕を確認できないが、内面には非常に繊細な刷毛目が観察できる。11は中空の脚部片で透孔はない。脚部外面に篋状工具の圧痕が1~3段に連なって残存部のほぼ全周をめぐる。それ以下は無調整のようであり、圧痕は脚部上半を縦方向に篋状工具で撫でた際に生じたものであろう。しかし、器面の平滑化は十分に成し遂げられていない。内面は篋削りのようで、絞り目も観察できる。12は2段3方向に透孔を穿つ、赤褐色ないし黄褐色の土器で、外面は穿孔後に縦位の丁寧な篋磨きで仕上げ、内面は横位刷毛目調整する。

**器台(13~20)** 器台の破片は他器種に比して多い。それらは弥生中期以来の筒形胴部をもつものではなく、口縁部に加飾し、細く締まったくびれ部から直線的に小さく開く脚部へと続き、受部径が脚部径を凌駕するなどの点に特徴がある。口縁部に文様帯を付加する器台Aとそうでない器台Bとに分類する。

**器台A(13~15)** 13は口縁端部を上方へ小さくつまみ上げ、下端に粘土紐を付加して文様帯を形成する。そこに不規則な楕描波状文と、同じ原体の一部を用いたとみられる直線文を施す。内面は横撫でののちに放射状の細かい篋磨き、外面も同じく篋磨きで調整する。全体に灰白色を呈するが内面はやや赤味を帯びる。14は文様帯接合部に1条の沈線帯を施して、文様とする。15は文様帯が剥落したようで、端面は無調整である。いずれも内面を放射状の篋磨き、外面を縦位篋磨きで仕上げ、明赤褐色ないし明黄褐色を呈する。

**器台B(16・17)** 16の内面は篋磨きで調整するものの、径2~3mmの砂粒が沈みきらず粗雑であるのに対して、外面の篋磨きは細かく丁寧に仕上げている。しかし、内面上

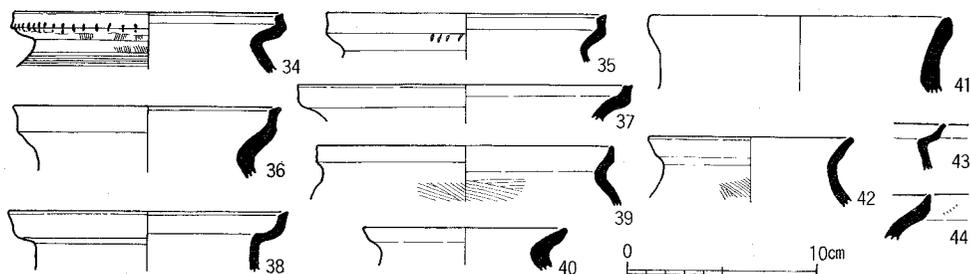


図43 岡崎南御所町採集の土器(2)

半に黒色の付着物があり、内外面の櫛描波状文のうち、内面は残存部全面に施文する一方、外面は上半のみにとどまり、さらに口縁部端面に繊細な刻み目が存在するなどの理由から受部と判断した。波状文は非常に繊細で浅く、斜光線を通して漸く確認しうる程度のものである。外面は2段で構成されるが内面は不明である。器形の特徴としては、他の例に比して受部が浅く、口縁部が上下に小さくつまみ出される点などが挙げられる。赤褐色を呈する。17は口縁端部を小さく垂下させる。外面は刷毛目ののち篋磨き、内面も篋磨きで調整し、赤褐色を呈する。

18はくびれ部の小片である。外面は縦位篋磨きののちに篋状工具による刺突をおこない、それに対応する内面に粘土紐の接合部を示すと思われる段がある。19・20は中空の脚部片である。19は脚端部が水平面をなし、透孔はない。外面くびれ部以下は縦位の、脚端部付近は横位の篋磨きで調整し、くびれ部には受部へと続く刷毛目が残る。脚部内面下半は刷毛目、上半は撫で、受部内面は篋磨きでそれぞれ仕上げる。20は透孔を有するが個数は不明。外面は脚端部まで縦位篋磨き、内面は逆時計回りの刷毛目を施す。

甕(21~27・29・34~44) 「く」の字形に小さく外折する口縁をもつ甕A、布留式に属する甕B、そして近江地方に顕著な受口状口縁をもつ甕Cに分類する。

甕A(21・22) 21は最終調整が粗雑で、口縁部中程と胴部下半に明瞭な接合部をとどめ、後者を境にして調整技法が異なる。外面は底部付近を縦位篋削り、接合部直下を横撫で、直上は不明だが肩部は刷毛目で仕上げ、内面では以下を刷毛目、以上を横撫で調整する。22は胴部以下を欠損する。頸部内面に接合痕を残し、口縁部叩き出し技法は用いられていない。肩部にはかすかに叩き目が観察できる。

甕B(23・24) 23の口縁端部内面は磨滅しているが肥厚の痕跡をとどめ、外面は緩やかな曲線を描く。肩部の張り具合から推して、布留式の中でもより後出的なものであろう。24の口縁端部は肥厚せずに内傾する面をもつ。また、端面は横撫でして外上方へつまみ出す。頸部には布留式を特徴づける横撫で調整を施し、胴部内面は篋削りする。

甕C(34~44) 受口状口縁をもつもので、甕・鉢のいずれとも決め難いのでここにまとめる。口縁端部に面をもつものをC1、端面をもたないが頸に比較的鋭い稜を有するものをC2、稜も痕跡的で、ただ口縁部外面が緩くS字状に彎曲するものをC3と細分する。

甕C1(34~38) 34・35は甕Cのうち最もシャープなつくりをしている。34は口縁部下端に鋭い稜をもち、その直上から斜め下に針状の工具による刺突をおこなう。頸部直下にも鋭い櫛描直線文を施し、同一個体の他の胴部片によれば、直線文の直下にさらに櫛描

列点文を一段配する。調整は頸部以下、外面を縦位刷毛目、内面は粗い横撫でで仕上げる。35も口縁部下方に鋭い稜をもち、その直下に刷毛目原体によると思われる刺突文を飾る。内外面とも横撫で調整である。この二者はいずれも明赤褐色を呈する。36の頸部内外面に施された篋磨きは幅広く細部の整形もあまい。37・38の造作も雑で、この二者は先の二者に比して稚拙な感をまぬがれない。

甕C 2 (39・43) 口縁部外面を強く横撫でして凹ませ、稜を形成するもので、39は胴部内外面とも横位刷毛目で調整するが、43は小片で調整痕などは不明である。

甕C 3 (40～42・44) 形態からみて受口状口縁土器の末期的なものといえる。調整はいずれも粗雑な横撫でを主とし、44は口縁部外面に櫛描列点文が1単位のみ遺存している。

底部の破片が4点ある。これも甕か鉢か不明なものもあるが、ここにまとめて示す。25は小さな輪台を有し、外面はやや粗い刷毛目と指押えで、内面は微細な刷毛目で調整する。26は4条/cmの叩き目が胴部下端まで及ばず、叩き成形に遅れて底部が完成したことがうかがえる。内面は胴部を篋削り、底部を指押えで調整する。27は球形に近い胴部をもち、接合痕を明瞭にとどめる。外側に盛上る接合部を境にして、外面では下方を3条/cmのやや粗い叩き目、上方を横位刷毛目で仕上げ、内面では上下双方とも同じ原体を用いて方向を異にする刷毛目を施す。叩き目は26と同様に下端まで及ばず、歪んだ底部の側面は横撫でである。29も球形に近い胴部をもち、溝幅の不規則な原体を用いて比較的シャープな叩き目を胴部下端まで刻む。

鉢(28・30～32) 有孔鉢Aと小さな脚台をもつ鉢Bとに分類する。

鉢A(28) 焼成前に底部を内外両側から穿孔する。外面は胴部下端まで4条/cmの叩き目を施す。内面底部にはやや幅広の沈線状の圧痕が残り、クモの巣状刷毛目と同様な手法を用いて調整したことがわかる。その上方は細密な刷毛目を施す。

鉢B(30～32) いずれも脚部の破片で全容は知りえない。脚部の形態・大きさはそれぞれやや異にするが、外面調整はいずれも指押えでいびつに仕上がっている。32の底部内面にはクモの巣状刷毛目が残る。

手焙形土器(33) おおい部前面下端の小片である。前面は粘土紐を貼りつけて、断面三角形に近い形に成形する。外面は刷毛目調整ののちに篋磨きの鋸歯文を階段状に配置するが、構成はかなり乱れる。内面は残存部下端付近が刷毛目によるほかは撫で調整のようである。

#### 4 おわりに

以上が岡崎南御所町で採集された土器の概要である。甕Bが布留式であるほかは、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての、小数ながらも比較的にまとまった資料であると思われる。この中で注意されるのは、甕Cの比率の高さと、器台の形態が同時期の畿内の多くの例と異なる点である。

受口状口縁土器は、早く第Ⅱ様式に萌芽をみせる近江地方に伝統的な形式である。その特徴は、名称の由来となった小さな二重口縁にあり、多くは口縁部や胴部に櫛描列点文・波状文などを施す。

近江地方と共通する技法・形態をみせる土器は、中期以来山城地方には顕著であるが、無文化を志向する後期の土器の中にあっては、その形態や装飾のために一層極立つ。当該期の受口状口縁土器の分布範囲を西日本の中で拾ってみると、遠く北部九州で出土した1<sup>(16)</sup>点は特異な例であり、通常は大阪平野ですら稀なものである。摂津地方では、後期中葉とされる安満遺跡9地区A5-2土器群中において25%前後を占めるようになり、さらに京都府長岡京市今里遺跡の後期後葉ごろの土壙・住居跡の一括資料では約50%前後にもものぼる<sup>(18)</sup>。しかし、今里遺跡から直線距離にして約3kmという卑近な地にある向日市中海道遺跡ではわずかに5.7%を占有するだけだという<sup>(19)</sup>。一方、当該期の膨大な量の遺物を出土した奈良県桜井市纏向遺跡では、報告者のいう「纏向1～3式」の時期に1%足らずを占めるのみである<sup>(20)</sup>。資料数や統計処理方法などに差異があるとしても、山城地方が他地域に比して近江系土器の割合が高いであろうことは予想される。ここで問題になるのは今里・中海道両遺跡における占有率の大きな開きである。それが時期差の問題か、あるいは遺跡・遺構の性格に起因するものであるかは、今後の乙訓地方での調査・研究、そして京都市域での同時期の遺跡との比較・検討を経て漸く議論の対象となる問題だが、若干の見通しを後述する。

畿内における器台の出現は、中期第Ⅳ様式とされている。それは凹線文で飾る手法の盛行期であり、したがって器台も例に漏れず、口縁部とともに円筒形の胴部にも凹線文などで加飾する。しかし、第Ⅴ様式になると装飾は衰退し、無文で円孔を穿つものが大勢を占めて小型化してゆく。さらに庄内式に至って、皿形の受部、器高中位よりやや上方にあるくびれ部は中空あるいは中実で、脚部は直線的または内彎気味に大きく開いて、径10cm前後の受部を凌駕する形へと定形化し、続く布留式の小型器台のさきがけとなる。

以上が畿内における器台の大まかな変遷である。ここに紹介した資料の皿形に近い受部、

細く締まったくびれ部から大きく延びる脚部など、庄内式の器台に共通する点もあるが、口径が20cm前後を測り、脚部径を凌駕することや、加飾する点などは古相を示すものの、上述した変遷観にそのまま当てはめることはできない。そこで、いくつかの類似資料を列記すると、まず淀川水系では安満遺跡、中海道遺跡、京都市左京区同志社大学岩倉校地忠在地遺跡<sup>(21)</sup>、同下京区烏丸綾小路遺跡<sup>(22)</sup>などがあり、いずれも口径は20cm前後で、口端面を形成したり、加飾したり相似た形状をみせる。近江地方では、滋賀県大津市北大津遺跡<sup>(23)</sup>、同椋木原遺跡<sup>(24)</sup>、高島郡安曇川町南市東遺跡<sup>(25)</sup>などのほかに、『弥生式土器集成 本編2』<sup>(26)</sup>にも2例が掲げられている。さらに伊勢湾沿岸地方ではより濃密に分布している。他方、大阪府東大阪市瓜生堂遺跡<sup>(28)</sup>、東奈良遺跡、奈良県纏向遺跡など、当該期の遺物を大量に出土した河内・大和などの主要遺跡では、この種の器台はほとんど出土していないようである。そうすると、この器台は畿内では傍流に位置付けられ、分布からみて伊勢湾沿岸地方を中心に成立した形式の強い影響下で製作されたものといえる。その初現は、大参養一の研究によると、後期前半の山中期<sup>(29)</sup>に遡る。

鴨東の弥生時代は、京都大学北部構内付近で開始されるようだが、<sup>(30)</sup>教養部構内AQ23区で出土した条痕文系土器<sup>(31)</sup>が示すように、すでに、その当初から近江・伊勢湾地方との交流がもたれていた。北部構内BE29区の方形周溝墓などから出土した土器<sup>(32)</sup>の諸特徴——壺の口縁部内面の瘤状突起・垂下文や半截竹管を用いた櫛描文描出法、甕の口縁部内面に波状文を施す手法など——は、中期における近江・伊勢湾地方などと広く共通する手法であり、いわゆる畿内の土器とはいささか様相を異にする。そうした、鴨東の弥生前・中期の土器の在り方からすれば、佐原真のいう東海型の櫛描文施文法<sup>(33)</sup>による壺Aの2、伊勢湾沿岸地方の形式に酷似する壺C・器台、近江系の甕Cなどからなる岡崎遺跡の弥生後期後半から庄内式に至る時期の土器組成も自然な現象といえる。

ここに紹介した土器群は、乙訓地方の今里・中海道両遺跡の土器群と比較するならば、中海道遺跡に顕著な、口縁部をつまみ気味に横撫でする甕が存在しないという点で、また、受口状口縁土器の比率の高さという点でより今里遺跡に近い。しかし、乙訓地方の両遺跡の土器組成の差が何によるものかが判明するまでは、岡崎遺跡との異同を即断することはできない。だが、これらの土器が廃棄・供献されてまもなく築造されはじめた前期古墳の分布を参考にして、多少の推論をたてることは許されよう。

乙訓地方では、中期模の有力な前方後円(方)墳が古墳時代前期以降、営々と築造され続けており、また、弥生時代の遺跡も標高40mの等高線を上限として、ほぼ全域に存在す

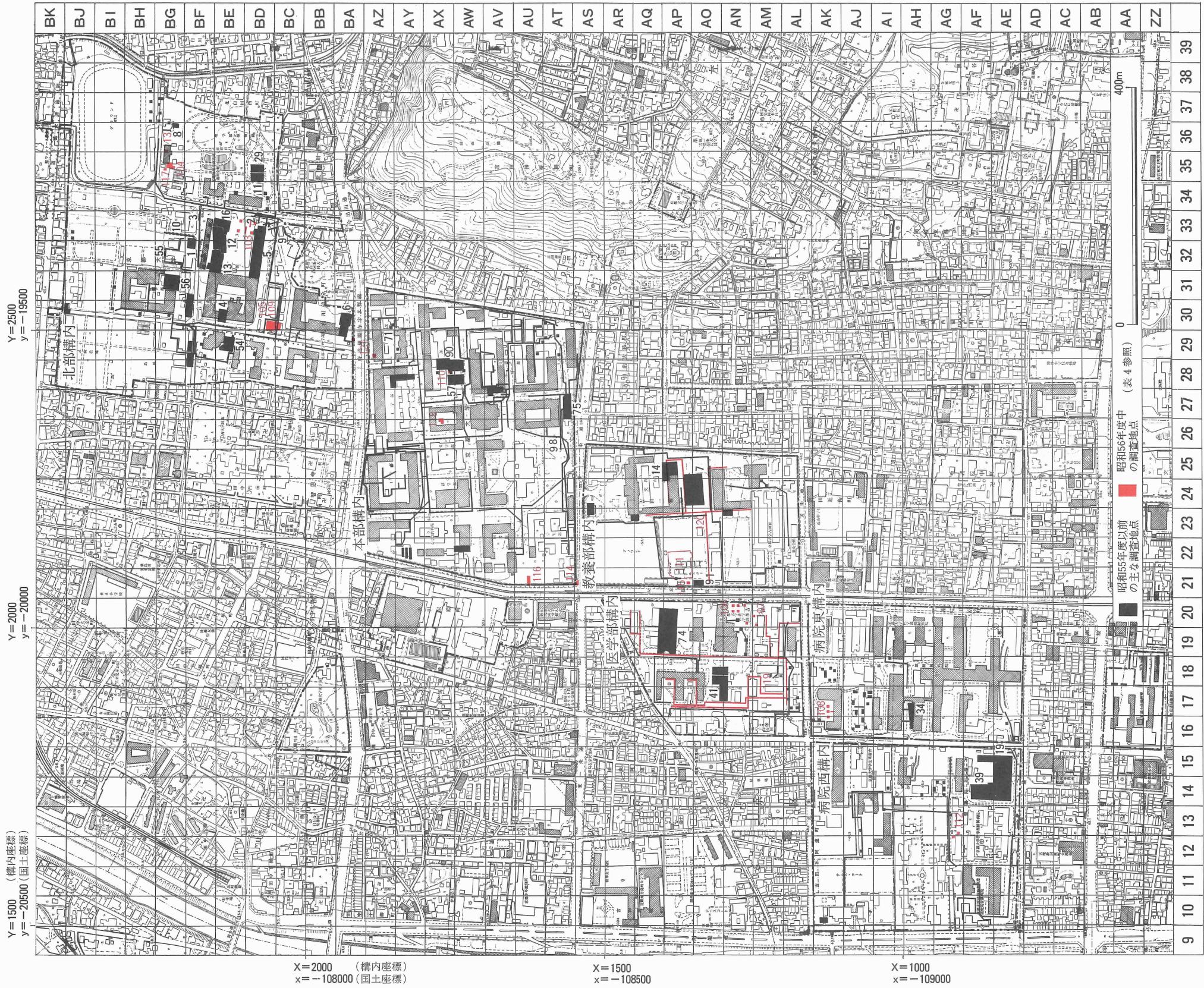
る。その一方で、庄内式の時期の大集落を確認しているという植物園北遺跡や、弥生(中)後期から古墳中期までの多くの遺物を出土している岡崎遺跡などを擁する京都盆地東北部では、有力な古墳は古墳時代を通じて確認されていない。同じころに、山科盆地という閉鎖的な空間の中で栄えていた中臣遺跡でも、それに相応する古墳は存在しない。前期古墳が、「畿内(大和)政権」との一定の関係の下で造営され、庄内式の土器などの広汎な分布から、その契機を弥生後期後葉から、庄内式に至る土器の変化の中に認めうという考え方をとるならば、乙訓地方には畿内の色彩の濃い中海道遺跡の在り方がよりふさわしいといえる。こうした、集落と古墳との関わりを追求することは、従来あまりおこなわれていないが、古墳出現前後の社会を考察する上でも重要な課題である<sup>(34)</sup>と考える。その意味でも、古墳時代中期の方形周溝墓群が新たに検出された京都盆地東北部と乙訓地方は格好の研究材料を提供している。

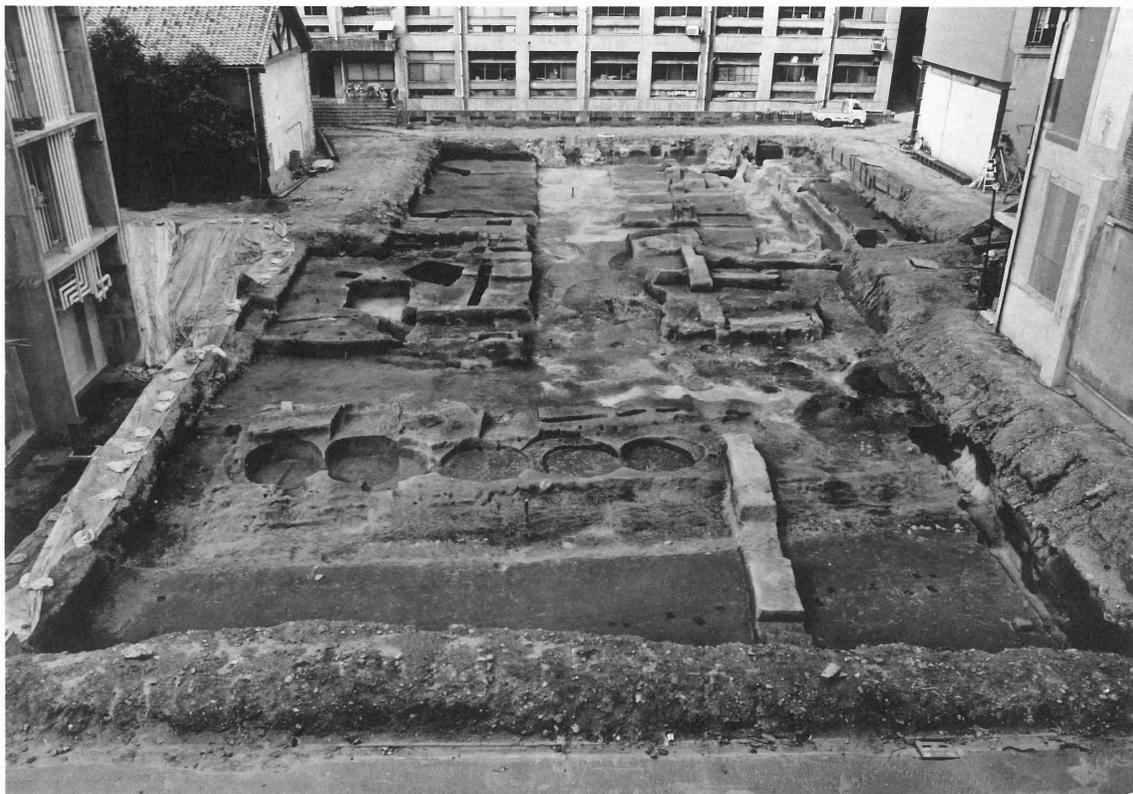
最後に、本資料を採集され、京都大学文学部博物館へ寄贈して頂いた梶谷昭氏をはじめ、都出比呂志、岡内三真、宮本一夫、宮川禎一の諸氏諸兄には、本資料を発表するに際して種々お世話になりました。記して謝意を表します。

#### 〔注〕

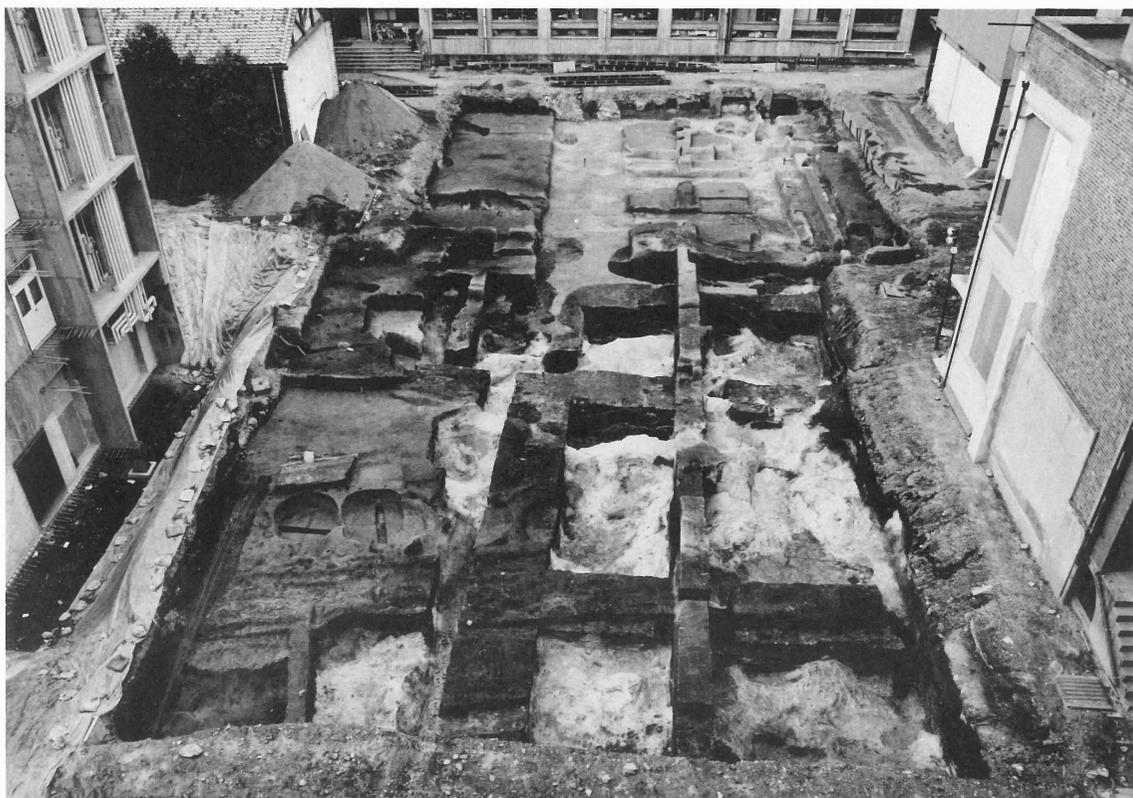
- 1 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』（『京都帝国大学文学部考古学研究報告 第16冊』），1943年
- 2 近藤義郎「古墳発生をめぐる諸問題」『日本の考古学Ⅴ 古墳時代Ⅱ下』，1966年 近藤義郎「古墳以前の墳丘墓」『岡山大学法文学部学術紀要』第37号，1977年など
- 3 田中琢「布留式以前」『考古学研究』第12巻第2号，1965年
- 4 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号，1974年
- 5 京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概要』，1981年，1982年ほか
- 6 京都市埋蔵文化財研究所「植物園北遺跡」『京都市遺跡地図』，1980年
- 7 都出比呂志氏は注4の文献で資料として用いている(p. 28 下段)。また田辺昭三氏は、『京都の歴史Ⅰ 平安の新京』，1970年図27 p. 68において、「東海の地方色をもつ土器」として数点を写真掲載している。
- 8 杉山信三「尊勝寺跡発掘調査報告」『平城宮発掘調査報告Ⅰ』（『奈良国立文化財研究所学報 第10冊』），1961年
- 9 円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査(上)」『仏教芸術』82号，1971年 京都市埋蔵文化財調査センター 梶川敏夫氏の御好意を得て資料を実見させて頂いた。
- 10 現地説明会資料のほか、京都市埋蔵文化財研究所の永田信一・平方幸雄・吉崎信諸氏の御好意により資料を実見させて頂いた。
- 11 大阪市文化財協会『瓜破北遺跡』，1980年 pp. 43-45

- 12 高槻市教育委員会『安満遺跡発掘調査報告書—9地区の調査—』（『高槻市文化財調査報告書 第10冊』），1977年 第18図204 p. 49
- 13 村川行弘・森岡秀人「弥生時代」『新修芦屋市史 資料編第1巻』，1976年 pp. 264-268
- 14 四柳嘉章「竹松遺跡出土の土器」『土師式土器集成 本編1 前期』，1971年 p. 75  
柄崎彰一編『世界陶磁全集2 日本古代』，1979年 図版2
- 15 東奈良遺跡調査会『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅰ 図録編』，1979年 図版92-16
- 16 津屋崎町教育委員会「今川遺跡—福岡県宗像郡津屋崎町今川所在遺跡の調査—」『津屋崎町文化財調査報告書 第4集』，1981年 p. 54
- 17 注12文献 表1 p. 45による。
- 18 高橋美久二ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」『京都府埋蔵文化財発掘調査概報 1979』，1979年
- 19 高橋美久二ほか「中海道遺跡発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第3集』，1979年
- 20 桜井市教育委員会『纏向』，1976年 表75 p. 482に依拠し，外来系土器の占有率15%に，外来系土器に占める近江系土器の占有率5%を乗じた。以上に示した各遺跡における近江系土器の比率は纏・鉢に関するものである。纏向遺跡の数値は明示されていないが，近江系とする土器のほとんどは纏・鉢であると理解する。
- 21 同志社大学校地学術調査委員会「岩倉校地体育講義棟建設予定地発掘調査概要」『同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No. 7』，1976年 p. 24
- 22 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『平安京関係遺跡発掘調査概報』，1975年 第8図E 13 p. 11
- 23 中西常雄『北大津の変貌—弥生時代から古墳時代へ』，1979年 p. 9で器台Aとするもの
- 24 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会『榎木原遺跡発掘調査報告Ⅲ』，1981年 p. 138で器台Aとするもの
- 25 安曇川町教育委員会『南市東遺跡発掘調査概報』，1979年 pp. 24-26
- 26 佐原真「琵琶湖地方」『弥生式土器集成 本編2』，1968年 P. 1. 50-26・27
- 27 杉原荘介「伊勢湾地方」『弥生式土器集成 本編2』，1968年 P. 1. 56-202~206, P. 1. 57-244~246など 大参義一「弥生土器から土師器へ—東海地方西部の場合—」『名古屋大学文学部研究論集』史学16, 1968年
- 28 大阪文化財センター『瓜生堂—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』，1980年 pp. 202-243など
- 29 注27大参論文
- 30 石田志朗・中村徹也『京大物理学部構内遺跡発掘調査の概要』，1972年
- 31 宇野隆夫・岡田保良「京都大学吉田キャンパスの試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』，1979年 pp. 47-48
- 32 岡田保良・吉野治雄「京大理学部遺跡 B E 29区 の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査 研究年報 昭和53年度』，1979年 pp. 25-27
- 33 佐原真「弥生土器製作技術に関する二三の考察—榑描文と回転台をめぐって—」『私たちの考古学』第5巻第4号，1959年
- 34 京都大学教養部構内A P 22区で，TK23～TK47型式の須恵器をとまなう，一辺10m余の方形周溝墓5基，土壇墓1基を確認している。現在調査中。





1 近世遺構全景（南から）



2 中世遺構全景（南から）



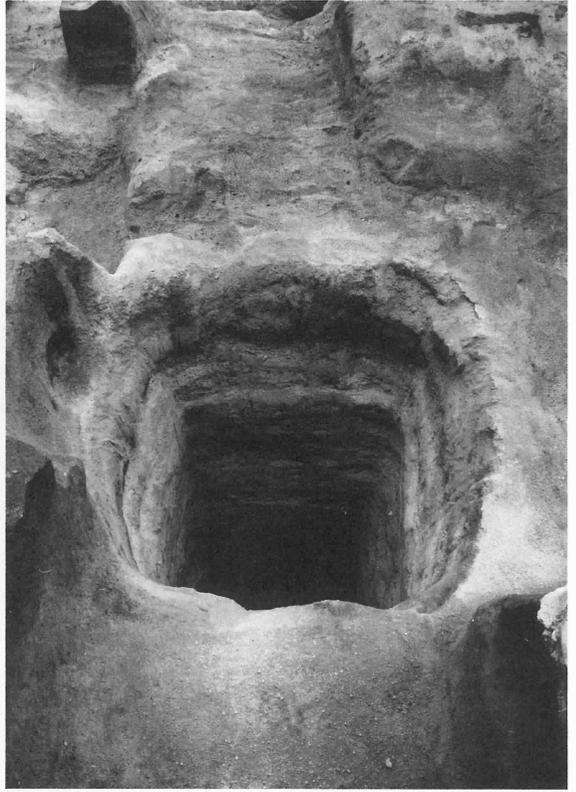
1 道路SF 1, 杭列SA 1, 溝SD18 (東から)



2 道路SF 1, 野壺SE 2~SE 9, 溝SD20 (東から)



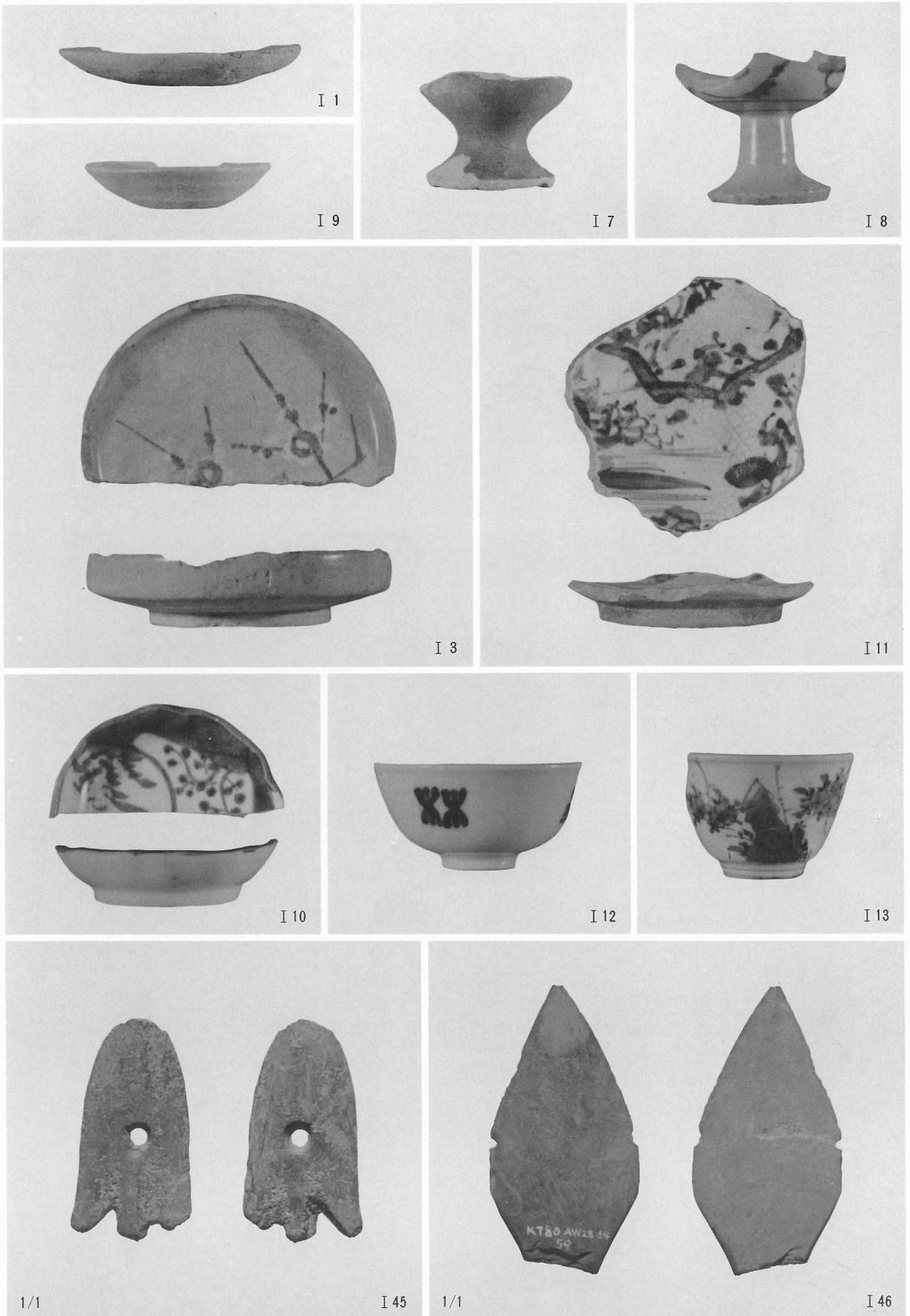
1 建物SB1 (北から)



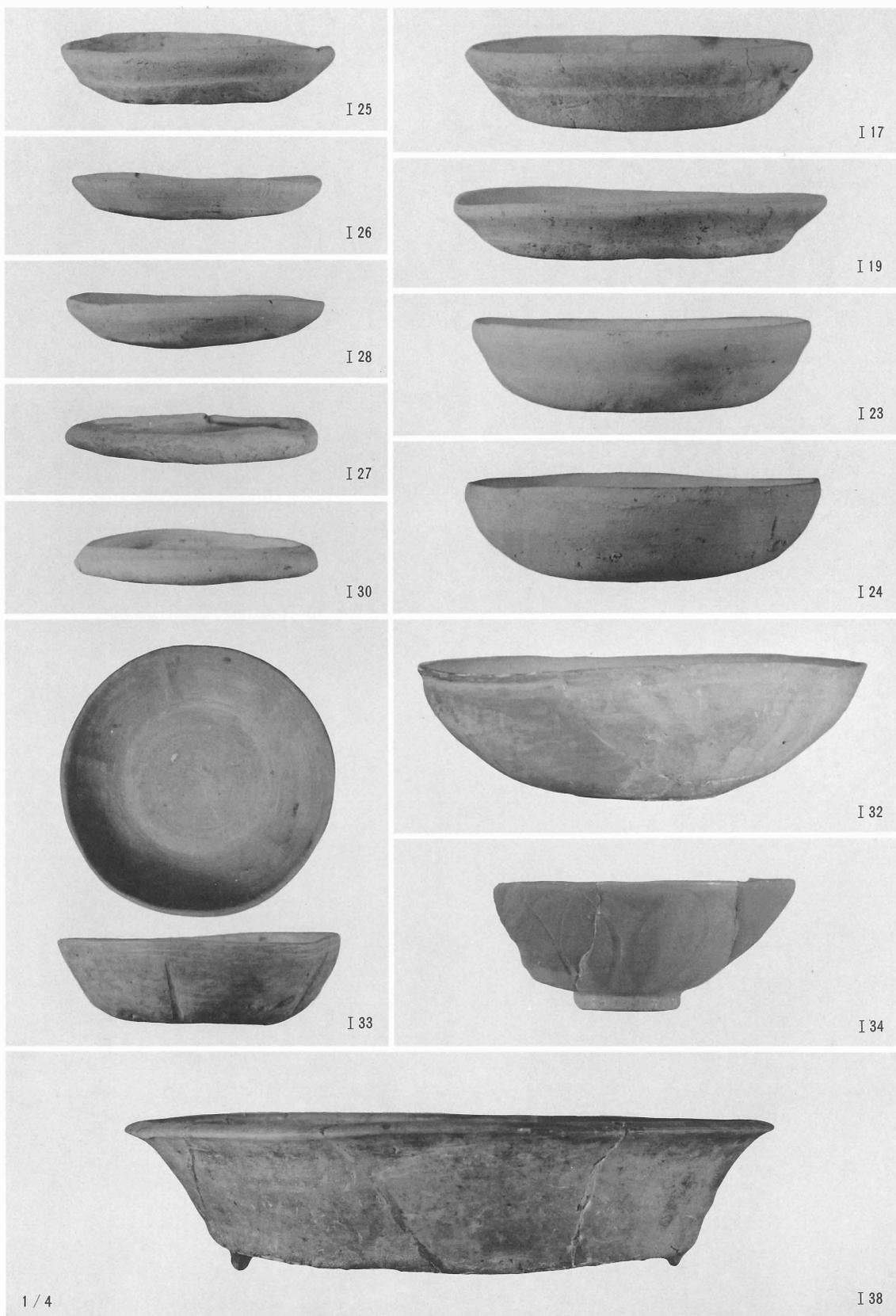
2 井戸SE62 (北から)



3 土器溜SK51 (東から)



SD20出土遺物 (I 1 土師器, I 3・I 7 陶器, I 8 染付), SD18出土遺物 (I 9 陶器, I 10~I 13 染付), 銅鏃 (I 45), 磨製石鏃 (I 46)



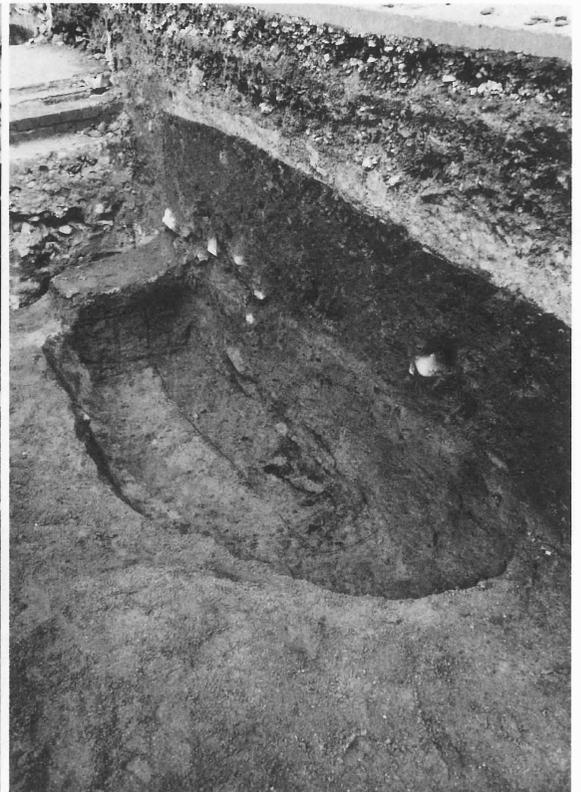
SK51出土遺物 (I 17 · I 19 · I 23 ~ I 28 · I 30土師器, I 32 · I 33 · I 38瓦器, I 34青磁)



1 遺跡発掘後全景（北から）



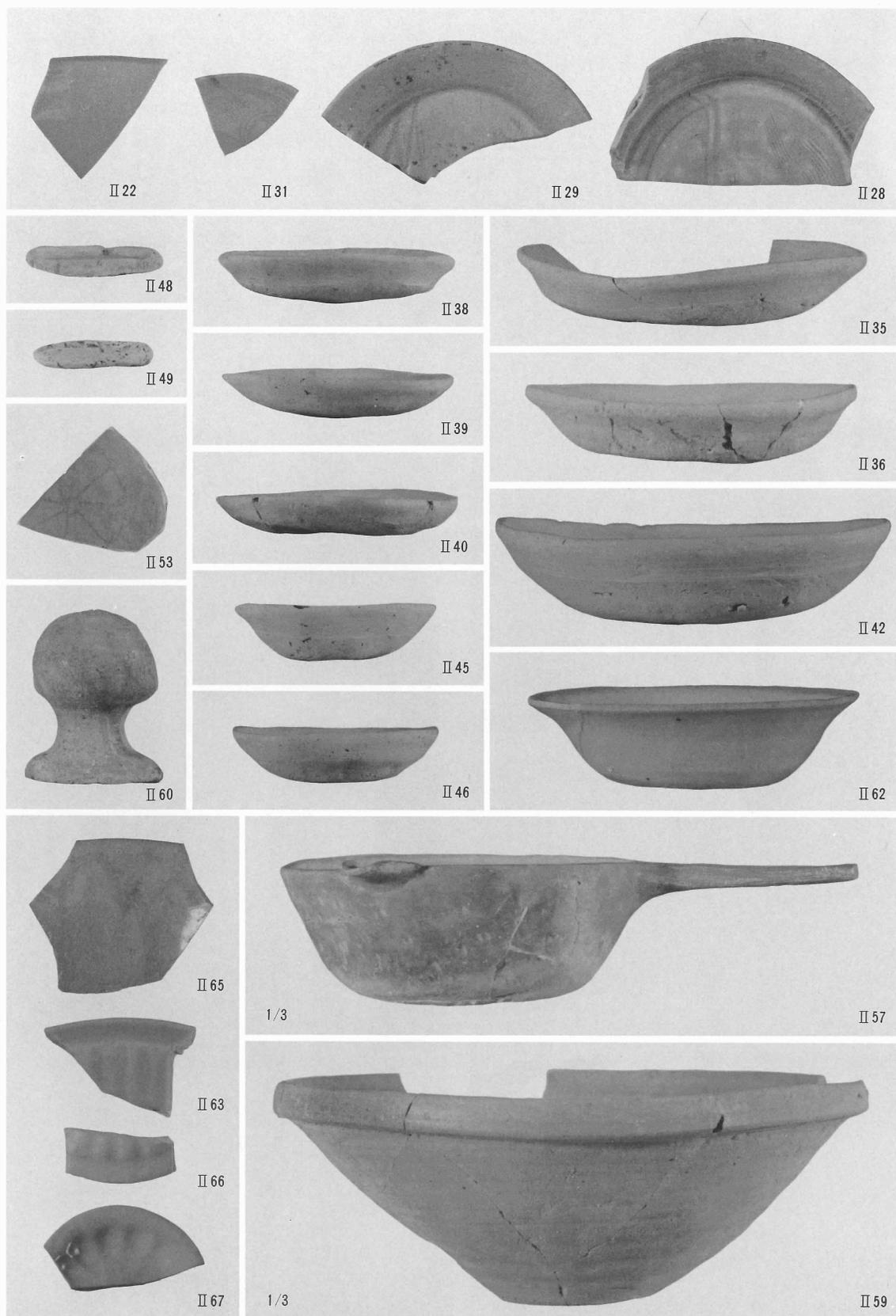
2 土器溜SK1（東から）



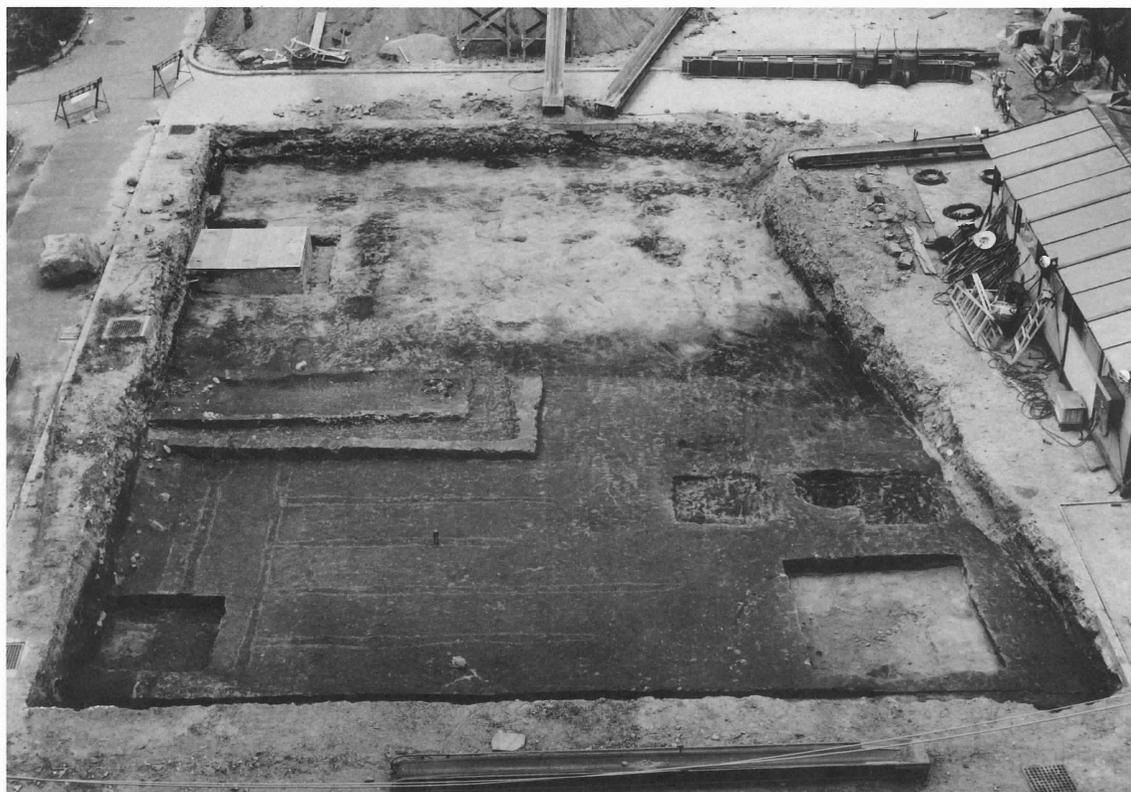
3 土壌墓SK4（南から）



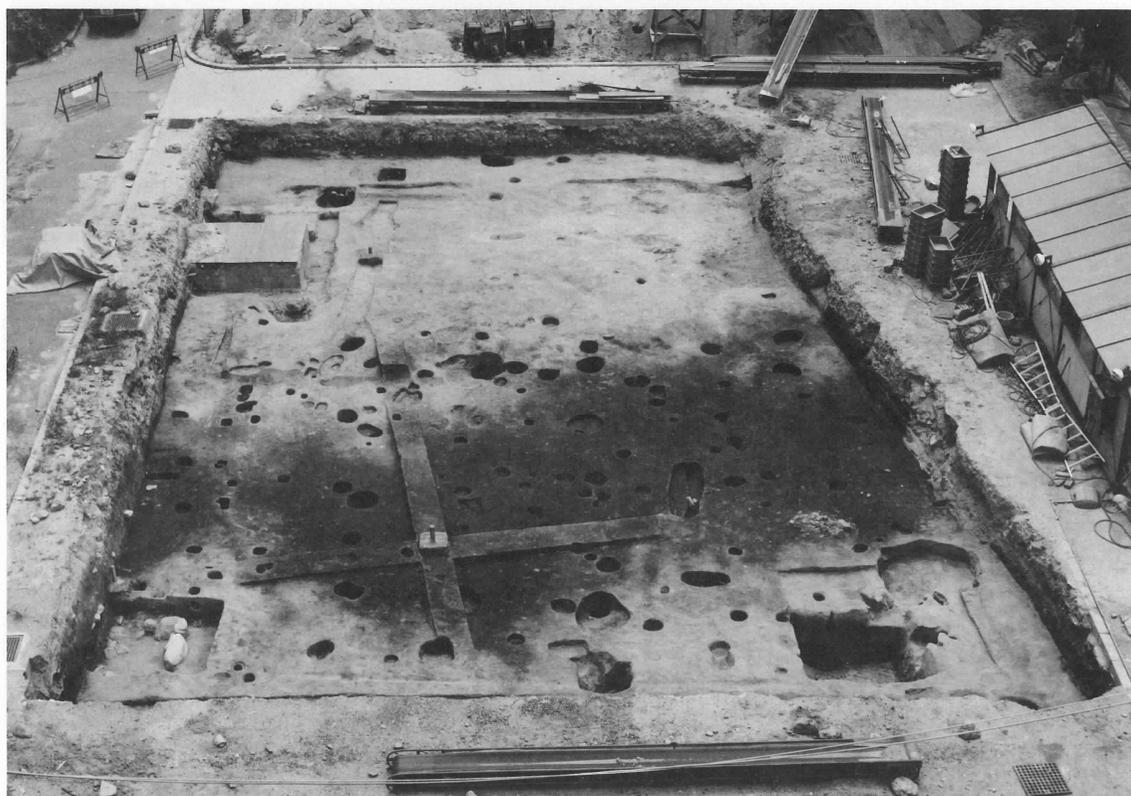
SE 6 出土遺物(Ⅱ 1・Ⅱ 2・Ⅱ 5・Ⅱ 6・Ⅱ 8・Ⅱ 10・Ⅱ 12土師器, Ⅱ 13・Ⅱ 14・Ⅱ 16・Ⅱ 17瓦器, Ⅱ 21灰釉系陶器, Ⅱ 33石製硯)



SE 6 出土遺物(II 22白磁, II 28・II 29・II 31青磁), SE 3 出土遺物(II 35・II 36・II 38~II 40・II 42・II 45・II 46・II 48・II 49土師器, II 53・II 57瓦器, II 59須恵器, II 60瀬戸, II 62白磁, II 63・II 65青磁, II 66・II 67青白磁)



1 近世遺構全景 (北から)



2 古代遺構全景 (北から)



1 調査区東壁の層位



2 土石流 (南から)



1 調査区と周辺の地形（北西から）



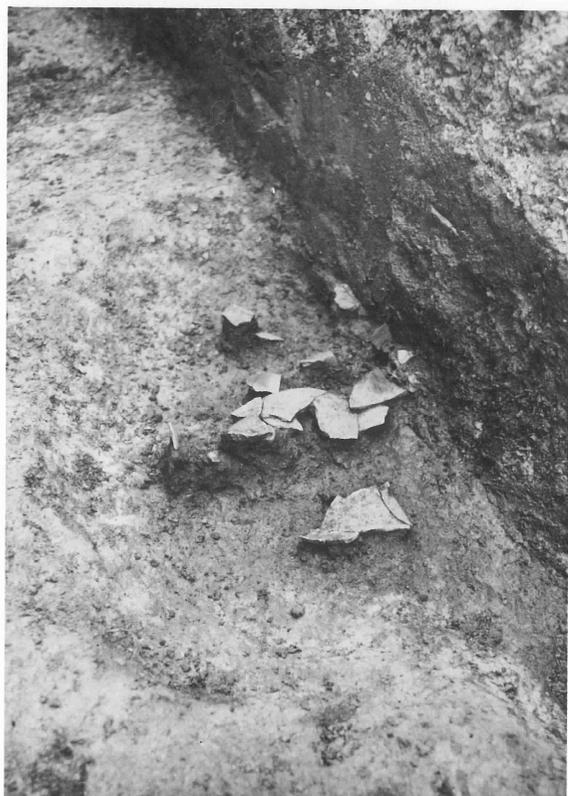
2 土坑SK1検出（南東から）



3 土坑SK3（西から）



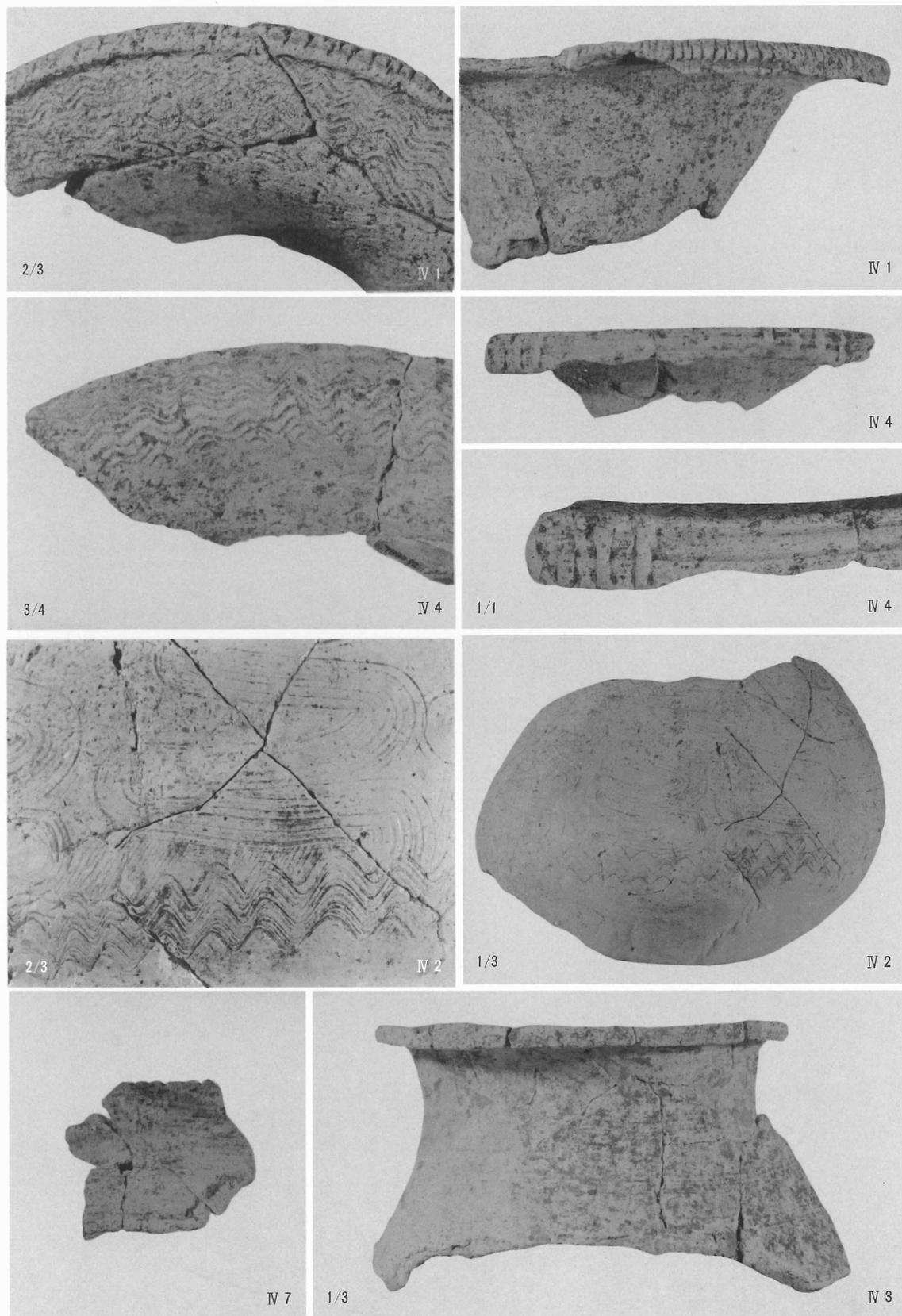
1 溝SD16の検出とSD15 (北から)



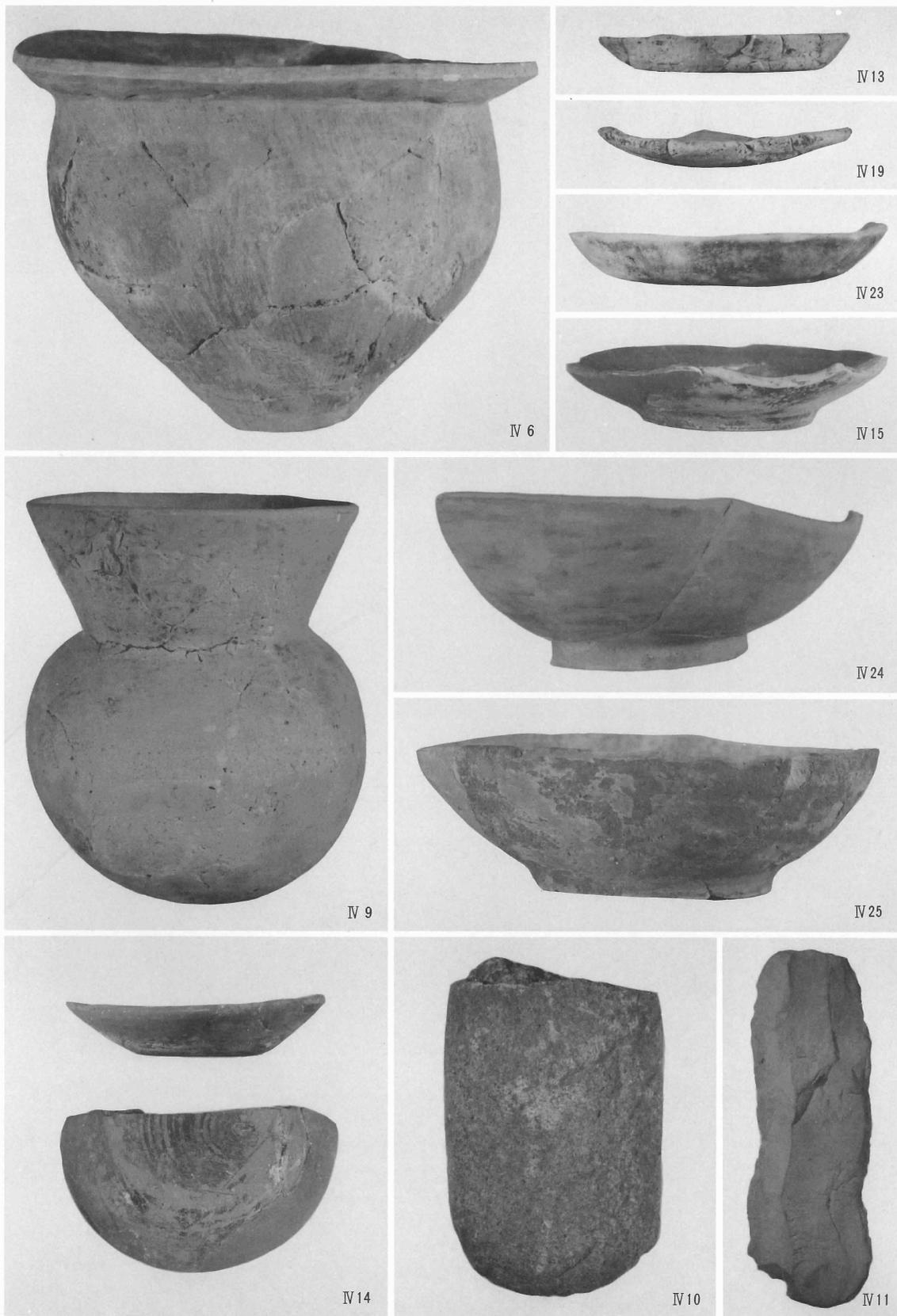
2 土坑SK4 (西から)



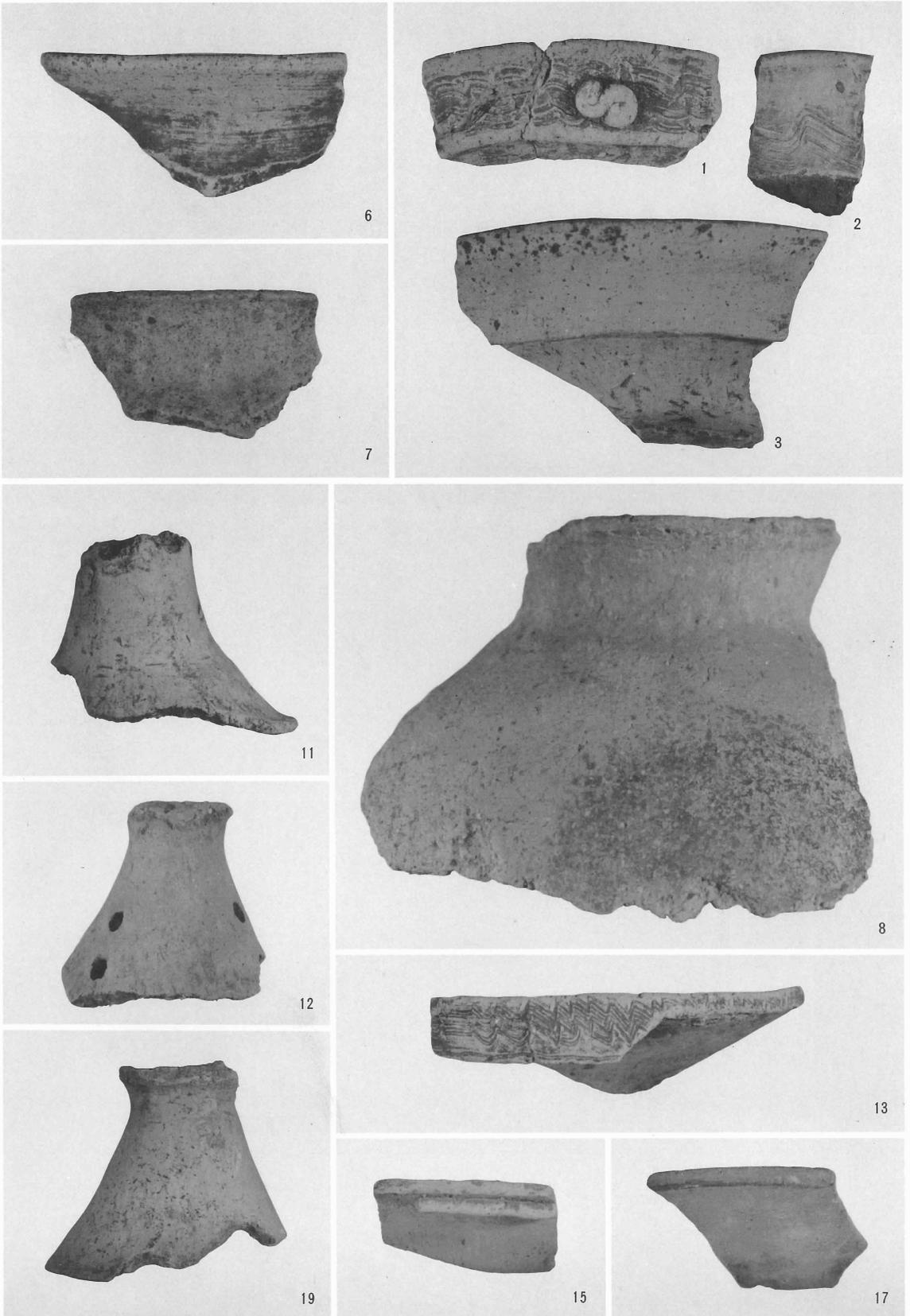
3 溝SD17 (西から)

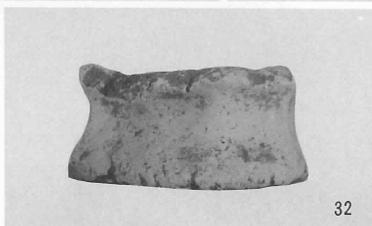
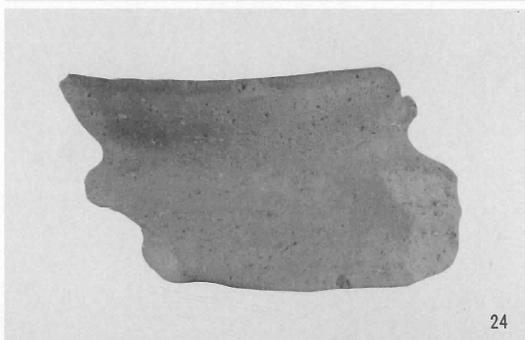
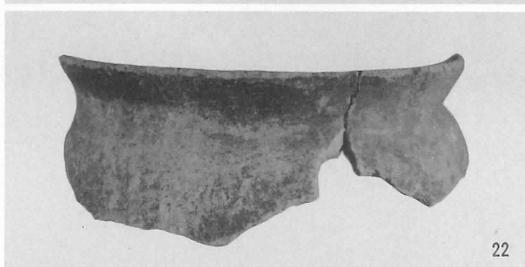
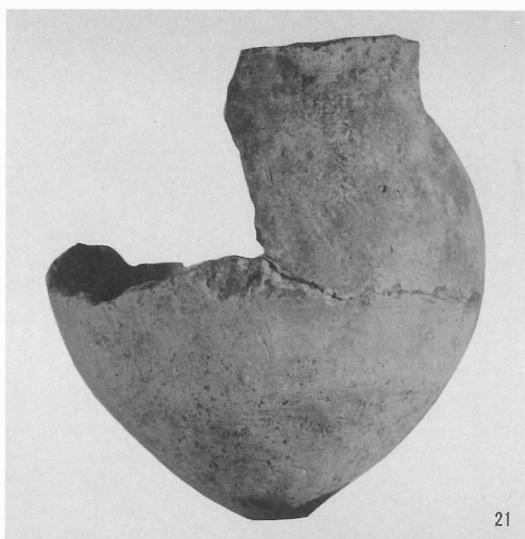
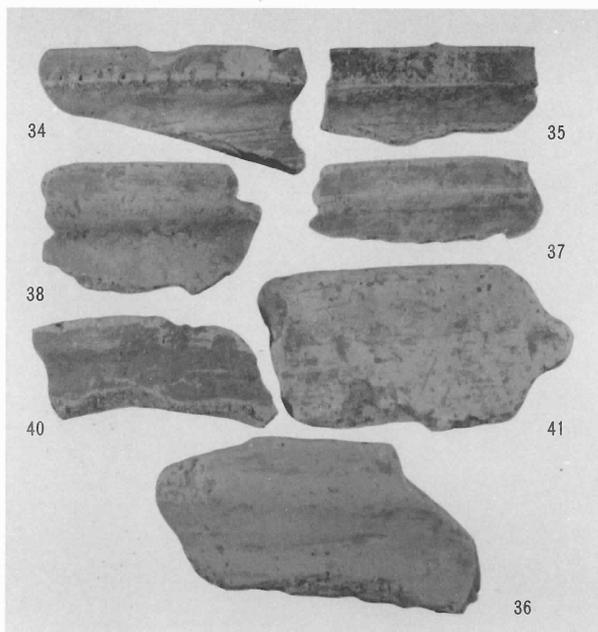


SK 4 出土遺物 (IV 1・IV 2 弥生土器), SD17 出土遺物 (IV 3 弥生土器), 淡茶褐色土層出土遺物 (IV 4 弥生土器), 黒褐色土層出土遺物 (IV 7 弥生土器)



SD17出土遺物(IV 6 弥生土器), 淡茶褐色土層出土遺物(IV 9 土師器), SR 1 上層出土遺物(IV10石器), SD15出土遺物(IV11石器), SB 4 出土遺物(IV13土師器, IV14・IV15黑色土器), 黒褐色土層出土遺物(IV23・IV24瓦器), SK 2 出土遺物(IV25瓦器)





昭和58年2月24日印刷

昭和58年3月31日発行

# 京都大学構内遺跡調査研究年報

昭和56年度

編 集 京都大学埋蔵文化財研究センター  
発 行 京都市左京区吉田本町

印 刷 山代印刷株式会社  
製 本 京都市上京区寺之内通小川西入

正 誤 表

		誤	正
本文	vii頁 6行	『兼見卿記』	『兼見卿記』
	36頁 21行	IV 1 2	IV 1 1
	66頁 注3	記念史学論文	記念史学論文
	67頁 見出し	南御所採集	南御所町採集
	68頁 23行	3 遺 物 ( 図 4 2 ・ 4 3 )	3 遺 物 ( 図 版 1 6 ・ 1 7 , 図 4 2 ・ 4 3 )
図表	15頁 図 1 0	元禄 4 ( 1 6 9 2 ) 年	元禄 4 ( 1 6 9 1 ) 年
	38頁 図 2 8	IV 2 1 ~ IV 2 4	IV 2 2 ~ IV 2 4
	61頁 表 5-1 8 行	馬場之本 一本	馬場之木 一本
図版	1 4	S K 4 出土遺物 ( IV 1 ・ IV 2 弥生土器 )	S K 4 出土遺物 ( IV 1 弥生土 器 )
	1 4	S D 1 7 出土遺物 ( IV 3 弥生土器 )	S D 1 7 出土遺物 ( IV 2 ・ IV 3 弥生土器 )